益城町文化財報告第２集

文化財資料



益城町教育委員会

はじめに

益城町の広報紙に町の文化財の概要を読み易く連載始めて数年を越えた。その間、文化財保護委員を始め多くの志ある方々の寄稿のもとに、町の文化財・遺跡の紹介を続けたが、意外と反響も大きく近来町の郷土史について簡単に教えてほしい手頃の参考書はないかとの希望も相継いだので、この連載を急遽一冊にまとめる事にした。なにしろ忽忙の間の集録なので、編集・文体の統一あるいは考証など意に任せず、不備のまま出版してしまった。

しかし、集めて見ると意外に量もある様なので望外の喜びである。

ここに紙上を借りて寄稿下さった方々へお礼をのべると共に、誠に小冊子であるが、町の歴史に興味と関心をもつ人々の、座右の書となれば幸である。

昭和五十八年三月

益城町教育委員会

益城町文化財資料　目　次

(一) 益城町文化財のあらまし …… 6
(二) 町史探訪 …… 11
1. 赤井・木山城の由来 …… 11
2. 津森城の由来 …… 11
3. 福田寺跡 …… 12
4. 飯田山と常楽寺 …… 13
5. 道安寺と清正公 …… 14
6. 津森神宮由来記 …… 15
7. 木山神宮由来記 …… 16
8. 馬水の寺跡一 …… 17
9. 馬水の寺跡二 …… 18
10. 福富の寺跡一 …… 19
11. 福富の寺跡二 …… 19
12. 安養寺と内寺の薬師如来 …… 20
13. 千光寺の供養塔 …… 21
14. 赤井城の落城と福原の観音堂 …… 22
15. 安永の香の木さん（安永の寺跡） …… 23
(三) 郷土の史蹟をたずねて …… 25
1. 津森を往く …… 25
2. 飯田山登山道路 …… 26
3. 古閑の放牛地蔵一 …… 26
4. 古閑の放牛地蔵二 …… 27
5. 谷川の放牛地蔵 …… 28
6. 再び谷川の放牛地蔵 …… 29
7. 稚児の塔 …… 29
8. 浄信寺の五輪塔 …… 30
9. 下陳の五輪塔群 …… 30
10. 芭蕉の塞の神 …… 30
11. 旧在福田寺五輪塔 …… 31
12. 安養寺跡板碑 …… 32
13. 山法師塚の板碑 …… 32
14. 福田寺廃寺跡 …… 32
15. 上砥川の衣替の弥陀 …… 33
16. 下砥川神社の板碑 …… 33
17. 土山岩崎氏宅の六地蔵 …… 34
18. 土山の六地蔵 …… 35
19. 旧在福田寺板碑 …… 35
20. 飯田山常楽寺 …… 36
21. 飯田山常楽寺の三尊仏 …… 36
22. 飯田山と俊芿律師 …… 37
23. 飯田山常楽寺中世の石造物 …… 38
24. 飯田山と円斉豪澄 …… 38

25. 飯田山常楽寺と小西行長 …… 39
26. 飯田山常楽寺に違い鷹の羽の墓 …… 40
27. 道安寺考一 …… 41
28. 道安寺考二 …… 41
29. 閻魔堂下の板碑 …… 42
30. 山の神と小田直翁 …… 43
31. 古里の文化財を訪ねて …… 44
32. 坂本家之碑 …… 44
33. 三竹の影向石 …… 45
34. 道上馬場の荒神その他 …… 45
35. 赤井の天文碑 …… 46
36. 大地蔵二基 …… 47
37. 四賢婦人誕生地の碑 …… 47
38. 忠魂遙か雲に声あり …… 49

(四) ふるさとの地名漫歩 …… 51
1. はじめに …… 51
2. マシキ（益城・萬志岐・真敷） …… 51
3. ツモリ（津守・津森） …… 52
4. キヤマ（木山） …… 52
5. オヤツ（小谷） …… 53
6. カワツダ（河内田） …… 53
7. マミズ（馬水） …… 54
8. アカヰ（赤井） …… 54
9. ハカマノ（袴野） …… 55
10. ハイヅカ（灰塚） …… 55
11. マエダ（前田） …… 56
12. ホリのウチ（堀の内） …… 56
13. トガワ（砥川） …… 57
14. インのババ（犬の馬場） …… 57
15. テラサコ（寺迫） …… 58
16. ふるさとの地名漫歩（平田） …… 58
17. ふるさとの地名漫歩（沢津原・柳水） …… 59
18. ふるさとの地名漫歩（古閑） …… 59
19. ふるさとの地名漫歩 …… 60
20. ふるさとの地名漫歩 …… 60
21. ふるさとの地名漫歩 …… 61

(五) 附　録 …… 62
1. 益城町文化財を訪ねる会研修 …… 62
飯田山常楽寺
2. 益城町最大の五輪塔発見 …… 63
（在西原村）熊日紙
3. 板碑に梵字六地蔵（熊日誌） …… 64
4. 木山城跡に古墳（城の本）発見（熊日紙） …… 65

益城町文化財のあらまし

I

益城町の文化財は、国・県の指定を受ける程の、いわゆる学術上価値が高いものは現在発見されていない。しかし、現在の我々の生活は、有名無名の先祖の汗の結晶を享受しているのであり、とすれば、学術上の価値の有無は別として、先人の哀歓を秘めた遺物は大切に保存し、子孫に伝える責任があると思われる。その意味で益城町の文化財を有形無形の文化財に大別して、略記してみたい。

一、寺　跡

(1)飯田山常楽寺

飯田山（四百三十一メートル）の八合目にある。天台宗の跡といわれた寺で、第三十代敏達天皇の御代、百済より来朝の名僧日羅正人が開基し、千手観世音菩薩と、九重塔を持ち帰ったと、肥後国誌は伝える。肥後の名刹として名があり、この寺の歴史には名僧俊荏木山城主木山左近大夫惟久（紹宅）あるいは飯田山再興の祖、円斉豪澄など多くの名前がちりばめている。細川時代は細川候の尊信も受けたが、その頃は寺運も盛んであったろう。

今は落魄して、物さびた境内には、例の九重塔や宝篋印塔が残り、各所に歴代住職の墳墓が苔蒸している。他に山門と乱れ積みの石段が寺の歴史を物語る。山門内の仁王像二体は欠損しているが、この仁王の股をくぐると天然痘を防ぐとの信仰がある。

山頂には白山権現社があり、そばに民話で有名な金峰山との背比べの池がある。今は水も涸れている。かつては霊場飯田山への旧参道の路傍に、一丁毎に地蔵が立ち並んだが、今は失なわれて数体残るのみである。これを一丁地蔵と言う。今は楽しいハイキングコースである。

(2)尾峰山福田寺

朝来山（四百六十四メートル）の中腹にある福田寺跡は、古文書にも早く表われたと言われるが、今は幻の寺として確たる文献もない。かつては三十六坊（あるいは七十二坊）と十二門天台宗の大寺であったと伝える。しかし、天正十六年小西行長の為焼亡したという。大正時代まで林立した石塔、板碑類は当時多く失なわれ、今は三枚の板碑と十数基の五輪塔残欠を残すのみである。板碑には、永仁五年、大永四年、大永六百、永禄七年などが在銘するので、その当時に存在した証明になろう。山中各所に寺跡を示す大門・経塚・花殿・一の香・行者滝などの地名が残る。途中に「鬼の岩屋古墳」として登録された古墳がある。この古墳を舞台に「土蜘蛛退治」伝説と、「朝来山の鬼退治」の民話がある。

(3)大楠山安養寺

延暦年中に弁善大師の草創と伝えられる本尊は医王善逝薬師如来といわれこれも弁善大師の作と言う。天文二十三年十二月七日に猛火のため焼失、弘治三年に再興されたと記録にある。その後衰微して、明治末期頃までは建物もあったと言われる。今は完全に滅びて、寺屋敷といわれる所に空井戸と苔蒸した礎石を残すのみである。付近に「景清伝説」による左の目神社がある。

(4)香雲山道安寺跡

木山城主木山氏の菩提寺といわれる。道安寺の由来は、木山氏の祖である新田貞昌が、当時南朝方に属し正平十二年、懐良親王に従って九州に入り、文中三年三月太宰府の合戦で負傷し、菊池に帰り死亡した。山鹿日輪寺に葬り法名を雲亦院道安と言ったが、享徳三年、木山左近太夫惟政の弟月丸が僧となり、月耽和尚と名乗った。この僧が木山に菩提所を建て、山鹿より先祖の霊を移して、道安寺と名付けたのである。全盛時は二町四方の広さであったと言うが、天正年間佐々成政の為焼絶したと言う。現在の道安寺ではない。

(5)龍池山千光寺

津森校区の下陳にある。津森城主光永氏の菩提寺と言われる。本尊は千手観世音で一丈一尺の大きさである。境内に歴代住職の古墳が残るが、堂内の千光寺縁起絵馬によれば、百済の日羅大師の開基とあるが、この点は飯田山と同様確証はない。唯、絵馬はかつての千光寺の規模を示すものとして興

味深い。

(6)他にすでに廃絶して、名前のみ残るか、痕跡を残す寺々は次の通りである。一、馬水寺　二、大仙寺　三、二尊寺　三、東福寺

II

前回は町内各所の寺蹟の概要を紹介したので、今回は、それらと関連性のある石造物についてあらましを述べてみたい。

益城町に散在する石造物は、五十三年七月現在で、筆者の調査では次の通りである。

一、石仏（単体…九九体、六地蔵…三体、四方仏…三体）　二〇体
二、板碑（いたび）　二基
三、宝篋印塔（ほうきょういんとう）　二基
四、碑伝（ひで）　一基
五、五輪塔　十数体（含残欠）
六、六十六部廻国塔　一体
七、九重塔　二基
八、猿田彦　二十体
九、一字一石塔　一基

なお、この他に今後宅地造成や基盤整備などで、山や藪が切り拓かれると、思わぬ処に忘れ捨てられた、先祖の信仰の跡が発見される可能性が強い。又これとは別に、各種の顕彰碑や記念碑、道標（みちしるべ）などが散在している。

一、石仏（単体）

これはいわゆる道端の地蔵さん、の愛称で親しまれるものの類であるが、すべてが地蔵尊ではなく、実際には、地蔵の他に阿弥陀如来とか、観世音菩薩なども含まれている。

本町の石仏のうち、在銘で一番古いものは、上砥川部落に安置される。阿弥陀像である。高さ四尺ばかりの浮彫りで、左肩に宝治二年（一二四八）とあり、鎌倉末期の作である。次に古いのは、木山の市之後部落にある地蔵で、台座に元禄九年（一六九六）の銘がある。以後は明治まで在銘の石仏が分布するが、大体江戸末期が多い様である。珍しい地蔵では、「放牛地蔵」が二体ある。谷川（たにご）部落に百七体目で享保十七壬子年十月。古閑部落にあるのは、享保十五庚戌年五月で七七体目である。

別に寛永時代の地蔵があるとかで発見が期待される。又、九五体の中には数えていないが、各地の墓地の中に、幼児の墓としての地蔵があり中には双体のものがある。おそらく双生児の夭折を葬ったのであろうか。

二、六地蔵（石幢（せきとう））

一本の石柱に六体の地蔵を彫ったもので、地蔵が六道を輪廻転生する象生を救済すると言うことから、六つの分身を考えて六地蔵としての信仰から始まったと言われる。

一体は優に三メートルは越えると思われ、木山神宮下の道路脇にある。傘つきの立派なもので銘はない。これは昔は木山の四ツ角にあり、次に専寿寺の附近に移され、後木山橋の袂にあった。木山橋の改修工事で現在地に安置された。一体は人身大であるが、土山部落の県道脇にある。この県道と直角に交る道路は、かつての霊域飯田山への参道といわれ、この参道沿いに建立されたものであろう。嘉永二〇酉年五月安〇村石工半兵〇の銘がある。

この参道には、別に一丁地蔵の名前で知られる石仏類が、大部分は失われて数体残る。

もう一体は、元は小池部落へ県道から交る三叉路にあったが、今は土山の岩崎氏邸内へ移されたといわれる。筆者は未見である。

三、四方仏

四方仏は宝篋印塔や層塔の一部として作られ（石仏事典）るが、本町で発見されたのは四方仏ばかりで他の部分はないので、塔の残欠であろう。像はいずれも崩れている。

二、板碑（いたび）

この中に碑伝を加える人もあるがこの場合は自然石に仏像、又は種子を彫り願文等の入ったものと解して本町の二十体はすべてそれである。二十体のうち一番古いのは永仁五年（一二九七）で、南北朝時代である。

以後一五〇〇年代に集中しており例をあげると、大永・永禄・天文・弘治・元亀・天正と続く。大部分は自分の尊崇する仏を像又は梵字で彫り、有難い経文等を入れ自分の法名あるいは、供養すべき有縁の人々の法名を刻んでいる。折からの戦乱の時代、現世の忍苦を忘れ来世の極楽を希い、自分を生前に葬った逆修碑が大部分である。地蔵にしろ、この板碑にしろ、庶民達の生活の困窮と来世の幸福を祈る気持ちが、これらの遺物から如実に窺われる。

なお、三・宝篋印塔以下については次回に述べたい。

III

前回に引き続き石造物を述べてみたい。

三、宝篋印塔

この塔はその中に「宝篋印陀羅尼」と言う呪文を摺ったものなどを納める塔で、その由来は省くが、これを供養する事によって、堕地獄の亡者も極楽に転生し、生きている間は災害から逃れる、との信仰がある。源流は中国で作られた金銅製の塔である。

益城町にはこの様な塔は二基あるが、その一つは、津森校区の北向部落にあり地元の人は「稚児の塔」と称する。後述の碑出と同じ丘のミカン山の中腹にある。現在、相輪は失なわれ、又基壇も別なものを新に据えた様で、その意味では全体の統一性を欠くが、一見して重厚な作である。塔身には金剛界四仏の種子（ウン「阿閃」アク「不空成就」キリーク「阿弥陀」タラク「宝生」）が彫ってある。

現在の大きさは、笠上部まで一四七センチ、基礎高四七センチ、六二センチ四方、塔身二六センチ、二二センチ方である。

この塔には銘文がなく、建立年代は不明であるが、五十三年五月十四日、この塔を訪ねられた福岡県文化財保護審議会専門委員で、「九州の石塔」の著者、多田隈豊秋氏は当日詳しく調べられ「この型式は鎌倉期の作風であるが、今と違い中央と地方の文化の交流は速度が遅いので、中央ではすでに流行遅れになった型式を、まだ作っていたとも考えられるその点も考慮に入れると、南北期前期であろう」との見解を示された。

いずれにしても、益城町に現存する唯一無二の、中世の宝篋印塔である。

次の一基は、飯田山常楽寺の境内にある。この塔は大きすぎて実測をしていないが、基礎の石垣を加工し地面から三メートル以上にあり、基壇には文改十一戌子（一八二八）、抄冬吉辰八万〇千内、〇主人、豪潮記、時年八十、造塔施主白木儀右衛門、方畏謹建の銘文がある。豪潮は江戸時代の名僧で、名利に全く無関心で、末法の世の派閥と無気力を覚醒する為に独特の様式をもった大小の宝篋印塔の建立を悲願とした。その中の一基がこの飯田山常楽寺の塔である。

なお他に「村山形部大輔逆修碑」文明十一年（一四七九）五月、の在銘の残欠が、この境内に残る。（アマチュアの春秋、永田日出男著）別に町内各地に四方仏が残るが、この四方仏は古い時代には宝篋印塔や層塔に用いられたので、宝篋印塔は昔はもっと有ったのかも知れない。

四、碑伝

板碑の一種であるが、前号に述べた板碑と区別して、碑伝の名称をとる事にする。

これも前述の津森の北向に宝篋印塔と同じ丘の、これは山頂にある。ほぼ西に向って建っており銘文はない。この碑伝の由来は多くの説があるが、多田隈氏は修験者が入峯する時、自分の入峯の記録として立木を削り、この白木の部分に梵字で仏の御名や、その他のものを書き、自分達の勢力範囲を誇示したものが、次第に保存の効く石造物に変ったとの説を紹介されたが、これは必ずしも定説ではないとの事。いづれにしても全高一九三センチ、幅五三センチ、厚さ上三十、中二三、下三二センチの堂々たるもので、熊本市文化財保護委員の森下功氏に数日前お会いした時、熊本県内にはこの碑伝はわずかに五基しかなく、その中でもこの碑伝が最高であると言われた。多田隈氏も「この碑出は鎌倉末期で、先の宝篋印塔と共に県内でも大変貴重な資料である」と言われて帰られた。

この碑伝は地元の人は「影向石」（神の降臨又は示現を影向と言い、示現された石を呼ぶ。神の座と信じられた盤座）と呼び、津森宮由来では欽明帝二年九月二十九日午前二時、神武天皇がこの石上に立たれ、これを知った時の国司藤原法昌は、直ちにこの地に参じて社を作った。そして入江であった益城平野は一面に水田と変じ、忽ち森となる。故に津森と言うと。このロマンを秘めながら二つの石造物は今も津森の沃野を見下し、千古の歴史を物語っている。戦国の兵乱に多くの資料を失った我益城町にとって、この遺物は中世を語る貴重な資料である。

(IV)

今回は新年なので、少し肩のこらないのを書いて見たい。我々は新年とよくネンの言葉を使うが、このネンには古代人の切ない希が

こもっている。昔の地蔵や板碑を調べていると、よく天保九稔、元禄八稔の字にぶっつかる。この稔は年と同じ言葉である。年は又歳である。その年の名を冠した祭神あるいは地名が、益城町には現在判明しているだけで八ケ所あり、別にそう思われるのが一ケ所ある。その中で一つだけ例をあげたい。

益城町秋永に「年の神」と称する神様がある。御神体はいわゆる陽石の道祖神である。

道祖神は猿田彦、庚申塚、金精様、あるいはサエの神など、時代が下る程様々の呼名・性格・信仰形態などが摺合付加されて、元の形とは変ってしまい、この方面だけで専門の研究書が多く出版されて、仲々一口には説明ができない。それは暫く措くとして、秋永の御神体は、一体は高さ二四センチ、円周八〇センチ程の人工陽石で、これが四五センチに三七センチ、厚さ七～十四センチの楕円形の板石に乗せてある。これを女陰と見るか、単なる台石と見るかは、観察者によって異なるが、元々この信仰は女陰崇拝から男根崇拝に変って来たので、私は女陰の象徴ではないかと考えている。もう一体は高さ二五センチの自然陽石で、他にも陽石を思わせる石が数体、同時に安置される。写真の御神体は、飯田山常楽寺にあるものであるが、この様に極めて象徴化されて、その知識がなければ仮に路傍で発見しても、単にきれいな石だな位にしか見えないと思われる。

話は秋永に戻るが、この神体は、「阿瀬美長者」の祭神として祀られ、ここに長者伝説が残る。この「アセビ」と言う姫にもまが欲しい名前と、隆々たる陽石とはピンと来ないが、「さいの神」の伝説には、姫と呼ばれる事が多い（酒井冨蔵著、国東半島の「さいの神」）そうだから、このアセビの名も案外そんな処かも知れぬ、これとは又別に、アセビの呼名は「古代においては、朝（アサ）朝（アシタ）明日（アス）と言う言葉は、同じ語幹を共有する言葉……」（井上辰雄著「熊本の地名　上」）であるから、これらと同系統の言葉かも知れず、福田の朝来山と同じに、朝日、夜明けなどの意味をこめた、古代人の信仰に基づく命名かも知れない。

では「年の神」とは何であろうか、前述した様に、年とは稔であり文字通りミノリの神である。春作物の種を播き秋にとり入れる。そして人々はその冬をおくる。そして又春が来る。それが一稔であり一年である。つまり「年の神」とは「収穫神」である。日本が飽食できる様になったのは、近々二十年前からである。それまでは慢性の食糧不足であった。ましてや、古代人にとって食物の多寡は、正に生命につながった。為にその希は必死のものであったろう。大自然の猛威に身を委せる古代人は、心から収穫の神を祀った。古代人はその体験から人間であれ動物であれ、すべて女体から生まれる事を知った。しかし生理の知識の皆無な古代人にとって、すべての子孫を生み出す女陰は、正に神秘そのものであり神であったであろう。為に年の神は始めは女陰であったが、人智が進み女性は受身であり、男性こそその根源であると知った時、女陰崇拝が次第に、男根崇拝に変ったのである。しかし女陰崇拝が根絶した訳ではなく、併置する様になった。その意味で私は秋永の台石は、女陰であろうと考えている。飯田山のも両方が祀ってある。

この性器崇拝は極めて古い信仰である。特に秋永は、いわゆる「秋永遺跡」で有名で、この祭神はこの中にあった。ここは水田跡あり、住居址ありで「約二千前の弥生式住居跡や、古墳時代の大集落跡、周濠襲棺、箱式石棺、方形溝墓と共に、中世の青磁・白磁等の貴重な文化財が発見された……」（阿蘇美長者の碑）処で、先住民族繁栄の地である。

この遺跡に古代人の信仰が、長者伝説となって残り、名を替え所を変えながら、村人達に大切に守られている。新しい事を言う様に見えても、結局我々は、古い古い時代の残渣を有形無形に曳きながら、生活しているのであろうか。

(V)

五、廻国塔

廻国塔は経典供養塔のうちの、納経塔の一種であるが、これが益城町に一基存在する。

場所は津森校区の寺中公民館の付近、地蔵堂の横にあり、頭部には宝珠と蓮華をつけた立派なもので、基壇から宝珠まで高さが二メートル八十五センチある。塔の表に奉納大乗妙典六十六部供養、そ

のすぐ右に小さく、天下泰平・願主・当村松右衛門、左に五穀成就、脇願主当国慶祐と三行に彫ってある。又塔の右側面には、天保九戌戌八月二十四日建之とあるので、天保九年は一八三八年であるから、今から一四一年前の建立となる。

この六十六部は「法華行者、日本六十六ケ国に各一部の妙典を霊場に納めんために、廻国すると、六十六部廻国聖と言う。常に六部と略称す（仏教大辞典）とあり、又「是一国に一部の大典其の国の霊場に、納めん願いにてありしなり。」…案ずるに是れ伝教大師の六塔婆の志願に倣うものなり（同）とあるので、この廻国塔建立の思想なり歴史は、可成り古いものであると言えよう。この碑文から見て、寺中村の松右衛門と言う人が、志を立てて諸国を遍歴して帰国し、それを記念して願主となり、慶祐と言う僧を脇願主として法会を依頼し、これを建てたものであろう。

世話人は、地名は仮名でエド（江戸）寛龍、ナガト（長門）庄八、ヒゴ（肥後）兵佐久、同、大五郎ヲサカ（大阪）重祐、エド（江戸）浄心とあって各国に跨り、これらの人々はそれぞれの国で、願主の依頼に応じて喜捨をしたり、又それらの地の人達の寄進を、収りまとめた人の名前でもあろうか。そして塔の台石には五十名近くの寄進者の名前が、数人の女性の名も混えて、その生国と共に刻んである。その国々も二十八ケ国行中とあり、肥前・肥後・日向・筑前筑後・豊前・豊後・伊予・阿波・飛騨・紀伊・美作・丹後・因幡・伯耆・山城・常陸・志摩・尾張・上総・甲斐・越後・出羽の各国名が彫ってある。そして地元の寺中村の世話人は、村方世話人として茂八・喜八・清八・安左衛門・儀右衛門・甚九良・千三良・丈助の八人であり、石工は久四良・栄作の二人である。この経費がどれだけ掛ったか、資料が全く見つからないので見当もつかないが、当時の社会状況を見ると、天保時代は全国的に天候不順で、天保七年は「天保の飢饉」として有名な、全国的な大飢饉であり、熊本もその例に洩れず、天保八年は五月から気候不順で、大霜・雷雨・風雨、そして巨大な氷が度々降り、穀類は大暴騰をしたと言う。天草では米一俵三六〇匁となっている。（熊本県史）一両は銀で六〇匁、一両を三万円と換算すると、米一俵十八万円の高値である。しかも当時の米一俵は今の六〇kg四斗俵と違い、京枡三斗五升であるから（城南町史）その単価はもっと上るであろう。又、益城町も全く同じ天候に禍され、天保八年は雷鳴豪雨で、木山川の橋は全部流され、丁度昭和二十八年の大水害と全く同じ状況で、当時熊本市では米一俵一七〇匁、約十万円。粟一俵六〇匁、約三万円である。之に飢えた農民達は、川内田の山桃坂と言う処の土を喰い、命をつないだとの話も残る。（以上、皆乗寺過去帳余録）

このような災害の翌年である天保九年には、寺中村の人々の生活も、同じように極度に苦しかったであろう。そして乞食の代名詞にも使われる。六部の生活を送りながら、二十八ケ国の飢饉の中を遍歴し、帰国した松右衛門の胸中、又、迎えた家族や村人の気持ちは如何であったろうか。

前述した様に、益城町には廻国塔はこの一基しか発見されていない。あるいは未だどこかに有るかも知れぬが、他の村々では災害でもっと痛めつけられ、建立の気持ちがあってもその日の口を糊するのが精一ぱいだったかも知れない。

これらの人々の厭離穢土、欣求浄土の気持ちが、各地の人々の喜捨を中心に、村方世話役も立てた。故里の人々の寄進も加わったであろう浄財で、この廻国塔は建てられたと考えられる。それは当時の寺中村が、他の村々よりも裕福だったからとは言えず、どうしようもない来世への渇仰が、そうさせたと解釈したい。当時の災害の記録を調べて来ると、一層その思いが強くなって来る。

参考までに、寺中村の戸数は、明治二十年の戸籍簿では、九十四戸、内士族は六戸である。又、寺中の村名の興りは、中世神仏習合の時代、津森宮は神護寺を持ち、境内は八町四方に及んだと言われその寺域に人々が次第に住みついた為「寺中」の名が出たと伝えられる。

「石人」同人　松野国策
益城町教育委員会勤務

町史探訪

赤井・木山城の由来

今や経済優先から生活優先へと転換さるべき時に当り私達は先ず故里益城町を素直に見つめ、又祖先の残してくれた文化を保護しつつみんなで町を切り拓いてゆくべきだと考えます。その為にも文化遺産をたずね祖先の偉業を偲ぶのも誠に有意義なことだと信じます。

先ず木山城から概観を致しましょう。

〔木山城〕一名古城と言いふらされておりますがこの歴史は遠く南北朝即ち六百有余年に溯り木山氏の居城となったのは天文の頃一五三〇年代からのようです。

新田義貞の一族新田義宗の庶子右京太夫兼備後守貞昌（正平十二年一三五七年）は征西将軍懐良親王に従って九州に下り少弐大友の軍と戦い太宰府にて戦死したのですがその後裔木山左近太夫惟興が木山に居城したのでした。時に嘉吉元年一四四一年の事です。これが木山氏の起りでその子の木山備後守惟昌その子の木山右馬頭惟貞と木山城は続きますが天文十六年一五四七年城を更に堅固な赤井に築城し木山城は家老の竹崎筑後を城代としたのでした。尚一説には惟昌の甥の木山弾正に譲ったとも伝えられています。

ところが天正十三年一五八五年薩摩島津勢の攻撃にあい戦利あらず己むを得ず婿になる天草伊豆守を頼り本戸に逃れますがここでも亦小西行長軍の進撃の為に遂にその援軍の加藤清正に討たれた悲運の武将であります。

木山城の命運百四十余年城落ちて今や四百年全く城としての痕跡殆ど認められず唯一つ老人ホーム古城園の中の老樹の下に山伏（ぜんぴし）さんなる傾きかけた祠に小石を積み重ねたるは「城主の墓とか殉死の墓とか然して村庄屋常に水を手向く、さなくば必ず異事あり」と肥後国誌に記せるものは此の付近を占めた丘陵こそ木山氏累代の城跡でありましょう。

〔赤井城〕船野山の北に延びた台地の先端が平地の中に盛り上がった小丘北に福原川三方は深田の要害の地ここに惟貞が築城したのでした。子供の惟久・惟連と三代の間過ごしたのでした。この中の惟久が紹宅と号せし武勇と風流を兼備した武将でありますが特に俳諧の宗匠として有名でありました。

師紹巴の「また七たびの別れをぞする」の句に即刻「八重桜一重は前に散りそめて」と附けたその絶妙さには万座を驚かしたものでした。

扨天正十三年九月十九日（一五八五）木山宮祭日の日、薩摩勢の急襲にあい木山城と同時に落城したのでした。紹宅の妻は幼児を連れ観世音を乳母に背負わせ福原迄逃がれましたが薩軍の急進の為観世音をすて袴野迄逃げたとか伝えられています。当赤井城は今尚、当時の城としての石垣が苔むし残置しております。

尚この地には築城以前に寺とその寺を鎮護していた神社があったことであります。残置せる数個の五輪塔とおぼしきもの確かに学頭らしき僧の供養塔か墓かを偲ばせ建武三年の年号の推読出来ることからしても六百有余年の古き由緒ある天台の寺と神社であったようです。

ほんの概観を二城につき致しましたが爾来四百年人亡びて山河空しく、木山・赤井の川のみは昔のままにせせらぎ、毎日訪れるのは朝夕日のみが悲運の祖先を慰めるのみです。

菊池・御船に劣らざる名にしおう古城。これら人士の努力に負けざる努力を払い保護顕彰に力を尽すのは町民の責務と考えますが。

益城町文化財保護委員　山来　茂

津守城の由来

先月号で、木山・赤井両城の紹介があったので、今月は下陳の津守城をお知らせします。

津守城は、阿蘇家の家臣光永氏が在城した所で、古くは明らかではありませんが、肥後国史によると、鎌倉時代から天正時代まで、約四百年間在城したようです。

「光永家記」によれば、先祖は、神武天皇の皇孫「健磐龍命（たけいわたつのみこと）」すなわち、阿蘇大明神の次男であると伝えられます。又、建久四年源頼

朝が、富士の裾野で巻狩りを行う際、その命により、光永惟理は下田左衛門太夫と共に、鎌倉に出頭し、阿蘇下野の狩の故実を伝え、その功により「津守城」と「津森郷」十三ケ村と、阿蘇の錦野村を賜ったと言われます。この光永惟理の五代目の孫、光永又四郎惟富は、元弘の乱に、阿蘇大宮司惟時に従い、後醍醐天皇の六波羅攻めに功をたて、筑前国下座郡の地頭職となり、その地名を取り光永と名乗りました。光永家の家紋は「違い鷹の羽に山の字」ですが、この紋は、又四郎惟富が左近将監に叙され、後、阿蘇惟時公が吉野に伺候した折、お供をして、吉野御所を守護し、その時の功により賜ったものです。

光永氏は、元弘、建武以来の功により、託麻郡五ケ村、益城郡内二ケ村、宇土郡二ケ村の加増を受け、後、惟富は津守城から、健軍の陳内城に移り、別家をたてました。又、古城考によれば、天文二十年大友宗麟に攻められ、城主光永中務惟宗と、二の丸にいた、弟の惟純は退城しています。天授四年、託麻ケ原の合戦には、光永氏は北朝方大友氏に従い敗北、大友親世は津守城に逃げこみましたし、天正八年三月の旦過の瀬の戦には、甲斐宗運に属して大勝利を得ました。光永氏の家臣、万次郎丸八千右衛門の武勇伝も、この戦と思われます。この津守城最後の城主は光永宗甫ですが、天正十三年九月島津勢のために戦死をしています。（肥後国誌）

別に「光永家記」によると、天正十五年七月十日、肥後の国衆一揆には、城主光永中務惟富は、佐々成政と戦い、親子三人討死しています。この時三男の「志ゃみ殿」は、七歳でしたが、筑前に連れ去られ、ここで非業の死を遂げています。

下陳の千光寺境内には、城主の古墳があるとかで、昭和十二年に調査した結果では、光永惟裕の古墳は見当らず、五輪塔のものらしい地輪だけ発見され、又、田原の浄信寺には、卵塔中に古塔が三基あり、内二基は五輪塔の姿で、仏石と蓋石は共に四面に梵字があって、銘文はありません。一基は台石二個を重ね、上に小型の片石に仏像が彫られています。その台石の一面に（○○……欠字）

義田禅定門

文明十○天○○五○○……

と銘文が見られます（津森村誌）

近年、浄信寺に納骨堂建設の際地輪の中から人の骨が発見され、元々浄信寺は、光永家代々の菩提寺のため、これが下陳城主の遺骨かも知れぬと一時話題になりました。

以上が、津守城の略記ですが、今、一の天守跡に登れば、城跡らしいものは残っておりません。

しかし、周囲の谷々は天然の要害であり、西南に大きい展望は、古戦場託麻ケ原を一望に納める、景勝の地です。津守城は山そのものが城である、いわゆる中世期の山城の様です。一一九四年から一五八八年までの永い間、津守城も日本の歴史に、足跡を残した様です。津守城落城以来幾星霜、時代は移り世は流れ、今は全く忘れ去られて、四季折々の花鳥風木に、往時の光永氏の栄華を偲び、合掌するのみです。

終りに臨んで、益城町に残る有形無形の、偉大な文化遺産を発見保護し、皆様と共に、これらを子孫の為に残し、古里益城の発展に資したいものです。

益城町文化財保護委員

坂本播義

福田寺蹟

朝来山に福田寺と言う、古い寺蹟がある。この寺蹟は、福田校区の内寺部落から、林道を約二粁登ると、山本磨氏の宅に着くが此の宅地を含めた一帯を「寺屋敷」と総称し、宅地附近を「大門」と言う。此の宅地を右に見て、一五〇米程行くと、南西に展いた窪地に着く、これが即ち「寺屋敷」つまり「奥の院蹟」と思われる場所で、約三十アールの平地であるが、当時を偲ばせる遺蹟は何一つ無く、今は開拓者の家が建っている。

肥後国誌には「福田寺跡（一二福伝寺ト作ル）ト言ウ、山号開基等不明分、樹下草底ニ古墳石散在ス（今此ノ林ノ篠ヲ剪リテ矢筈トス）附録ニ言ウ、今ヤ鎮守堂ノミ廃迹ニ残レリ」と記してあるのみである。郷土史家で第一師範教諭であり、木山町寺迫におられた、故角田政治先生が実地踏査の際、発見された五輪の塔の台石に「永仁五年丁酉三月彼岸」とあり、古閑文学士発見のものに「永仁三年乙未六月十三日」と記されている。いずれにも詳しい銘文があるが紙面の都合で割愛する。「永仁三年」

は一一一二年、今から八六五年前で、いわゆる鎌倉時代までは、福田寺が存在した証拠であろう。

この寺屋敷近傍に散在する碑石類は、大正初期に「鐘楼跡」と伝える一丘陵に、集収保存してあるが、その中に高さ一一五センチ、上幅二六センチ、下幅七〇センチの、安山岩板碑は、阿弥陀像を刻み、大永六白丙戌九月好日覚心の銘と、多数の法名が列記してある。他に高さ八〇センチ、幅五〇センチの阿弥陀像、高さ一メートル幅八〇センチの、文字塔多楽宝生の二基と、別に五輪の塔六、七基が残っている。「大永」は、足利将軍義晴の時代で、今より約四五三年前で、この頃までは福田寺は存在したと思われ、この五輪塔は供養塔と察せられる。別に内寺福原間に通ずる旧道三叉路、字名を「上の原」と言うが、吉住幸吉氏所有の畑地に、大永年号の銘のある、阿弥陀像と法名多数を刻した、安山岩の板碑がある。又、町道福原袴野線で、内寺部落に入る道路の真下で、通称「松久保井手」の附近に、高さ二米、台石一五〇センチ角の、大きな五輪塔が存在したが、これも福田寺に関係があったらしい。これは「虎ガ塔」と通称されたが、今は失なわれて存在しない。

「熊本県史蹟名勝天然記念物調査報告書」には「土俗の説に福田寺は、七堂伽藍あり七十二坊も存せし大寺なりしを、小西行長の為めに焼かれたると、果して行長の為めに焼かれしや明白ならざれども……」とあり、仮に天正十六年小西行長の為めに焼かれたとしても、それまでは法音熾にして、三十六坊十二門天台宗の大寺として、旧福田村大字福原及び、木山町大字寺迫の一部、字「四百石」を寺領としていた。今ではただ古文書を頼る以外にないが、地名に大門・駄床・花殿・一の香・経塚などが、言い伝えで残っている。

この福田寺跡に至る途中に、俗称「鬼の岩屋」と言うのがあり、内寺から約一粁、林道から右に小道を入り約一五〇米にあり、奥行三六〇センチ、横四米、高さ一九〇センチ、大石七個をもって四方を築いた石窟である。機械力のない者、如何にして築いたか不明であるが「熊本県埋蔵文化財包蔵地一覧表」によると「鬼の窟古墳」として登録されている。前述の様に各所に残る、地名・遺物を総合的に考えるとき、福田寺が如何に大寺であったかが想像される。しかし遺物の少ないのが惜しまれる。

文化財保護委員会発足後日なお浅く、三・四回の会合で各校区を一巡して、貴重な文化財の存在を知ったのみで、詳しい調査報告は今後徐々に発表するとして、今回は「幻の寺」である「福田寺」の場所と、その概略を記して、町民各位の御参考に供する次第である。

益城町文化財保護委員　作本　巌

飯田山と常楽寺

一、飯田山　高く円き山、温容の中に重量感ある峯である。もと細川藩士、本土山在住の書道の大家、水野貞秀もこの山にならって顆山と号したと言う。近頃、参詣登山者多く、金峯山・竜田山・雁回山や宇土の山々から有明海を隔てて遙か雲仙岳を遠望し、熊本市一帯を眼下に展望できて遊歩登山地として最適地である。頂上に小池あり。噴火口の跡を思わせるが或る地質学者の話では、小山・戸島・船野山の熔岩台地と違って火山系のものではなく、自然の水溜りであろうと。最近は登山者の食いがらの捨て所になって、残念である。金峯山との背比べで今から決して言い出さん、との民話もよく知られている。最近、飯野支部青年団の奉仕により案内表示板が設置されてふるさと作りの一環として感謝されている。

二、常楽寺　天台宗常楽寺は由緒ある古刹であって八合目の所にある。千数百年前。即ち、第三十代、敏達天皇十二年に、日羅上人が百済から千手観音と九重の塔を持ち帰って開基したと伝えらる。

当時は三十六坊あり、三〇〇人近くの僧侶が修業に励んだ聖地で、明治天皇から大師号を賜わった名僧、俊芿を始め、多くの偉い僧を産んだ霊地である。従って、人々の信仰も厚く、心の故郷として尊敬の的となっている。この頃は人家もなく、荒廃に陥っていたが、永田日出男氏や地区の方々の善意と奉仕により立派に改修された。又、同区老人会も毎月十八日には参詣、清掃が行われてサッパリした静寂にして幽遂、そして昔の面影を留めている。その道順に従って紹介すると、①石段は苔むして整然とした階段ではない。自然の

石を、自然のまま敷きつめた乱れ石段であって古代人の素朴な祈りの心が伺われて印象的である。大正の末期、水戸出身の漢学の大家はこの乱れて喰い合う自然の姿こそ、古代の面目が躍如としていると激賞されたことがある。②仁王門、山門の両側に二基立つ木彫の仁王像は霊域の守護神として大きく立派な偉容を呈している。私達幼少の頃はよく股の下をくぐって息災を祈ったものである。③観音堂、本尊は千手観音菩薩で両側に不動明王と毘沙門天がいられる。厨子の奥にはインドの古代神、象頭で人身の男女神が相擁した姿でいられる。明治までは細川家の祈禱所であった。又疱瘡の神として参拝者も多かった。正面『福聚海』の扁額が掲げてある。細川公の奉納によるもの。

念々に疑を生ずる勿れ。慈眼を以て衆生を視そなわしたまう。福聚の海無量なり と言う観音経の一節である。④山王堂 本堂の右方に祠が祭ってある。旧部落に薬師如来の堂もある。縁結び、長命の神と言われていた。⑤白山権現 頂上改修された祠がある。本堂から約十五分。少し急な小道を登ると、この山上神社につく。武の神と伝えらる。熊本平野を一眸に収めてすばらしい景観である。⑥その外に ◎田口城跡は田口平にあり。御船の見える斜面の平らから所。 ◎一丁地蔵

麓の土山から参詣する道端に一丁毎に建てられた地蔵でこの名がついた。今は数が少ない。 ◎例祭日 毎月十八日。そして一月一日は本尊の扉が開かれる。又七月十日の参詣は千日分のご利益があると言う。近時、参詣登山者が多く、それだけ飯田山、そして常楽寺も社会の人々から知られるようになったことは有難いことだと思う。

以上、正確な資料も少なく、地区の古老を尋ねてその物語りや言い伝えを平易にわかりやすくまとめてみた。尚、肥後国誌、郡誌、飯野小百年誌を参考にして簡単に紹介したものである。

町内には埋れた文化財がまだたくさんあると思う。皆様のお気付きの所をお知らせ戴いてその発見と保護・保存に努力し、これらを永く子孫に、尊いものとして伝えたいものです。ぜひ、ご協力の程をお願いしこの稿を終ります。

益城町文化財保護委員
米光 捷

道安寺と清正公

今から約六百年の昔、南朝と北朝二つの朝廷が争っていた頃南朝の御醍醐天皇は御子懐良親王を征西大将軍として九州に下された。

その時の従者に新田義貞の子義宗の庶子右京太夫兼備後守貞昌がいた。当時朝廷が九州で頼りにしていたのは肥後の菊池氏と阿蘇氏であった。そこで当然親王の一行は肥後を目ざして下ったのである。

処が貞昌は北九州の豪族小弐、大友の軍と太宰府に於いて戦い深手を負い菊池に逃れ戦死したのであった。時文中三年三月、一三七四年の事であった。

肥後国誌の中の木山町梅屋日記の中に「木山町入口に香雲山道安寺跡あり木山氏代々の菩提所にて木山左近太夫の墳墓と云ふ五輪塔二基存せり外に古墳多し銘文磨滅し不分明盆会に手向る閼伽井有り病める者祈るに験あり賽するに赤井城迹の石を以てす。今や此の地に清正公を勧請せり。然してさきに戦死せる貞昌を山鹿日輪寺に葬り法名を雲林院道女と号し木山城主左近太夫惟興の子、惟昌の弟、僧となり月耽和尚と称せし人享徳三年一四五四年香雲院道安寺を開基し木山氏の菩提所とし山鹿日輪寺にある祖先の霊廟を境内に移す」とある。

当時開基せし道安寺は上益城郡誌の中にも記される「道安寺迹は木山町西入口より左手前少し奥まりたる所、境内二町四面、其の境を知らず」との如く木山氏在城の全盛期約一三〇年間菩提寺として現在の道安寺から清正公さんに至る広大なる地域を境内として壮大を誇っていたのであろうことが思われる。

然し時は戦国の世弱肉強食、有為転変の習いにもれず天正十三年九月十八日一五八三年木山神宮祭礼の日薩摩島津勢の襲撃にあい木山・赤井の落城となりその後本寺は佐々成政に焼き払われそれより廃寺の憂目となったのである。

爾来三百余年幾多祖先の墓標すら朽ち散乱しその所在すら消え失せし有様とはなったのであった。

本町出身の故角田政治氏の木山町誌を辿れば「清正公は道安寺と称する地名の東南裏に勧請せられ今尚小祠を存し里人「セイショコ

サン」と呼びその傍に幾百の星霜を経たるが如き椋の老樹ありてその根本の空洞に「飲め飲め」と賽者水を手向るの習慣がある。其の下に懐れたる石の玉垣の内に五輪塔宝篋印塔と混同して築き上げたる如きものが存している。これが俗に御拝塔といわれているものである。学者の鑑定によれば南北朝のものとも又木山氏累代の墳墓とも更に左近太夫惟興の墓とも云われ木山氏菩提寺道安寺の本堂はこの付近にあったらしく現在の道安寺付近は多くの先人の墓があったと思われ現に五輪塔なる墳墓の数基あるのをみても肯ける。」とある。

尚昭和五十年代の清正公の現況は敷地約二五〇余坪の東隅に清正公を祀れる粗末なる堂がある。

此の堂は以前の堂の火災後昭和十一年に町有志に依り建立されたものである。さきに述べた御拝塔は高さ一七〇㎝位のこわれかかった石垣、なくなった玉垣内に残っているものの付近に散乱し憐れをとめている。又賽者の「飲め飲め」と水を注いだ椋の大樹は朽ち果て根だけは残り当時の面影だけは彷彿出来る。そしてそのそばにえの木の大樹が繁っている。尚賽者の注いだ水を汲んだと思われる井戸は立派に保存され現在使用している民家までである。

何れにしても此の木山氏ゆかりの地域一帯の浄化と保護は早急にほしいものである。処で現在の道安寺は現住職の祖父竹本義達氏に依って昭和初期に建立されしもので中に安置されている座像の釈迦像は廃迹に在った釈伽堂に祀られていたものである。ちなみに本像は熊大松本教授の説によれば室町時代の作と云われる。

津森神宮由来記

津森神宮は寺中の旧バス道路の北側にある。往古から肥後一宮として、当時の国司を始め世の尊崇を集めた霊社である。神社の由来については、次のような伝説が伝えられている。

欽明帝の二年（一四四〇年前）九月二十九日の夜丑の刻、神武帝の霊体が出現され、石上にお立ちになり、神武帝の霊であることをお告げになった。国司法昌[1]は来拝して社を建立した。往古この辺は入海の津であったが、この時忽ち森となったので津森といった。神霊のお立ちになった岡の麓を御立村となえ、又立たれた石を影向石（ようごうせき）といって、現在の宮所から巽（たつみ）の方に現存する。（肥後国誌）

なお神社の古文書には、国司が夢の中で神霊が童子となって天下りされた所に、影体石児の塔（稚児の塔[2]といって四角に梵字あり）があり、ここで童子を見たので見立村といった。又鷹にのって暫らくとどまられた所を〃羽休めの森〃と云い、森の中の神体を〃はやたかの天神〃と伝えている。[3]

宝治元年（約七三〇年前）九月二十九日時の将軍源頼嗣、社床を今の寺中に移し社を建立した。この時勅使が下向され、菊桐の御紋を奉納、津森宮を当国の一宮として尊崇され〃四記日[4]〃の御供田六町六杖をと御寄附された。十四郡中の地頭・御家人が社役を勤め、国司も又毎月〃四記日〃に参詣して祭祠を修行された。

祭礼は毎年四十八箇度あって、寄附の品を奉納、天長地久農懇祈を勤められ、おこたりなくする為毎度勅使を差向けられた。これが即ち当社の御法使[5]である。

当社の社殿楼門などの変遷ははっきりしないが、夙論上古以来奥の院は神社の御社で、境内には十二の末社・楼門・玉垣・社家・社僧・鐘楼など十数閣居並んで、境内は八町四方に及んだという。後に境内の寺院跡など没落して、現在のように寺の中に自然と民家がはいりこんできた。寺中村という名はこれからおこっている。

祭礼は旧九月二十八日から十月二日までの間に行なわれた。旧九月二十九日の祭の式は、神楽を奏し、神事を勤め、流鏑馬などが行なわれた。又十月朔日には大法使御幸祭、二月には笹踊が行なわれた。今でも時の城主の御仮屋床、御茶屋床、馬立場、流鏑馬の馬場勅使休息所などの古跡が残っている。祭礼の節の勅使御名代としては、津森城主の光永氏が勤めた。天正年間小西行長に堂社を悉く破却され、社領もなくなり、神事もすたれ、旧記などもその節紛失したという。

その後本社拝殿・末社・楼門等は再建されたが、上古以来の祭礼儀式は度々中止され、ただ九月二十九日の祭の時は、仮屋にて二日間神楽を奏し、神事を勤め、十月一日には大法使御幸式が行なわれてきた。現在神社には古代の社屋

の配置、祭礼時の古跡などの場所も、採色の絵図面として残っているが、古跡は竹林となり、或は民家と変貌してしまっている。

氏子は当時近郷の三十三ケ村にわたっていたが、現在は十二ケ村迄に減り、本社・拝殿・末社堂等氏子の手によって修復されている。津森郷十二ケ村の御法使祭（御星祭）については別稿で紹介したい。

津森宮の宝

一、古代神宮絵地図（応永元年）

一、椋の古木、周五・五米

樹令七〇〇年以上

全国神社名鑑に記載、古木は九州緑化推進委員会指定

注(1) 全国神社正鑑中に論議されている。

(2) 御立村旧社の北斜面にあり梵字は未調査。

(3) 下陳水田地帯の中央。

(4) 月四回神事の日、期日不明

(5) 肥後国誌には御星祭と記し津森郷十三ケ村とある。

参考文献（誌面の都合で略す）

附記

本文中の影向石及び稚児の塔はともに県下でも珍らしい石造物で室町時代のものと推定される。

文化財保護委員
坂本播義

木山神宮由来記

五、六十年もの昔になろうか。

筆者の幼時の頃である。御神殿の背後には巨大な老楠天に沖し境内には銀杏の巨木老杉と枝を交えその緑陰に夏を覚えず樹間よりは木山平野を隔てて朝来名・船野・飯田の山々を眺望する風光絶佳の地ここ木山神宮は我等の魂の故郷であり氏子一同は朝に夕に遊びの亦憩の神域でもあった。

今このなつかしい旧木山町、赤井、福原、旧広安村を氏子に持つ木山神宮の由来を尋ねてみたい。

宮司矢田氏の家系によればその遠祖御藤中納言経吉なる人摂州矢田庄に在住し六代の頃筑前に下向し十代に及び肥後の国に下りてその後矢田因幡守に至り阿蘇大宮司清隆に従ひ文安五年（一四四八年）木山神宮の社職に奉じたとあるので木山神宮の創建は少なくとも五百三十有余年以前になると推察される。何はさて再度に及ぶ大火の為記録なきが惜しまれてならない。

さて本宮の祭神は。

建国の神と言われている天照大神を始めとし第一代の天皇である神武天皇までの子孫の六柱それに相殿としてお祭りしてあるのが先ず衣食住を司る豊受大神、舞楽の神である天宇受売命、道を説く猿田彦命、医薬の神大己貴神、病気災難から救う少彦名神の合わせて十一柱の神をお祭りしてあるのである。

時は嘉吉元年（一四四一年）木山城主の木山左近太夫惟興は本神宮を木山氏の守り神として田畑並びに剣、翁面等寄進された由である。処が天正十三年九月十九日、（一五八五年）木山神宮祭礼の当日薩摩の島津勢の攻撃により赤井木山の城と時を同じうして焼打ちにあい炎上し御神体及び宝物に至るまで焼き払われたのである。その御神体の中御一体のみが今吉部落の森の中に逃れ御遷座されたとか、その御一体は今尚右膝焦げしままの由。

然して薩軍、勝利には帰したるものの同軍の陣内に出火が度々あったり死傷者多かったりの、不吉の事のみ多かったので神のおたたりと恐れ島津は一五九〇年彼の国にて五座の神像を作り宮地に正殿を再建したといわれている。

そしてそれ以来寛永年間の一六四〇年代迄あの銘すべき九月十九日に神事の御能、流鏑矢等盛大に催されたのである。

ところが寛保二年即ち一七四二年七月町内に大火が起こり能面・装束・其の他桟敷設備又諸記録に至るまで焼失してしまったのは遺憾の極みである。

現在は例祭を十月十七日に定めている。

尚二十年に一回四月三日の以前の神武天皇祭の日に御幸祭が催されるならわしが出来たのである。

それは町を挙げての氏子総出の祭典である。

先払い　切麻散米　うずめ

歌女　奴　道楽

の順に古式にのっとった服装に雅楽を奏でての本宮を発地とし今吉に寄り赤井城跡迄の御幸である。

女男の神大八洲を産みまして
土も固まる海も澄む
女男の神国地の君を産まんと
て
真の心あるにより
山高く初て真栄の生えにけり
常盤堅磐の真榊の

の神撰歌を歌女達は静なる歩に合わせての神代の姿の白装束に創建を偲び宮の又町の発展を祈る桜花を浴びての御幸である。

然しこの御幸も昭和十五年の祭から太平洋戦争となり敗戦・終戦と今に至るまで事やみになりたるは淋しいことである。

それにしても二十世紀の末期の我々本宮創建の先人のおしえを思い奮起せざるを得ない気にもなる。それは祭神である十一柱の神々。その神々は日本の創建の神々であり、そして又その他衣食住を司る神、健康医薬の神、道を説く神、生活を楽しくする歌舞の神と言うように町の亦子孫の繁栄への思いやりの創建と察されるから。実に人間生活に欠くべからざる由緒尊き神々ばかりであることは有りがたいことであろう。

木山宮の宝物

天沼矛（あめのぬぼこ）

風王面　大王面　水王面

文化財保護委員
山来稠明

馬水の寺跡(一)

○はじめに

現在益城町でお寺がないのは、広安校区だけである。昔広安校区の地にあったであろう寺は、再興する者もなく、今日まで地下に眠っている。私は所謂寺跡と村人から呼ばれている附近や、寺に関係のありそうな地名を手掛りに、証拠となるようなものをこの四月以来探してみた。寺跡といわれている区域は、広安の各部落にもいくつかあった。今回は馬水の寺跡について紹介する。

㈠　現況

県道から、鉄砂川を北に四〇〇メートル北上すると馬水の本村がある。吉村正己氏と東隣の村上成人氏の境の南隅に辻堂と呼んでいる阿弥陀堂がある。村人はこの辺称している。

現在の辻堂は、昭和十五年に吉村氏の北の竹藪にあったものを、再建して移したものである。一坪の小堂に壇を設けて、中央に阿弥陀如来、左に観音、右に勢至の両菩薩の立像がある。いづれも一木造りで、大分傷んで今にも壊れそうな状態である。辻堂は南面して立ち、堂前の左側には五輪塔の水輪四個が積み重ねてあり、梵字が逆にみえているのもある。又床下に空輪が二個転がっている。

㈡　文献の記録

上益城郡誌に、馬水、吉村謙三屋敷内に一大寺ありしと雖も、小西氏の為に焼かれ廃寺となる其の跡より器物多く発掘せり。本尊は飽託郡健軍村にありといえども詳かならず。広安村郷土誌には、前記のほか、発掘された器物今は伝わらず、本仏は飽託郡健軍村の寺にあり。今ある阿弥陀仏像は其の交換せしものなり。縁日には健軍より参詣読経す。この他吉村謙三屋敷の上山に石仏あり文字明白ならず。

㈢　調査事項

四月末から七月にかけて、馬水地区の板碑等の調査に十回ほどでかけた。附近の人々は、口を揃えて吉村氏の裏山一帯には多くの墓石や、五輪塔があったことを話してくれた。これらの五輪塔の水輪が現在の辻堂の前に重ねてある。五輪塔はふつう、領主か重臣か高僧の墳墓と云われている。

吉村さんに山上にある石仏についてたずねると、十三年前に屋敷の東に移しましたと案内された。高さ四十五糎の礎石の上に高さ七六、幅六二糎の板碑の前に新らしい花が供えてあった。バク（釈迦如来）の種字が上部にあり、

奉鑁〇刻石仏一躯乗〇報地者也
道心居士
妙王天姉　霊位

于天文十八年十一月十日施主敬白の文字が彫まれている。

東隣の村上成人氏を訪ねると、母屋敷の一段高い山中に四基の板碑があった。六十年程前に、屋敷の東側の低地にあったのを、現地に移したそうである。

①大日如来（金剛界）の種字バ（ン）の下に道済禅門　霊位

②阿弥陀来迎を刻んだ板碑で、天文六年丁酉南呂吉日（南呂は八月）雲台の下に道〇禅門、妙久禅尼と彫まれ、来迎図の雲尾は右肩の辺まで高くあがっている。

③「ア」の梵字（観想により別尊に変化するという）

④阿弥陀如来を示すキリクの梵字が刻まれている。①、③、④には年号は刻んでない。

以上の板碑はいづれも安山岩で造られ、②が高さ九五センチ、他は七五～六五、幅は五〇～六〇であまり大きくはない。

調査の結果から考えると、吉村上屋敷を含む可成り広い地域に馬水の寺があったことは確かである。しかも板碑の法名から判断して禅寺であるといってよい。

○おわりに

辻堂の東南に秋月くめ（八十九歳）さんがおられる。このおばあちゃんに、吉村さんの所の碑が、天文十八年であることを話すと、

〽天文十九年の頃よりも
　火牛と争う織田、斉藤

と桶狭間合戦、竹中砦の段（浄瑠璃）を謡いだされた。桶狭間の戦が一五六〇年、すると天文六年の碑は四三〇年昔のものである。其の頃肥後の国では菊池氏が追われ、守護もなく、肥後の豪族はみな大友宗麟に属していた時代であった。馬水の寺はその時代以前からあった事は判るが、開基の年代や寺名なども依然としてわからない幻の寺である。

文化財保護委員
木本寅喜

馬水の寺跡(二)

馬水という名は、千年も昔の本（和名抄）に書いてある古い部落で、今では古居敷（本村）と駿河原（一部に狐塚）の小字に分れている。前に紹介した馬水の寺跡は、本村地区にあり、これから報告する遺跡は、狐塚地区に集まっている。辻堂と狐塚にある七基の板碑の間は、直線距離ではいずれも四〇〇メートル以内にある。これらの碑が前の寺跡と何等かの関係があるかどうか、今のところはっきりいえないが、土地の人々に尋ねても寺跡と称する場所は一つしかないので、比較的近くに残っている遺跡は多分馬水の寺跡と関連のあるものと考えてよかろう。

① 吉村宅の辻堂から西に一五〇メートルの道路わきに高さ一七〇センチの阿弥陀碑がある。弘治三年の字が、かすかにみえる。これは中村明義さんの祖父仁五郎さんが清住屋敷の閻魔堂の後にあったものを土あげして現地に移したものである。

② 辻堂から西三〇〇メートルの竹内義一さんの東南の一隅に三基の碑が祀ってある。一つは釈迦牟尼仏と日蓮大菩薩を祀る大きな石で裏に明治四十五年にたてた竹内作蔵（義一氏の祖父）の名が彫ってある。あとの二つは両方とも阿弥陀仏の種字を刻み、右の碑には



帰元霊位を道泉禅門と妙正禅尼が供養したもの、左には帰真心道晋禅門灵位を供養したもので、天文十九年三月二十六日と彫ってある。

又道路をはさんだ南側の馬水消防団の機械倉の裏（東）に三基の南天阿弥陀仏が祀られている。これらは今の公民館を建てる時、その周辺にあった碑を馬水青年団（西山義昌団長）が昭和九年三月に移したものである。元禄十一年、享保二年、享保三年の年代が記され、道をはさんだ西側の角に、地蔵尊馬頭観音と同じ屋根の下に首なしの南天阿弥陀仏（享保八年）がある。

次にこの四つ角から東南の方に約九〇米下ると、村誌に記されている本田仙五郎裏山の板碑がある。六〇糎の基礎の上に、全高一四五糎、幅一二〇の可成り大きなもので、上面に大きな右マンジがあり、下に、

道林禅門
　洞仙
妙春禅尼
永禄十二天巳巳七月三日

とあり、板碑の前面にある石造の供花台には新鮮な生花が供えてあった。碑のすぐ後に十一センチメートル角の石柱があり碑と同じ文字の他に三百五十年忌勤大正八年本田清次と刻まれている。清次は仙五郎の父で当主等さんの曾祖父である。この標石は板碑の三百五十年にあたり刻字の磨滅するのを心配して建てられたそうで、本田家では代々大切に供養されている様子を窺うことができる。

本田宅の西側の納屋下から発掘されたといわれている香炉が大切に保存されていた。九月上旬に県文化課の鑑定をお願した結果次のようなことが判った。

一、寺の什物の三具足の一つ。香炉である。蓋は紛失している。
二、上辺に中世の青磁によくでている雷文の紋様があり、上皿の横面及び底面に、中国の殷時代に青銅器に彫られた饕餮文（とうてつもん）がある。（大きな目をもつ獣面）中世末か近世始のもの。
三、材質は鋳鉄に真鍮の象眼。中国が仏教の盛んな国で製造されたもの。裏の永祉堂房蔵は後に刻まれたもの、馬水の寺で使われていた可能性がつよい。

最後に、健軍の真宗寺には、さん然と輝く金仏の阿弥陀さまが柔

和な慈顔でお立ちになっていた。幻の寺の御本尊は御健在であった。

文化財保護委員
木本寅喜

福富の寺跡(一)

九州縦貫高速自動車道の東側にある福富字西園の一帯には、古墳時代（七世紀の後期）の堅穴式住居に造り付けられた〃かまど〃がほぼ完全な形で残り、煮沸用の土器なども発見されている。（県文化課調査）西園の東北側一帯を打出屋敷といい、この南側を土地の人は寺跡と呼んでいる。

上益城郡誌には「福富阿弥陀堂は広安村福富の打出にあり。日羅上人の作という阿弥陀像を安置す。」と記してある。又広安村郷土誌には、郡誌と同文の記事の他に次のとおり記してある。

「近傍に石仏二基あり、稍文字不明なれども左の文あり。

月浄是印知感禅師奠位

天文十九年〇〇十五日

田畑開墾の際幾期もありしか此の処に集めしといふ。

奉造立帰真道永禅師」

（大正五年　後藤末松調査）

筆者は昨年夏の頃から、阿弥陀堂のある福富の六三六番地を訪れて調査した。

堂は福富の区長の森田友彦さんの家の東北隅にある。コンクリートの基礎（一〇〇糎高）の台上に七〇糎角のコンクリート壁で囲み、木像の阿弥陀さん（六十五糎高）には数枚の胸当てが掛けられて、あたかも地蔵さんのような格好で東をむいて立っておられる。

近くの古老の話では、昔は一坪位の木造の堂で、正月の〃ドンドヤキ〃なども堂の前でやっており、夏には近くの木山川で、阿弥陀さんを抱いて水中でよく遊んだそうである。又毎年十二月二十四日には同じ組内にある地蔵さんと一緒に、今でも座祭をされるそうで、その時胸掛けも新調して掛けるそうである。

阿弥陀堂のすぐ北側に、自然石でつくった二基の石仏がある。いずれも八十糎近くの厚手のもので、東側のにはキリークの種字が刻まれた阿弥陀さん、西側のには右マンジが刻まれている。

村郷土誌にある石仏とは、堂の南側の小溝に約三分の一程埋れていた二基の板碑のことであろう。足場が悪くて、辛じて、釈加如来を示す種字と、天文十九年〇〇及び月浄是印〇〇・・を読むことができた。又もう一つの板碑には弥陀三尊の種字が見え、下部は不明であった。奉造立帰真道永禅師と刻まれた碑は、此処にはなく次報に書く場所にあった。村誌には誤って記載されたものと思われる。

いずれにしても、現状では肝心な所が読めないので森田区長、石川老人会長及び老人会の方々の協力を得て、堂の東側に移して戴いた。近くの富田要助さんは水を運び、タワシで綺麗に洗って拓本とりに協力された。調査の結果は次の通りである。

板碑の大きさは、高さ九十五、幅五十八、（中央）厚さ四十糎で上部には、円の中にバク（釈加如来の種字）中に

月浄是印知蔵禅師灵位

とあり、右側に二行にわたり

奉逆修釈迦如来種字今彫刻所也

左側二行に『干天文十九年庚戌四月十五日施主敬白』と刻まれている。又月浄禅師の法名の左右及び下部には、道仙禅門、妙忠禅尼等三十数名の法名が刻まれている。この板碑は禅師の教えを受けた人達に依って供養した逆修（あらかじめ自分のために仏事を修して冥福を祈ること）碑である。天文十九年といえば馬水の板碑と同年代で四二八年も昔のものである。

もう一つの板碑も、大きさは前記の碑とほぼ同じ位で（高さ九十八、幅五十八、厚さ三十五）上部には、中央にキリーク（阿弥陀如来）左にサー（観音菩薩）右にサク（勢至菩薩）の種が大きな円内に刻まれている。又円の下に「浄金禅門」と印してある。この板碑は所謂阿弥陀三尊の碑である。

以上の如く阿弥陀堂の周辺に四基の石碑が確認され、かつて〃禅寺が存在した〃といってよいだろうがなお今後証拠となる資料の発見される事を期待するものである。

菊白く弥陀の顔の安らかし

富田要助

文化財保護委員
木本寅喜

福富の寺跡(二)

○はじめに

福富の打出にある阿弥陀堂附近の調査をすませて帰ろうとしていた時、たまたま傍を通りかかった部落の太田黒澄雄さんが、「こぎゃん石は福田さんの庭にも二つ三

つあるばいた。」と教えてくださった。

福田政七さんは以前から良く知っていたので、県道北側のガソリンスタンドの裏にある政七さんの家を訪ねた。そこには打出にある板碑より一回り大きい碑と、同じ位大きさのものが並んで建ち、もう一つは池の正面に逆さに、六〇糎ばかり水に浸っていた。政七さんは「ずっと以前から今の納屋の東南隅にあった石仏さんば、三十年前に今ん所へ三つ並べました。あとで池を作る時一つは池の正面に建てたつです。」といわれた。又「ここん屋敷は昔かり〃ふるどう〃といいますもんな。」ともいわれた。多分〃古堂〃と書くのだろうと思って尋ねたら「そうです」との事であった。これらの板碑は福富の寺と縁りのあるものに違いないと予期せぬ収穫に心が躍ったが、日も暮れかかったので、翌日又訪ねることにした。

○調査結果

場所、福富七二五、福田政七宅庭の池の西側に木立に囲まれた二基の板碑が建っている。右側の碑は高さ七五糎、幅六二糎、厚さ一二糎で、上部に、円内に囲まれた釈迦如来の種字、その下辺に六行にわたって次の文字が刻まれていた。

新建石仰安尊軀直将六趣
導門名為考妣灵性聖几性無ニ白純
浄空禅門　孝子　敬
妙信禅尼　白
艶絶同門得慈眼施與十種福発起
願心夫千天文十七年戊申八月十八
日誌之

この碑は天文十七年に亡き父母（考妣）の人がらをたたえ、死後の冥福を祈るために、孝子（父母の祭祀に子が自ら称する語）が釈迦如来を刻んで供養した碑である。

もう一つは少し大きくて高さ一二五糎、上に円、その下に大日如来の種字、更にその下に「奉造立為帰真道永禅門也」と刻まれ年代は記してない。これは村郷土誌にあったのと同一のものである。

第三の碑は池の中に逆さに立ち、高さ一一五糎の板碑で、阿弥陀如来の種字がかすかに見える。池の水を落して拓本を採ったが荒れた表面には「○済浄金禅門」と読むことができたが、左右には字跡があるが読めない。

その他何か手掛りになるものはないかと庭のあちこちを歩き廻った。繁みの中に大きな（高三五糎五〇糎角）石があった。福田さんに手伝って貰い、掘り起こし水で洗ってみた。上に円状の窪みがあり大きな丸い石を載せた土台のようである。両横には↓四本の細線で二段に囲まれた面がある。どうも五輪塔の地輪の部分のようである。更に捜査区域を拡げて屋敷内外や部落内も捜したが、空輪・風輪・火輪・水輪にあたる部分は見つからなかった。後日永田日出男先生に見てもらったら、五輪塔の残欠の地輪でに間違いない。そして線引きの中に囲んで、法名を書くようにしてあるのは、室町時代の五輪塔の特徴ですといわれた。

なお古堂の近くには、福島時雄氏の門脇に阿弥陀如来碑、又三十米ばかり北の四つ角には、猿田彦大神の左下に釈迦如来の板碑（梵字の下に道香禅門霊位）がある。その五米さきには、小さいながら宝篋印塔の残欠も立っている。

○終りに

前回に報告した打出の阿弥陀堂や四基の碑や、今回の五基の板碑及び五輪塔の残欠（地輪）の存在及び〃古堂〃と呼ぶ地名などからこの辺一帯に室町時代（約六四〇年前）からの禅寺があったといってよかろう。この頃禅宗は室町幕府の保護を受けて黄金時代を現出し、足利尊氏は国ごとに安国禅寺を建てさせたといわれている。一箇の土台石から遠い昔のことなどが偲ばれてならない。

最後に絶えず御協力戴いた福富老人会の方々及び永田先生に深く謝意を表します。（以上）

文化財保護委員
木本寅喜

安養寺と内寺の薬師如来

安養寺は大楠山東光院安養寺と称して、谷川部落の左の目神社の横にある。その寺跡は通称寺屋敷と呼ばれ、広さは五〇アール程の竹林と樹林の山林で、現在田中部落の島田祐寿氏の所有となっている。この寺屋敷に一歩踏み込むとほの暗い木下闇に今もなお、当時の石の鳥居の破片が残り、石で畳んだ空井戸が口を開いている。寺跡に鳥居の残骸とは不思議だが、中世の神仏混淆の名残りであろうか。今後の調査の一分野でもある。その他、本堂跡と思われる石積み、あるいは板碑等が、昔日の面影を偲ばせる。そして当寺の歴代住職

の墳墓は今寄せ墓となって、寺跡の北西四〇〇米の丘の頂上に残っている。それぞれの法名が、十二三代にわたって刻まれ、安養寺再興以来廃寺までの、歴代住職の名かとも見られる。

この安養寺は肥後国誌によれば天台宗比叡山正覚院末寺であり、桓武天皇の勅願寺として、延暦年中（七八二―八〇六）に、砥用の釈迦院の住職、弁善大師により草建されたと伝えられ、その本尊の薬師如来も、大師の作といわれる。ただ、雑華錦語集の中に安養寺の棟札銘があり、それらを要約すれば、九州肥後国六箇荘木山之郷に一寺を建て、これが濫觴となる鎮守の社は愛宕大権現とあり、前述の鳥居はこれであろう。そして度々国家争乱の中に破壊されたが天文十三年十二月七日（一五四四）の大火はすさまじく、この後、当時の住職豪秀により、弘治三年十二月二十四日（一五五七）に再建落慶式を行ったようである。

そして同銘の末尾に木山右馬頭宇治惟貞の名が見え、当時木山氏は阿蘇氏の家臣と思われるので、安養寺もその系列に属するものであろう。寺領は現在の大字福原のうち、安養寺村、佃、内寺、松久保、上竹、梶迫、楠木、川原田、八反、鉢ノ木、他に大字安永などに小路、原口、などなどその他にもあり、現在不明の地名もある。

この寺も明治初期の住職、俗名を三輪浦民生氏の手で廃寺の手続きがとられ、その本尊の薬師像は大字福原字境目の地にある。氏の住居の物置の一隅に安置されたが、明治十六年旧八月十二日に、内寺部落で譲り受け現在の御堂に、従来からの薬師像と共に合祀されたのである。

其の後五十年祭には、当時八代市で料亭を経営されていた、三輪浦氏の長女で、双生児のツル・カメの御両人からも、仏縁により、多額の喜捨を受けた事もある。

本尊は丈一四〇センチ、台座五〇センチ、脇立の日天・月天像は丈七〇センチ、台座四〇センチの仏像で、先年、松本雅明先生の鑑定の結果は、鎌倉末期の作で、檜の二木作りとのお話で、文化財として貴重なものであるとの事であった。又去る一月には県文化課の緒方勉氏、郷土史家永田日出男氏、町文化財保護委員長・木本寅喜氏、町文化財を訪ねる会のメンバーで写真家の永田昭一氏四人の方々の調査もあり、いずれはその結果も発表されるであろう。

今回は安養寺の概略と、内寺の薬師像との関係を述べてみた。

安養寺のことについては、今後調査が進み次第、順次発表の予定である。

益城町文化財保護委員
作本　巌

千光寺の供養塔

十一面千手観音を祭る下陣の千光寺境内には、近郷では珍らしい二基の板碑が本堂の裏手にある。今は苔むして半分は土中に埋もれ永い風雪に耐えている姿が見られる。

一つは、高さ一一五糎、幅四二糎、厚さ一五糎の自然石に次のように刻んである。中央に

奉唱一切経惣要一千部之誌塔

左右に

経日若有人得見此塔礼拝供養当知是等皆道阿惣多羅三貌三菩提

千時享保元丙甲　初冬

願主　当山二世　利賢院

即ち一切経①一千部を唱え奉ったという塔で、お経には、もしこの塔を見た人はお参りして供養するならば仏の悟りを得たも同然であるとの意味の文が書かれている。

この供養塔は享保元年（一七一六）に千光寺の第二世の利賢院が願主となった経塚である。

もう一つの塔は高さ一〇五糎、幅三一糎、厚さ一七糎の大きさで、次のように刻んである。

廿八品題号

奉収大法

普門品一巻

享保任寅四月立之

壱字一石書写妙塔

白善　利賢院

大法（法華経）の廿八条の内普門吊②一巻の経文を一箇の石に一字ずつ書写して、地中に埋めたという塔で、この塔が以前からこの場所にあったものなら数多くの石に一字ずつ経文を書写した石が埋めてあることと思われる。この供養塔も享保七年（一七二二）に、当時の第二世によって建てられたものである。

仏を供養し、仏の慈悲を願うためには塔や碑を立てたり、或は写経をしたり、経文を唱えたりする。経典を埋納することは平安時代から流行し其後土俗的に信仰と結びついて江戸、明治時代には先祖代

々の供養や或は疫病・火災・戦い怨霊封じなどに使われた。又一つには社会不安から逃れるために経塚をつくる必要もあったものと思われる。

千光寺の塔ができた享保の頃は八代吉宗将軍の頃、有名な大岡越前守忠相が町奉行として、元禄時代からの悪政の集積を改めんとし名裁きをした時代で、風水害や火災は絶えず、一般の武士や百姓・町人に至るまで苦しい生活を余儀なくさせられていた時代であった。

地方の肥後藩においても同じことで、三代綱利の時代に災害や藩主の豪華な生活のため、江戸における借金だけでも三十七万両を越え（米にして四十五万石）だといわれ、その負担は一般大衆に重くのしかかっていたという。細川藩災害損毛誌に依ると、享保二年江戸藩邸類焼に続いて、しきりに災害起り、半災にも満たない減収で、享保年間に三十万石以上の減収が六回もあり、二十一年間で豊作の年は僅か一ケ年にすぎなかった。特に享保七年の凶作の年は肥後藩での餓死者が六一二五人にも及び野草まで食べ尽したと伝えられている。一般の武士や町民ばかりでなく、特に百姓の生活は言語に絶するものがあり、年貢が納められない時は、会所にある牢に入れられ、厳寒の候でも水牢にひたし、こらしめられたといった世情であった。

この千光寺の二世利賢院の塔建立の動機は調査する方法もないが当時の世情からして推測すると、この苦界に喘ぐ民衆を仏力によって救い、民心の糧となさんとの崇高な精神の発露からではなかろうか。今は写真の如く荒れ果て、訪れる人とてなく、塔石は倒れ、落葉に埋もれ五輪塔の残欠と共に、本堂裏に散在している。一字一石の塔は益城町でも唯一つの珍らしい貴重な遺跡である。

(注)

①釈迦の得度から涅槃までの一切の教を説いた仏教聖典の総称

②法華経の第二十条、観音経ともいう、観音が衆生の諸難を救いあまねく教化することを説く。

参考資料

広辞苑　仏教辞典

熊本県の歴史

文化財保護委員
坂本播義

赤井城の落城と福原の観音堂

かねてから九州統一を狙っていた薩摩の島津が肥後の制圧をなし遂げたのは天正十四年である。―有名な木山惟久（紹宅）が築いたといわれている赤井城も天正十三年木山の六殿官の祭日（九月十九日）に新納忠之・川上左京の率いる薩軍に攻められ木山城と共に落城した。この時紹宅は諸国巡覧に出て留守であった。其の子信連は防戦かなわず自殺した。紹宅の妻は幼児を携え持仏の観世音を乳母に背負わせ、福原まで逃げたが急追されて観世音を捨てて漸く袴野に逃げのびた。―観世音は一長さ二尺五寸許り今も福原の草堂にあるという。（肥後国誌）

夏の日盛りの強い日、私たち二人は福原の土田商店のところを左にまがり旧内寺道を清流に沿って、田んぼ道をのぼって観音堂を訪ねた。古老の山田さん（八六才）は「赤井ん城の御姫さんの守本尊を今ん竹本（草堂の西下）家に預けち、赤井ん城んみゆるとけお祭りしてくれ、と一こと残して、阿蘇の宮さしてでかけなはったげな」と話され、又吉住哲夫さんから、母から聞いた話だがと前おきして「観音堂から赤井の城が見えないように竹林や家などでさえぎると、目に障りがあるといい伝がありまず」ということであった。恩顧を受けた木山氏の願いを大切に残したい気持ちから代々地元民の間に語りつがれた話であろう。

一坪位の観音堂の上り口の板は朽ち果てて堂内に入るのも危険な位である。段上に古びた厨子があり、なかに木造の観音立像がお祀りしてある。右手ははずれて紛失しており、左手指は、何かを握っておられた丸い空間があいている。又頭周辺には十個近くの小穴があった。堂内をくまなく探したら、頭光の残欠と、頂頭の仏面と頭周の菩薩面が三個見つかった。千手観音の手とおぼしき残欠も転がっていないし、胴体にも手を留めてあったと認められる―痕跡もなかった。以上の事から十一面観音像であると認めてよかろう。

材質は楠で、全高八十一糎で、菩薩の全長は五十八糎、観世音の裏には墨で宝暦四丙戌年六月施主兵右衛門他に五人組の名前が刻んであり、古仏ロ仏師ロ川伝八という文字が読める。又台座の裏には

嘉永六稔二月六日、仏師宮地民部祐口とあり奉再口彫刻の文字と施主、長右衛門・貞助・幸四郎・彦左衛門・吉左衛門・利左衛門の七名の名があった。

ところが年代から考えると赤井城の落城は天文十三年であり、今から三百九十四年も前で菩薩の裏に書いてある宝暦四年は落城から百六十九年も下った年代である。この像が木山氏の持仏であったとはいい難いが、立像の大きさもほぼ文献記載に近いし、又いい伝えられている内容から考えても全く無縁のものであるとも思えない。落城の際福原に捨て置かれた木山氏の持仏が、二百年近くたって風雪に侵された仏を見かねた地元の人たちが、宝暦四年に再彫刻したものであると考えてもよくはなかろうか。

なお木山惟久は、赤井城の落城を帰途築前で聞き、帰っても仕方がないと思い築前に止まった。其の子孫が天明の頃木山六兵衛といって黒田家に仕え（二百石）だと伝えられている。（肥後見聞雑記）又木山町梅屋某家記に、赤井城落城の際自殺した木山信連の幼児を乳母が懐に入れて木山城代の竹崎筑後に托し、それで木山家代々の用達町人梅屋瀬左衛門が家に隠して育て、後家業を譲った。成人の後木山四郎左衛門信正と称し、加藤家の領国になってから木山郷の庄官となったとも伝えられている。

なお加藤家御侍帳によると元和年間、加藤右馬允與力のなかに木山六兵衛（百三拾七石弐斗七升六合）の名が見えるが、前記の黒田家の木山六兵衛とは全く無関係の人物であるか或は赤井城と係りのある者かどうか、御存知の方は御教示頂きたい。

文化財保護委員
木本寅喜
作本　巌

安永の香の木さん

香の木さんといっても土地の人以外は、御存知ない方が多い。県道（熊本－高森線）を東進して安永部落にはいると四っ角（左側は辻酒店）がある。そこから左（北）に折れて一〇〇メートルばかり行くと、右側に一際高く聳え立つ榎の大木があり、その根本に一個の碑がある。

土地の人々は歯の神さんといって、今でもお参りする人がある。伝え聞いて遠方からの参詣者も多い。〃この豆が芽をだすまでは二度と歯痛がないように〃と年と同数の大豆を炊ってお願いする。お礼参りにはお茶を供えするそうで、いつ行っても十数個の湯呑が碑前に供えてある。

同じ屋敷に住む作本亀喜（六九才）さんは、毎日お茶を供えて香の木さんのお世話をされている。作本さんは「明治の初め、香の木さんの榎の大木を切ったら、村にはやりいたみがあって、たくさんの死人がでたでたもんな、村にさわりがあったけん又同じ榎を植えたそうですたい。」榎の大木を見上げながら話された。

上益城郡誌の口碑・伝説の項には、次のように書いてある。昔修験の六部僧が此の地に穴を掘り、之を墓所と定めて線香を焚き昼夜念仏を唱え続けて、二三日後は次第に声も幽かになり遂に絶命した。穴を掘る時近くの人に埋葬を依頼した。そこに木があり、香の木さんといっている。前に一個の石があり、裏に弘治という年号がある……と。

郡誌の編集者角田政治先生は、口碑・伝説について「後人の戯作とのみ解し一笑に附する者あるも決してしかく直ちにしりぞけ去るものにあらず」といって、口碑・伝説の多くは地理を語り、歴史を伝え、殊に土地の変遷や遺跡の価値、人情の推移を教えるものである。この項に記したものは、各町村から報告されたものをそのまま記載、実際に調査したものでないのが遺憾であるといわれている。

筆者は郷土の先達角田先生の意を体して現地を調査した。香の木さんの榎の大木の根本に、南面してやや斜後に傾いた形で板碑が立っていた。高さ一一一センチメートル、幅八〇センチメートルの大きさで、碑の両端は写真のように二十センチ近くタビの木にまき込まれている。表面の右側に仏像が刻まれ、野部に二輪の頭光、二十四本の光芒があり、又左側には、

千時弘治二年□□七月□日

と刻んである。碑の前に石造の御供台があり、横面に

熊本市水前寺通
後裔　高橋義宗
昭和廿年四月吉日

と記してある。この板碑の仏さまは、阿弥陀如来で弘治年（一五五六）即ち室町末期に建てられたも

ので、約四二二年前のものである。
干支は丙辰である。
安永には寺跡といわれてる所が二つある。一つは木山の専寿寺が寛永十年開いた庵の跡、もう一つは木山川近くの道成という俗名の地で、この附近から阿弥陀座像と別に木仏一軀が発見されたと村誌に記してある。土地の人はこの辺を道成寺跡と呼んでいる。香の木さんの板碑はこれらの寺跡と関連があるものと推定されるが今のところはっきりとは判らない。
最後に御供台の奉納者高橋氏は調査したが判らなかった。一昨年の春先祖の墓に参りに来た西隆己夫婦が名刺を渡して帰られた。福岡の人であるが転勤先の四国に電話で話しを聞いた。大分宇佐八幡に仕えた神宮の先祖が、熊本県で賊に刀傷を受け安永まで逃れて果てた。今は歯の神さまになっていると聞いてお参りした。高橋氏とは親類ですとのことであった。郡誌記載の修験者の話は大分の六部僧であったのではあるまいか。
香の木さんのお祭は毎年一月十五日に行なわれ、昭和の初めまでは村の若もん頭の代表、今は葬式組の長がお神酒代を集め、作本さんを座主として続けられている。

文化財保護委員
木本寅喜



郷土の史蹟をたずねて

郷土史家　永田日出男

1. 津森を往く

秋は澄み
水は澄みて
津森の山河

稲の実る田圃の道、秋風の中を私たちは歩いた。坂本播義・松野国策・木本寅喜の三氏と私。津森の里を歩くのは私には初めてのことだった。昭和五十二年十月十四日、空は無限に拡がり一片の雲もなかった。案内役は坂本さんがしてくれた。

最初は下陣の千光寺。

いきなり松野さんが言った。

「永田さん、これは何でしょうかね。私は男子のシンボルと思いますが……」

何だろう、と四人が本堂の裏手に回って、見ると、胴回り一尺ばかりの、まさしく男子のシンボルが今しも突撃を起さんとする一瞬を待つかの如く憤然として天に向って奮い立っているのである。

「飯田の観音さんにもありますよ。陽根だけでなく、女性の性器も並べて祀ってあります。いずれも自然石ですが、立派なものです」

「何ですか、永田さん、性器を祀ると言うことは、どういう意味があるのですか」

木本さんは初めて御覧になったのだろう。この元校長先生はいとも謹厳なお顔でお尋ねになった。この答えは今は書けない。これを書いているとこれだけで紙面がなくなってしまう。

それよりも、千光寺には一対の古い仁王さんが立っておられた。大きな木を丸ごと刻んで作られたもので、こう言う作りを一本造りと言うが、鎌倉時代以前の仏像に多い造りである。

御本落の十一面千手観音菩薩は坂本さんの説明では一丈一尺とのことであった。

仏像が歴史的に価値あるものかどうかを簡単に知る方法は、その仏像が大きいか小さいかと言う事である。大きな仏像には概して価値高き仏像が多い。

「ここのお観音さんは飯田のお観音さんと兄弟だそうですよ」

と堂守のおばあさんが言われた。

千光寺に就いてはこれ以外にも例えば、天台から日蓮に変った事や細川の重臣沼田家との関係なども書くべきであろうが、これも紙面が無いので割愛する。又千光寺の次に巡った公民館前の三基の五輪塔その次に行った津森城これらも同じ理由で省略する。

そして、堂園に行く。

堂園の入口に行くと「道しるべ」があった。そしてその反対側には板碑が立っていた。

「これは何ですか」

と私は坂本さんにたずねた。すると坂本さんが

「私も初めてです、何でしょうかね」

と言ってその碑に近づいて行かれた。松野さんも木本さんも初めてだと言う。

碑は苔と埃に埋れていた。坂本さんがブラシで苔を落とし始めた。松野さんが水を汲んで来た。私はタワシで石面を洗った。木本さんは一心に何が刻ってあるかを探すのだった。

ややあって、水で洗っているうちに、阿弥陀三尊が姿を現わした。右に梵字の「サ」観音菩薩、左に「サク」勢至菩薩、その上部中央に「キリーク」阿弥陀如来がかすかに姿を見せて来たのである。私は思わずイキを呑んだ。静かに湧上る感動をどうすることも出来なかった。これぞ、私にとって、わがふるさと益城で見る最初の阿弥陀三尊であった。

「年号その他はありませんか」

と木本さんが言う。

「何んにもありません。しかし何故こんなところに阿弥陀三尊があるのでしょうね。」

松野さんが立上って、あたりの風景を眺め回すのである。かつては、この堂園の生活環境の中に阿弥陀三尊が建立される状況が確かにあったのだ。それを見極めようとする松野さんの眼である。

残念であるが紙面が尽きてしまった。この阿弥陀三尊は詳述したかったが残念である。

この日はこの外、法師塚、六部塔、浄信寺の五輪塔、坂本家の板碑等も見て巡っている、しかし、これらの報告も残念乍ら次の機会に譲る外はない。

2.飯田山登山道路

初春や
　老いても計画
　あれこれと

益城町の皆さん、明けましてお目出度うございます。

飯野青年団の諸君、新年お目出度う。

私は昨年暮れの十日、久し振りに飯田山に登りました。

その時、初めて飯野青年団のあなた達が「飯田山常楽寺」の案内板を飯田山の登山道路の起点や道中や山上の常楽寺の境内等に設置してくれていることを知りました。

将に精気潑剌生きて踊り出すような躍動感漲る案内板で、青年なればこその壮挙なる哉と立ち止まってしみじみと眺めた次第です。

特に私が感銘を深くしましたのは案内板を設置されたあなた達の行為が齎すその内容です。

飯田山には考えれば考える程さまざまな人間模様が包含されています。

例えば、あなた達が今回案内板を建てた飯田山の登山道路もその一つです。

御承知のように飯田山の登山道路には「姫嚇し」などと肥後国誌に書く「急坂」があるかと思うと何十米も「平坦」な道路が続きます。こんな山道は飯田山以外には最早ありますまい。なぜ、こんな急坂があるかと思うと平坦なところがあると云った道路が造られたのでしょうか。人間生活と道路の相互関係の発展段階で必然的に造られた現象であることは言うまでもありませんが、それが飯田山に今も尚残っていると言うことは貴重なことだと思います。

私どもの祖先は、なぜ、このような道路を造ったのか、それは、こういう道路が、或る時代、私どもの祖先の生活に相応したかったからでありましょう。

そこで、飯野青年団の皆さん、考えてみて下さい。

この「急坂」と「平坦」のごっちゃまぜの道路、道路としては零点の道路が、百点満点の道路、であった時代とは一体どのような時代だったのでしょうか。私どもの祖先はその時どんな生活をしていたから、このような道路を最善のものとして造ったのでありましょうか。

この道路の謎を解明すれば、私どもは当時の生産手段や生活の様式や社会機構等を知ることが出来るのです。それが歴史の流れの中で、どのような位置を占めていたかも知ることが出来るのです。

あなた方が案内板を設置された行為の内容にはこのような重大な歴史的価値が内蔵されていたことをあなたたち自身知らねばなりません。

ついでです。なぜ、このような道路を私どもの祖先は造ったのか、青年団全員で考えてみて下さい。

そして、これを解明して下さい。

飯田山の登山道路は今に残る生きた文化財です。

附記

役場の建設課土木係員各位。

飯田山登山道路は本文の現飯田部落からと御船町木倉からと二つがあります。山上の常楽寺と道路起点の麓との高低差は両方共大体三百米で延長は約三粁です。従って平均勾配十%とすると勾配としては過不足なき道路となります。

現に木倉に通ずる道路はそのようになっています。益城町の方だけが本文の通り現在の土木常識では不可解です。しかし、実はここに歴史的価値が潜んでいるのです。

最近、日本各地の城下町で「旧街路筋」の文化財的価値が認識重視され保護政策がとられつつあることは御承知の通りです。様相こそ異りますが飯田山登山道路がこれに相当するものと私は思っています。従って、文化財としての視点からすれば飯田山の道路は勾配や線形の変更があってはなりません。蛇足とは思いますが、このこと皆さんの御心に留置き下さる様お願い致します。

再び、飯野青年団諸君。

冠頭の如く、私は今年も「老いても計画、あれこれと」立てました。その中に、飯野校区文化財の悉皆調査（余さず全部調査すること）があります。その時は皆さんを御訪ねしたいと思います。どうぞ御援助御協力下さい。

3.古閑の放牛地蔵（その一）

ナマスにあ　氷の張る
ナマスにあ　氷の張る

益城の山河はその時刻にはまだ深沈として夜のしじまの中にあった。その中で、ただ、古閑部落だけが、どの家もどの家も、異様な

熱気につつまれていた。家々にはもう先程から明々と灯が点されているのである。一番鶏もまだ鳴かないと言うのに、凍てつくような冬の夜空をついて威勢のよい触れ声が部落を巡回するのであった。

ナマスにあ　氷の張る
ナマスにあ　氷の張る

叫び声は山に木魂（こだま）して嫋嫋たる余韻を引いて返ってくるではないか。

ここで言うナマスとは魚の鱠のことではない。大根のナマスである。

旧暦十月二十四日は新暦に直すと十一月の下旬から十二月の中旬にあたる。だからもう寒い、明け方は氷を見る時もある。

古閑部落では旧暦十月二十四日になると朝まだ暗いうちから全戸を挙げて地蔵祭が行われるのであった。古閑には、上・下・向（むかい）・新屋敷・野口の五組があって、地蔵祭はその年当番になった組が祭祀を司り御馳走を作って非番組の者を招待することになっていた。ナマスにあ氷の張る、と触れ回るのは、お祭の酒宴の準備が出来たぞ、と言う招待案内である。

この触れは二回行われた。一番目は一番鶏の鳴く頃、二回目は夜明け頃に触れ回ることになっていた。

愈々、村の者が全員座元に集まって座につくと祭祀は浄土真宗の葬式の作法で行われたと言う。沼山津の光輪寺（西本願寺系）から和尚が来て朝と晩二回読経した。面白いのは、この日だけは、村の者は酒を親椀一杯と汁椀一杯はどうしても飲まねばならぬしきたりになっていたことである。それで村人は一人残らずぐでんぐでんに酔ったと言う。酔えば全員が、唄い・踊り、声高く喋りまくったのである。従ってこの旧暦十月二十四日の地蔵尊供養法会は生きている村人の一人一人が一年間の鬱積した想念を己の体内から残らず吐き出す解脱の場でもあったのである。又言うなれば、これは、古閑という部落共同体の一年の総締め括りでもあったのである。

古閑部落では、これよりさき、旧暦正月二十四日に地蔵さんに願立をする行事も行われていた。皆んながこの一年間無病息災でありますようにと村人全員が集まって地蔵さんに御願をするのである。

そうして、収穫が済んで旧暦九月二十四日になると、こんどはその御礼と報告の行事がこれまた村人全員が地蔵さんの前の広場に集まって行われるのである。

この御礼と報告の報恩感謝祭は少し変っている。放牛地蔵と地蔵堂の間を往復して両方の地蔵さんに百度詣りをするのである。

この両方の地蔵さんを往復して百度詣りをすると言う形式、これは一体何を意味するであろうか。なかなか意味深長である。

以上地蔵さんに関する三つの行事。正月の祈願祭、九月の報恩感謝祭、十月の供養法会、これらの行事が何時まで続いたかと言うと第二次大戦前までは確かに続いていたと言う。では何時からこの行事が始まったかと言うと、それは分らないが、私は今から二百四十八年前、享保十五年を初年度として始められたものではないかと思っている。享保十五年とは当時の古閑部落の村人全員が、その頃は十五戸ばかりの戸数だったと思われるが、老いも若きも男女全員が心を合せて「放牛の地蔵さん」を建立した年である。

4.古閑の放牛地蔵（その二）

昔、古閑は非常に貧しい村だった。赤ん坊は生まれても次々に死んでいった。女房たちは死んだ吾児を抱きしめてはただ泣き崩れるばかりだった。しかも、我が家だけで墓を造って吾児を供養する余裕はなかった。女房たちのあいだから誰言うとなく地蔵さんを祀って死んだ幼児の冥福を祈ろうと言う話がもち上った。当時、古閑村に中村隆以（たかしげ）と言う学問のある人がいた。村人たちは隆以に頼んで地蔵堂を建立することにした。元禄十二年であった。今から二百八十年前の話である。隆以（たかしげ）は地蔵堂が完成すると、地蔵堂に自分で灯籠を造立した。その灯籠は今も地蔵堂の横に二百八十年前と同じ姿で建っている。

元禄十二年から三十年の歳月が経った。享保十五年になった。地蔵堂を建立した時四十才だった当主は七十才の老人になった。家は嫡男に譲られていた。十才だった子供は四十才になっていた。祖父母や父母が地蔵堂を建立したよう

に自分たちも何かを建立しなければならないと新しい当主たちは考えた。そういうとき、やって来たのが「放牛」である。放牛は光輪寺の坊さんに連れられてやって来た。やって来たと言うよりも村人たちが光輪寺の坊さんに頼んで放牛に来てもらったのである。前述の通り一軒一軒が自分の祖先の墓を建立するほど村人は裕福ではなかった。放牛は村人全体の共同供養塔を建立することを進めた。いや、そうではない、村人の方から放牛名儀で供養石仏を建立して下さいと放牛に頼んだのである。その為に放牛に来てもらったのだ。

熊本市を中心にして、放牛名儀の石仏がその頃はもう七十体以上も建立されていたのである。百姓町人たちは何処からともなく放牛の噂を聞いて、放牛が名をかして各地で村人の祖先供養石仏を建立しているのを知っていたのである。百姓たちが自分達名儀で村の共同墓でも建立しようものなら藩の役人は即座に年貢の増額を命ずるのであった。石造仏を建立するようなそんな余裕があるなら年貢をもっと納めよと言うのである。これは肥後藩だけのことではない、幕藩体制下に於ては何処も同じ百姓町人の実状だった。

「これは、自分たちが建立したものではない、放牛と言う風来坊が建てたものと役人には言いなさい」

と放牛はどの村人にもそのように言っていた。

古閑では地蔵堂の前に、祖先の供養石仏を建立するように放牛は村人に勧めた。それは地蔵祭と一緒に放牛石仏の祀り即ち祖先供養祭祀が出来るからである。地蔵祭にこと寄せて役人の目が晦ませるからであった。前述の通り古閑の地蔵祭は正月・九月・十月である。こんな月に地蔵祭をするところは何処にもない。地蔵祭は八月二十四日と日本国中決っている。それが古閑だけが、正月・九月・十月と言うのは地蔵祭とは名ばかりで中味が祖先供養だからである。こういうような見通しから放牛は村人に地蔵堂の前に放牛石仏を建立することを勧めたのである。

これも前述したが、古閑では九月二十四日の願解きの時は、地蔵堂と放牛石仏の間を百度詣りすると言う。これはなかなか意味深長であると四月号に書いた。この百度詣りは何かと言うと、これも役人に対する偽装行為である。私たちは私たちの手で供養石仏を建立し、そのお祭をしているのではありません。ただ、祖先がしたような方式で地蔵祭をしているだけであります。と村人は言いたいのである。古閑の場合の九月二十四日の願解きとは祖先に対する報恩感謝祭であるが、日本の何処に願解きの時百度詣りをする風習があるだろうか。百度詣とは、何かを祈願する時に行うものである。

しかしこういう奇談は、放牛石仏に関する限り決して古閑ばかりの現象ではない。

古閑は放牛七十七体目で、七十六体目は玉名郡長州町上仲之州と言う村に建立されているが、この七十六体の長州と、放牛石仏二十四体目が建立されている飽託郡飽田町藤富浜には、古閑どころではなく、全く信じられないような話が言い伝えられている。

5. 谷川の放牛石仏

谷川に放牛石仏百七体目の地蔵立像がある。

両手に宝珠を持ち、仏体上部に「南無阿弥陀仏」左下に「享保十七年壬子十月吉日」の刻銘がある。放牛石仏は益城町では古閑に七十七体仏がある。上益城郡にはこの外矢部町・田迎・鯰村にある。放牛は江戸中期の僧侶で熊本市を中心に石仏百九体、水盤一、百臼一を残している。谷川にある百七体石仏は放牛石仏最後のもので、放牛はこれを建てると翌十一月八日に没した。

放牛が江戸中期になぜ石仏百九体を建てたかと言う願意は現時点では明確でないが、貧しき農民、漁民・商人に名を貸して幕藩体制の矢面に立ったことだけは確実である。

谷川の放牛石仏が何であるかは言明出来ない。古閑の七十七体仏は明らかに古閑部落の供養塔である。七十六体は玉名郡長洲町上沖之州にあるが、これも沖之州部落の祖先供養塔である。三十体目あたりまでは個人の供養塔が多い。熊本市が全体の約半分、他は飽託郡・鹿本郡・菊池郡・上下益城郡にある。仏体は地蔵が一番多く全体の約七〇%、他は観音・阿弥陀釈迦・薬師の順になっている。谷川の放牛地蔵が何であるかは放牛

研究の全貌が判った時点で判断されると思うがそれが判るのはあと数年先になるだろう。

6. 再び谷川の放牛石仏

昭和五十六年二月号の広報に谷川の放牛石仏を書いたとき、古閑の放牛石仏七十七体仏は祖先の供養塔であるが谷川の放牛石仏は何であるか判らないと書いた。

谷川の石仏は放牛百七体目で放牛石仏としては最後の石仏である。この石仏が建立されたのが享保十七年十月（今から二百五十年前）で放牛はその翌十一月八日に亡くなっている。この石仏には光背の上部に「南無阿弥陀仏」と彫り、台石に法歌がある。台石がコンクリートに埋っているので頭の出ている部分しか読めないが、読める部分は「一へん……八十……を…」



である。

これは「一へん」の称名のしたには、八十億却のつみをめっす」と彫ったものである。

放牛六十五体仏が菊池郡西合志町野々島にあって六十五体仏にもこの法歌が彫ってある。

谷川のこの頭だけ残っている法歌の断片は昭和五十六年十一月二十一日益城町文化財保護委員長木本寅喜先生と永田と二人で調査したとき初めて発見した。

浄土三部経の観無量寿経の中に「称仏名故　於念々中　除八十億劫生死之罪」と云う一章がある。

「仏名を称するが故に、念々の中に於て、八十億劫の生死の罪を除く」と訓む。

これは、五逆、十悪を犯し、生前不善をなした者も、命終るとき、南無阿弥陀を唱えると、八十億劫の罪を滅し、極楽浄土に往生することが出来る。と言う教えである。

こういう法歌が台石に彫ってあって、光背上部に「南無阿弥陀仏」とあるのが谷川の百七体放牛石仏である。

この石仏は前述の通り放牛最後の石仏であった。これが建立されたとき放牛和尚はこれが我が人生最後の石仏になるとは思わなかっただろうが。しかるに虫の知らせか。放牛はこの石仏にこのような「一遍の称名云々の」下品下生の者への教えを刻み込んだのである。

これは偶然だったろうか。いや、そうではあるまい。広く深く大海のような放牛和尚の自然な慈悲の声がたまたま発露したものと我々は受取らねばならないだろう。また一方それ程、当時の百姓の生活は悲惨だったのである。

死せる者は悲し、されど、生ける者もまた悲し、である。

江戸時代は、痩せ衰えて、星をいただき、月影をふみ、大地を這いずり廻る生活の中に百姓の宿命があったのである。百姓には、仏像・仏画は勿論、名号（南無阿弥陀仏）を書いた紙片さえ、求め・唱える、余裕などはなかった。そんな時間や金はなかったのだ。

その百姓に

「命絶えるとき、一度でよい、『南無阿弥陀仏』を唱えなさい。そうすると、極楽浄土に往生出来る」

と、放牛は血を吐く思いで論すのであった。

谷川の放牛百七体仏は、我々にこのような当時の百姓の生活に放牛和尚の慈悲を語りかけるものである。この石仏が何であるかは皆さんで考えてみて下さい。

7. 稚児の塔

三竹に「稚児の塔」と俗称されている宝篋印塔がある。この塔は阿蘇の西厳殿寺や飯田山常楽寺の江戸時代に造られた宝篋印塔とは異り、古式の立派な宝篋印塔である。宝篋印塔と言うのは「宝篋印塔」と言うお経を納めた塔で、この塔に香花を供え礼拝し、口の中で誓願すれば、その人はあらゆる精神的苦脳・病苦から解放されると言われている。

丘の上の影向石と同じ時代にこの塔は建てられたものと思われる。稚児の塔と言う呼称から想像すると、豪族の首長はお宝の子息を亡くしたのではあるまいか。子供を亡くした親の気持というものは子供を亡くした親でないと判らない。彼はこの塔を建て朝夕この塔に詣では己の気持をしずめていたのであろう。

「稚児」とは「幼年・少年」と言う言葉である。

この宝篋印塔は上部の相輪が失われていて、基礎もこの塔のものではない。元々ここにあったものではあるまい。塔身には金剛界四

仏が梵字で彫ってある。このような古式の宝篋印塔は益城町ではこの一基だけである。材質は丘上の板碑同様阿蘇溶岩である。

家の床の間に飾って置きたい程に華麗な塔である。

8.浄信寺の五輪塔

津森の浄信寺。「義田禅定門文明十〇天〇〇五、天台の古迹なり津森城主光永家代々の菩提所、天文年中信宗となる。

こう言う記事が肥後国誌にあるので浄信寺の五輪塔と言えばこれにとらわれそうであるが、これにとらわれてはならない。

浄信寺には五輪塔と五輪塔に模して重ねられた石塔が合計三基ある。

三基並んでいる右端の碑に首記の刻銘がある。義田禅定門が今は「義田禅定〇」とのみ、文明十〇天〇〇五は「文明……」と見えるだけである。この塔は下が宝塔の基礎で、その上が五輪塔の地輪、これに右の記銘がある。その上に五輪塔の水輪を二個重ねて積み、五輪塔の火、風空輪が上部にある。義田禅定門云々の二段目から上はばらばらの寄せ集めであるが室町中後期のものである。基礎には南北朝を思わせる格狭間がある。頂点から肩の線に到る角度は五度で鎌倉の古様を示すが、上部一線が豪健重厚を欠ぎ、やや衰退の兆しを抱かせる。全高は一四二糎である。三、四段目の水輪は逆に積んである。

中央塔。全高一五四糎。これも寄せもの、下から五輪塔の地輪・水輪、その上は宝篋印塔の笠、上部は相輪の残欠か。地輪と水輪は別物であるが、水輪には鎌倉を思わせる薬研堀の種子がある。地輪も鎌倉末期か。

左端の五輪塔。これは原初のままである。現在、原初のままの塔は益城町では、この塔一基である。鎌倉末期か南北朝であろうと思われる。全高一七九糎。大きさが鎌倉を思わせる堂々たる塔であるが、四転種子が美しく・弱く、花模様であるのが気になる。また水輪が若干横に脹らみ、地輪が横幅に比べて高さが高いのも気になる。しかし南北朝を下ることはあるまい。地輪は逆になっている。

肥後国誌は右二基を津森城主光永氏の墳墓としているが、断定し難い。

9.下陳の五輪塔群

公民館の下陣分館前に一基の板碑と三基の寄せもの石塔がある。

板碑は一部欠損し、また銘文がなく、これが何時、何の為に建立されたものか不明。

寄せものの塔は向って右より、下が宝篋印塔の基礎、その上が五輪塔の水輪の如きもの、上部が宝篋印塔の半壊の笠、その上に宝珠の如きものがある。全高一二四糎。水輪の如きものに梵字キリークがある。「欽奉造立一基、従二位惟豊卿」と基礎に彫っている。

中央のものは、下はこれも宝篋印塔の基礎、その上は宝塔の塔身の如し、その上は五輪塔の火輪、上部には宝篋印塔の露盤が乗せてある。

基礎に「従二位惟豊卿、永禄三白庚申二月十三日」とある。全高一一二糎。

左は、これも一番下は宝篋印塔の基礎、その上は五輪塔の地輪、上は五輪塔の水輪を扁平に削ったもの、全高は八六糎、「阿蘇山大宮司忠光院惟□。忠光院」の刻銘がある。

教育委員会が建てた標木には、これは看板屋の書き違いであろうか「永禄」が「文禄」となっている。

10.芭蕉の塞の神

津森の芭蕉に奇岩と丸石神が祀られてある。サイの神である。サイの神は村の入口で疫神悪霊はここから入ってはならないと言うのが元来の神意であるが、芭蕉の場合はそのような神意は有るものの、子孫繁栄、村民の無病息災、五穀豊穣を直接の祈願としているように見受けられる。

今は祠をブロックで新築してあるが、以前は新藁で一年毎に作っていたと言う。お祭の前日になると子供たちは夫々家から穀物と野菜を持寄り、子供だけでサイの神様の広場でオジヤを作って食べたと言う。二月十五日には村が二た手に別れて綱引きをしたと言う。これらのことは今は廃れてしまったが、往時の百姓の豊作を祈る気持、無病息災を祈る気持は、想像に絶するものがあったのである。

丸石神は益城町には最も多く、

砥川・木崎・秋永にもある。しかし、この三ケ処の丸石神はサイの神とは言い難い。

丸石神は熊本県下で三十ケ処ばかり発見された。最も数の多いのは菊池郡七城町高田にあり、約一千個の丸石が祀られている。

芭蕉の丸石神は百弐拾五個である。

11. 旧在福田寺五輪塔

文化財はなぜ大切か？

大昔からずーっと福田村字内寺の福田寺々域内にあった「五輪塔」がいま西原村字宮山に移されています。

今年の三月二日、田原の坂本播義さんと広崎の木本寅喜さん＝共に益城町文化財保護委員＝と私と三人でその五輪塔を見て来ました。

五輪塔と言うのは写真で見られるように、五ツの要素から成る「塔」の一形態です。性格は「墓」の場合と「供養塔」の場合があります。私たちが見た西原村に移されている五輪塔は「供養塔」でした。

三人で年代を調べて判明したのですが、この五輪塔は大変古い五輪塔でした。只今、日本で公表されている五輪塔では第十一番目に古いということが判りました。また、平安時代・鎌倉時代の日本の古い五輪塔では全国で最大のものであると言うことも判りました。

こういうことが判ると三人は吃驚してしまいました。日本最大の五輪塔、古さでは日本で第十一番目にあたる五輪塔が大昔からずーっと福田村字内寺にあったのです。

年代は文永八年となっています。今から七〇八年前です。総高は二三九㎝です。

この五輪塔は今から二十数年前、内寺の旧在から宮山の山本さんという開業医に買取られて今は同氏宅の造園の具となっています。

これが、日本で第十一番目に古いと言うことと、日本最大であると言うことは、日本国としても大変貴重であることは言うまでもありませんが、実は福田寺としても益城町としても、かけがえのない程大切なものであったのであります。

旧福田村に大昔「福田寺」と言う大きなお寺が有ったことは益城町の人なら誰でも知っていることです。しかし、この福田寺が何時創立されたかと言うことになると誰一人知るものがいません。

何時、福田寺が創立され、何時迄続いたかと言う、お寺の歴史が判れば大変有難いのですが、それは今も判りません。そう言う歴史を調べるにはどうするかと申しますと、はっきりした文献があれば別ですが、信頼できる文献がない場合は、そこに残っている石造物等に頼るしか外に方法がないのです。

そこで、福田寺に残っている一番古いものは何かと調べてみますと、嘉暦二年と銘のある地輪があります。これが現在福田寺に残っている一番古い遺物です。嘉暦二年は鎌倉時代末期で今から六五二年前になります。今度宮山に見つかった五輪塔は文永八年で前記の通り七〇八年前です。ですから嘉暦二年からすると同じ鎌倉時代でも年代は五十六年も溯ることになります。

今、宮山の文永八年塔が発見されなかったとしますと、嘉暦塔が一番古いものですから福田寺の創立はどんなに古いとしても鎌倉時代の初めと言う推定しか成り立ちません。ところが、文永塔が現われますと福田寺の創立は平安時代ではなかろうかと言う想定が成立するのです。仏教が福田村に平安時代に入っていたのか、鎌倉時代だったかは、大変な違いであります。

こういう訳で、このたびの五輪塔は日本の五輪塔界に貴重な一基を加えたと言うばかりでなく、福田寺の歴史の想定にも大きく貢献したのであります。

ここで、序に申添えますと、今から六十年前、大正の初め、角田政治先生が福田寺跡を調査された時、永仁三年と永仁五年の五輪塔が有ったと言うことです。永仁三年塔はその後紛失して見当りませんが、永仁五年塔は旧飯野村字土山岩崎登喜男氏宅にあります。移されたのは終戦後だそうですが、永仁五年も現存する嘉暦二年塔からしますと時代が三十年も溯ります。この塔も福田寺にとっては掛け替えのない塔だったのであります。今回発見された文永塔とその貴重度は少しも異りません。

どうです、皆さん。

山本家に移された文永塔にしろ、岩崎家に移された永仁塔にしろ、個人の庭に移されて、唯単なる観賞用とされるには随分と勿体ないとは思いませんか。尚、両家にはそれぞれの塔を移した御本人は夫

々故人になられて、今はこれを観る客人の来訪も絶えてありません。
文化財は有るべき処に有ってこそ価値があるものです。
（S五四・五・二八）

12. 安養寺跡板碑

谷川（たにご）の安養寺跡は竹林になっていて寺跡を偲ばせるものはこの板碑が僅に一基あるのみだ。しかもこの板碑は安養寺が火災で全焼した前年銘のもので安養寺にとってはまたとない由緒の品である。

板碑は別図の様な形状で、安養寺の住職であったと思われる「宣秀」と言う和尚が自分の為に建てた逆修碑である。「七分全得逆修妙経千部讀誦所　仝十三部書写」とあり、此処で読経し、写経もして自分の来世を祈ったとある。妙経とは法華経のこと、龍集とは年号の下に記す語で、この年と言う意味である。この板碑で言えば、「天文二十二年癸丑（みずのとうし）の年十月大吉祥日」と読めばよい。安養寺は山院号を大楠山東光院と言った。天文二十三年十二月七日猛火に依って焼けたと肥後国誌にあるから、この碑を建てて丁度一年目に安養寺は焼けたことになる。尚も肥後国誌は続けて、この寺の開基を延暦年間と云う。もし、それが本当なら平安朝の初めで益城町では最初の天台寺院であった。延暦年間開基は俄には信じ難いが、天文二十三年に全焼して三年目の弘治三年に再興されたことは信じてよい。弘治三年は昭和五十五年から四百二十三年前である。その後、今度は何時無職廃寺になったかは判らない。



安養寺の本尊であった薬師如来は脇侍の日光・月光菩薩と共に今は内寺の薬師堂に祀られている。

板碑上部中央の梵字は「ア」と訓み「仏さま」を現す梵字である。

13. 山法師塚の板碑

下小谷（しもおやつ）の坂下から辰崩に行く旧道の墓地の反対側に板碑が倒れたままになっている。弥陀三尊の板碑である。三尊仏像を彫った板碑は益城にはこれが一基あるのみ。次のような銘文がある。

□奉□□天乗妙典十三部□□
奉欽造立逆修善根
現世安穏後世善根□道受楽
亦得聞法既聞法已離諸障礙
道珎　道安　妙銀
妙春　道了　妙永
干時天文十六年丁未仲春彼岸日
作者　聚細

他に十三名の交名が彫ってある。

道安・妙春と言う夫婦が、道珎妙銀・道了・妙永。男子二人、女の子二人の我が子と十三名の一族郎党に現世が安穏でありますように、釈迦如来の経典を聞いてもろもろの障礙が振りかかりませんようにと、来世は極楽に行きますようにと祈って建立した逆修碑である。生きているとき死後の極楽浄土参りを願って建てる碑を逆修又は予修碑と言う。

天文時代が今日ありて明日なき戦国時代であったことを思うと道安の気持が伝わって来るではないか。今から四三五年前のことである。

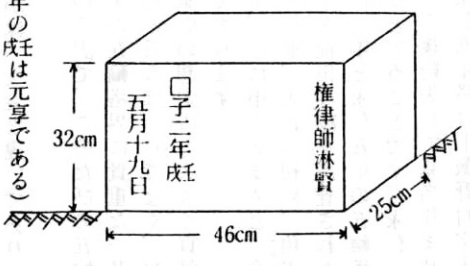
14. 福田寺廃寺跡

福田寺の遺物としては次の物が残っている。時代順に並べると、

一、文永八年五輪塔

現在は西原村に移っているが元福田寺領内にあったもので、これは日本の五輪塔の中でも指折の逸物である。益城町は勿論、熊本県の第一級の宝物である。「広報ましき」昭和五十四年八月号に詳述されてあるので承知され度い。

元享塔（五輪塔地輪）
（地輪が中央より割れている）



二、永仁五年塔

これは土山の岩崎登喜男氏宅にある。これも八月号に書いた。

六十年前、大正六年、角田政治先生が福田寺を調査された時、永仁五年塔と同場所に永仁三年塔が有ったと言うが今は何処に行ったか分らない。

以上の三点は福田寺にとっては掛け替えのない重要石造物であるが、紛失したり、移動されたりして現地にないのは返す返すも残念である。

現在、現地に残っているもので最古の物は

三、元享二年塔

四、嘉暦二年塔

がある。共に鎌倉時代で元享塔は坊主塚に嘉暦塔は山本磨氏宅の裏にある。

次に山本磨氏裏台地上の畑畔に五輪塔地輪二十六、水輪六、火輪八、宝篋印塔笠一、風空輪若干が一カ処に積上げられている中に、五輪塔の地輪に

阿闍梨　長賢　壬
□□……午卯五□

とあるのがあり、これは興国三年の壬午と判断される。興国三年は南北朝時代で嘉暦二年より十五年あとで昭和五十五年からすると六百三十八年前である。

元享塔のある坊主塚の台上にも五輪塔の残欠が若干あり、板碑が三基ある。板碑を年代順にすれば

六、大永四年、阿弥陀早来迎

七、大永六年　祈念塔

八、永禄七年　供養塔

これらには夫々に刻銘があるが省略する。

この外福原の農道の分岐点に

九、大永六年の板碑がある。これらは室町時代に属する。

以上九点が現存する福田寺の遺物である。

これから想像すると福田寺は飯田山常楽寺と同時代の平安末には既に開基されて、鎌倉・南北朝（南朝）・室町時代に盛行したことが知られる。

註記、右のうち「元享塔」は昭和五十五年十月二十九日、坂本幡義・広島保人・福永泰の三氏が半ば埋れていたものを発掘、発見したものである。

福田寺跡遺物をもうこれ以上散逸させてはならない。幸い現地在住の山本磨氏夫妻がよく見守って下さっているのでこの点心強く、有難いと、祈るような気持で思っている。

15.上砥川の衣更の弥陀

上砥川の阿弥陀石のことを「肥後国誌」と云う本にはこんな風に書いてあります。

「当村林樹の下に一大石あり、高さ四尺ばかり、何れの頃よりか弥陀の仏像を彫る、年々石の膚へ仮落ち、また元の如し、故に村人これを衣（ころも）がえの弥陀と云う。この石年々長じたる後船野山の高さと等しくなれば天地くつがえり弥勒の世となる」と。

また、「肥後国古塔調査録」と云う本には「……年々石の肌へ仮落ちて、また元の如くなる、故に衣更の弥陀と云う。按ずるに該地は寺院の旧地ならんも山号寺号等知るべからず。裏の山を寺山と云う。近傍に塔片の土台石あり、また笠石の転倒せるものあり、この寺の全盛の建立なるべし」

宝治二年二月五日
□石仏□□□□
□出生□□□□
左近□□□

とあります。

年代は宝治二年二月五日とこの本にはありますが、これは「宝治二年卯月五日」と仏像の肩に彫ってあるのが今も明瞭に読めます。卯月ですから四月です。阿弥陀石仏となってはいますが、阿弥陀の上品上生（じょうぼんじょうしょう）か釈迦の定印かはっきりしません。近傍に塔片の土台あり、とありますのは宝塔の塔身で、大小二基あります。二基とも四方仏が刻んであって、年代も彫っていますが判読出来ません。

宝治二年は鎌倉時代の中期で今から七三三年前になります。刻銘のある仏像では益城町で一番古い石仏です。益城町で一番古い石仏であるばかりでなく熊本県でも最古の石仏です。

16.下砥川神社の板碑

下砥川神社境内に元亀二年（室町時代）の板碑があります。次のような銘文があります。銘文は漢字（白文）で書いてありますので読み下し文に書きあらためます。

上部に、「ア」と云う梵字（種子）が彫ってあります。アは一字で、大日如来その他幾つもの仏さまを現わしますが、この場合は大

日如来でしょう。太陽があまねく宇宙万物を照すように、大日如来はそれ以上に、あらゆるところに万遍なく智慧の光明を放って闇夜を照輝し苦患を除かれる徳があるとされています。この広大無辺の威徳を万徳といい、すべての仏菩薩はこの徳の一部をつかさどることになっています。

さて、銘文の漢文（白文）を読み下し文に直しますと次のようになります。

「この板碑を建てた趣旨は、若くして戦死した者や一生苦労しつづけて死んでいった者の菩提を弔ふためである。

阿蘇惟前（あそこれさき）と云う武将は今年七十歳になるが、生来誠実で慎重に行動する人であった。そこで多くの武勇の士が惟前の下に集ってきた。いざ戦争となれば、あるときは食に飢え、あるときは水に渇するときもあった。あるいは勇ましく闘って敵の矢に当り一命を落す者もあった。斬り結んで戦死する者もあった。今これら惟前のために斃れた大勢の人々や親族の者たちの菩提を弔らわんとするものである。

つらつら考えるに、人間生きているあいだは上下の別もあるが、死んでしまえば皆同じである。『風霊聖霊　ぼんれいせいれい　倶契東山雲　ともに東山の雲にけいし　俗骨仙骨　ぞくこつせんこつ同拝西岳暁月　ひとしく西岳の暁月を拝せん』百姓町人も生前高位高官だった者も仏さまになればみな同じである。東山にかかる雲の上で仲良く手をつなぎ、共に西の空高く浮ぶ暁月を眺めるだろう。さればここに『超八醍醐経』を拝論して各人がこぞって極楽往生することを祈るものである」

元亀二年十月吉日

以上の通りです。これを書いたのは天台宗飯田山常楽寺の学僧だったろうと思います。碑に彫ってある白文は素晴らしい名文です。

17. 土山　岩崎氏宅の六地蔵

益城町には六地蔵が四基あります。土山神社横・安永六八九芳川氏宅・木山の四ッ角・土山岩崎氏宅、以上四基があります。

六地蔵さんはどんな仏様か。一口に言えば地蔵さんが六ッに姿を変えられたのが六地蔵さんです。

例えば、一家の主婦が、子供にとっては優しい母、夫に良き妻、しゅうとさんには感心な嫁、畑に出ると一人前の農婦、体育祭ではママさんバレーの選手、村の文化人としては優秀な歌人と言われるのと同じです。

地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間天上を六道と言います。地蔵菩薩が、「心配するな、地獄に堕ちても必ず助ける」と六通の辻に六体に変身してお立ちになっている姿が六地蔵さんです。ですから道の辻とか墓地の入口に六地蔵は建っておられます。信仰は室町時代から盛んになりました。

話が大きくなりますが、釈迦如来が入滅されて弥勒仏が下生されるまでの間は五十六億七千万年と言われています。この間を「中間の時」と言いますが、この中間の時、弥勒仏が出現されるまでの五十六億七千万年の間は地蔵菩薩が釈迦如来の代理者となって衆生の教化に当られるのです。お釈迦さまが生前地蔵菩薩に弥勒が生まれるまでの五十六億七千万年は無仏の世界になるからこの間はあなたが私の代理をしなさい、と言われたからであります。そのお釈迦様の代理でもある地蔵さまが六道に苦しむ衆生を救われるお姿が六地蔵尊であります。

土山の元飯野村長故岩崎登喜男氏宅にある六地蔵は元小池三叉路にありました。小池三叉路には昔小川が流れていました。村の青年たちは面白半分に六地蔵さんをバラバラにして小川の中に投込み、また元通りにするとまた力試しと称しては投飛して喜んでいました。テレビも自動車もなかった時代の青年たちです。これを見た小池の故福永勝男氏が「安全な場所に祀ってくれないか」と岩崎村長に要請されました。それではと言うので村長自身が自宅に保護したのが今同氏宅に残っている六地蔵尊です。今は故人に代って夫人（八十二歳）が祀りを続けておられます。岩崎村長が保護していなかったらこの六地蔵は消滅していたことでありましょう。この六地蔵には竿石に享保十三戊申三月□日とあるのが幽かに判読されるだけで地蔵六体の像容は定かでありません。中台は失われ、竿石・がん部・笠宝珠は別々の寄せ物で、何時の時代も遊び半分に青年が壊したものでありましょう。それを信心深い老人が補充して、新旧が一体にな

っているのがこの六地蔵さんです。笠が最も新しく明治か大正と思われます。享保十三年は丁度江戸中期で今から二百五十三年前になります。その頃広崎村古閑と福田村谷川に放牛石仏（地蔵菩薩）が造立されました。古閑の放牛は享保十五年、谷川の放牛は享保十七年です。享保時代と云う時代は有名な享保の飢饉の起った残酷時代であります。

土山の四ツ辻にある六地蔵さんは熊本に一つしかない珍らしい六地蔵さんですから次回に詳述します。

18. 土山の六地蔵

土山の六地蔵を建立したのは坂本桂衛門、伝七父子であった。土山の坂本家は遠祖は分からないが江戸前期（三五〇年前）からの旧家で土山の太子堂を再建したのも坂本桂衛門であった。太子堂を再建したのが嘉永五年、六地蔵を建立したのが嘉永二年である。

六地蔵の竿石には次のように彫ってある。

「従是本堂二十五丁・嘉永二己酉五月吉日・安見村石工半兵衛・坂本伝七・坂本桂衛門」

「従是本堂二十五丁」とは「是より飯田山常楽寺本堂まで二十五丁（二粁七百米）」と言うことである。安見村は下益城郡豊野村にある。中台・笠は失われて無い。龕部六地蔵の像容は合掌・数珠・柄香炉・錫杖宝珠・幢幡・上品上生（じょうぼんじょうしょう）が熊本県では珍らしく、恐らくこの土山の六地蔵だけではないかと思う。佐賀・長崎では見るが熊本県では見たことがない。これは「地蔵と阿弥陀は一体」と云う真言密教の教養に依るもので改めてこれを彫らせた学僧が偲ばれる。飯田山常楽寺の坊主と思うが、それにしても偉い学僧がいたものだ。飯田山歴代住職を調べると江戸時代最後の僧侶は豪如である。豪如の次は秀職になっている。豪如が亡くなったのが天保五年、秀職は明治二十四年、行年五十八歳とある。とすると、豪如と秀職の間にもう一人の僧侶が居らねばならない。この人が六地蔵の像容を考案した人になる。

坂本桂衛門も学問のある人だったと思われる。飯田山登山参拝道には土山から本堂まで一丁石仏（観音菩薩）が建立されてあるが、これも、恐らく桂衛門の寄進であろう。この石仏が儀軌に則り正確な像容になっている。これらの石仏は坂本家の庭で彫刻され、建立場所に運ばれたものであるから朝夕我が家の庭で石工に直接指示したのは桂衛門である。従って桂衛門は仏像に智識のあった人でなければならない。上品上生然りである。土山の六地蔵を建立したのは桂衛門が五十五歳の夏であった。桂衛門より五代の末孫がいま益城中学校長の坂本正徳氏である。

19. 旧在福田寺板碑

下砥川の松田登氏前庭の竹林の中で旧在福田寺の板碑が発見された。碑は高さ一二〇糎、横幅六五糎、厚さ二〇糎の安山岩で、次のような由緒書きが碑の裏面に彫ってあった。

「当仏像ハ此地ヲ距ル一里餘ノ福田寺廃墟ノ遺物ニシテ、文永二年之ヲ安置シ、今ヲ去ル六百四十七年前ノ建物ニ係リシ者ヲ遷シ祀リヲ以テ冥護ヲ祈ル矣、大正六年九月吉日　富永英之」

即ち「福田寺跡に有った文永二年板碑を大正六年九月この地に移設した」と御本人の富永氏が碑裏面に彫刻しておられるのだった。

しかし、富永英之氏の年代計算はおかしい。大正六年は西暦一九一七年で、それから六四七年前となると一二七〇年文永七年である。文永二年ではない。計算は間違っている。

それはともかく、板碑表面の弥陀来迎図像を見ると、文永年間は鎌倉時代であるが、鎌倉時代特有の素朴な力強さがない。何んとなく弱々しく、線が崩れている。あるいは室町時代ではないかと、採拓してみると案の定「大永四載申弐月吉日」の文字が浮び上ってきた。文永二年ではなくそれから二五九年あとの大永四年であったのである。

碑の表面は、中央に「阿弥陀来迎図像」像右に「法華妙典十三部讀誦逆修所」像左に「三部都法大阿闍梨法印正範」裏面中央上段に前記の通り「大永四載甲弐月吉日」とあった。

角田政治先生は大正六年九月から十二月の間に福田寺跡を調査しておられる。角田先生が福田寺跡

を調査された時は既にこの碑は持ち去られた後であったのだろう。角田先生は「熊本県史跡調査報告書」に「福田寺跡に三基の板碑有りしを、二基は残り、一基は同郡飯野村某の所に移されたと云う」と書いておられる。飯野村某が富永英之氏なのか。

この碑は「正範」と言う福田寺僧が後生安楽を祈って生前造立した逆修碑と解すべきであるが、二三の疑問点がある。

第一は、碑裏面に年号を彫るのも珍らしいが、表裏の書体が違っていること。

第二は通常年代は表面左右下部に彫るのをこの碑は裏面中央段に彫っている。

第三は銘文の終りに「敬白」の文字がない。

以上から考えて、これは広報に載せる価値があるかどうか、逡巡されたが、富永英之氏の「誤読による記録」が伝承されることは好ましくないので一応記録に止めることにする。

註記

大永四載＝大永四年のこと。

部＝部

法華妙典十三部＝法華妙典は法華経のこと、十三部とは五忍のことか。

三部都法＝三部とは、胎蔵界、蘇悉地界のことならん。即ち、仏陀の金剛典である。都は「すべて」と訓ず。従って三部都法とは釈迦牟尼の全教典を余すところなく守り行った、と解すべきであろうか。

20.飯田山常楽寺

益城町の古いお寺で、今残っているのは飯田山常楽寺だけです。無住で形だけが残っているに過ぎませんが、形だけでも残っていますので、今書き遺しておかないとあとでは分らなくなるおそれがありますから、いくつかを書きとどめておきたいと思います。

飯田山常楽寺のことを飯田の観音さんと云います。これは飯田山常楽寺の御本尊が、十一面千手観音菩薩であるからです。

飯田山常楽寺は何時ごろ出来たかと申しますと、今から八百五十年ばかり前、平安時代の後期に出来ています。比叡山の第四十七代座主（ざす）に忠尋と云う方が居られました。忠尋の高弟の真俊と云う高僧が、飯田山常楽寺を開基しています。一一三〇～四〇年代に開かれたものと思われます。

肥後国誌に飯田山常楽寺の開基を敏達天皇十二年、達卒日羅とあるのは誤りです。上益城郡誌も肥後国誌をそのまま写したもので郡誌も間違っています。

真俊時代は真俊の弟子で相俊と云う学僧もいました。天皇家の菩提寺京都泉涌寺を開基した俊芿も真俊の弟子です。その時代は三百有余名の青年僧が飯田山で勉強したと言います。昔の飯田山常楽寺は今の熊本大学校みたいなものでした。その頃の坊さんは死んだ人の供養をするのが商売ではなく、生きた人間の教育が任務でした。飯田山は西海道随一の四宗兼学の道場と言われています。四宗とは禅宗・天台宗・真言宗・浄土宗を言うそうです。俊芿は治承三年十四歳の時、真俊の弟子となり十九歳の時、相俊に連れられて太宰府の観音寺に行って受戒しています。九州では僧侶の資格を与える寺は太宰府の観音寺一カ寺でした。観音寺に卒業論文を出して、試験を受けて卒業証書と僧侶の免状を貰った訳です。それから、俊芿が飯田山に帰って何年いたかは分っていません。真俊は俊芿が観音寺に行くときはもう死んでいました。

とにかく飯田山常楽寺が壱岐・対馬を含めて九州一番の大道場大学舎であったことを知っていただきたいと思います。

昭和四十九年十月二十六日、泉涌寺長老小松道円大僧正貌下、同宗務総長藤田俊教大僧正貌下が従者を従え、飯田山常楽寺に参拝されました。祖師、早年の日の修法の地を訪ねられた訳であります。

21.飯田山常楽寺の三尊仏

飯田山常楽寺のご本尊は十一面千手菩薩で、その右に不動明王、その左に毘沙門天が配されてあります。

新・熊本の歴史　巻3　中世編に熊本県立美術館学芸員の梶谷亮治氏が次のように書いています。二六一頁下段。

「十二世紀頃九州の天台寺院で用いられた特殊な三尊形式があります。中央の主尊をはさんで脇侍に不動明王像と毘沙門天像を置くものです。略。観音菩薩像がほぼ時代を同じくして分布していることは注目に値することであり、こ

うした仏像がそろって浅く整えられた衣文や下ぶくれの面相をしていることも興味深いことです。平安時代末期の九州は太宰府観音寺の丈六の諸像の造顕や、それと密接なかかわりのある宇佐、国東の造仏など、各地で集中的に多くの仏像が造られた時代です。肥後における観音菩薩の分布もほとんど時期を同じくするものであり、全く偶然のこととは思えません。ここにこそ、在地仏師の活躍をみることができると思われます」

こういう風に梶谷氏は書いています。

これは飯田山常楽寺に、そのまま当て嵌まることであります。

十二世紀と云うのは紀元一一〇〇年から一二〇〇年の間を云います。前回の広報に書きました通り飯田山常楽寺の開基は一一三〇～四〇年であります。即ち十二世紀であります。その頃九州の天台寺院で用いられた三尊形式、中央主尊の両脇に不動明王と毘沙門天を配する形式、飯田山がその通りであります。また梶谷氏は「仏像の浅く整えられた衣文や下ぶくれの面相をしているのも興味深い」と言われる通りの像容をしておられるのが飯田の十一面千手観音菩薩であります。「各地で集中的に多くの仏像が造られ、肥後における観音菩薩の分布もほとんど時期を同じくするものであり、在地仏師の活躍が偲ばれます」とあります。

今の飯田山常楽寺の主尊が十二世紀の作とは思いませんが、開基当時の主尊脇待は右梶谷氏説の通りだったと思います。それにしても、今の主尊及び歴代住職の墓地にある豪鑑墓の千手観音菩薩、円乗墓の十一面観音の面相が下ぶくれているのは最初の仏像を写したものと思われ、当時面相を残す方法があったのか、誰かが記憶していたのか、と興味が持たれるところですが、木彫のお顔が完全に廃潰しない前に次代の尊像を新彫したと考えるのが一番妥当かも知れません。そうすると、最初の遺影が続いたと言うことは、紆余曲折はあったとしても、常楽寺が何とか連綿として続いたのかも知れません。

22. 飯田山と俊芿律師

「総間から本坊の大門」まで、道はゆるやかな登り坂であった。ずっしりした量感を持つ樹の繁みの中に『拝跪聖陵』の石標があるのは、この寺が歴代天皇や皇族の陵墓の地であるからである。聖域まさしくそのほかの何ものであろう。その昔、宋に渡って戒律を学んだ俊芿は、ここにその求通の地として、この寺に新しい生命を与えたのだ。泉涌寺のきびしさは権威としてのきびしさではなく、精神のきびしさであった。

これは作家永井路子が、「泉涌寺」について書いた随想の一章であります。

泉涌寺は皇室の御香華院（御菩提院）で、三笠宮崇仁親王を総裁に仰ぎ「みてら、泉涌寺」と尊称されていますが、このお寺を開基したのが飯田山常楽寺で修業した俊芿であります。

俊芿は仁安元年八月十日、今の熊本市池ノ上町平（たいら）で生まれました。池ノ上町に池辺寺と云うお寺がありました。そのお寺の住職が珍暁と云って俊芿の叔父に当る人でした。四歳になると俊芿は、珍暁に育てられます。七歳頃から仏書を読むようになりました。九歳になると甘木荘の源憑（たのむ）の養子となります。十歳になると今の菊鹿町の相良寺に行き十四歳のとき飯田山常楽寺に登って来ます。真俊の弟子となり十九歳の時受戒して正規の僧侶になりました。真俊は当時鎮西の領神と言われた学僧で、その著に『秘密荘厳記』百巻があります。少年俊芿はこの百巻の著作に参画したと言われています。建久三年、二十七歳になると彼は学問を深めようと「二京に学ぶ」奈良・京都によりますが、自分の師とする人がいませんでした。そこで仕方なく熊本に帰って、玉名郡小岱山に正法寺と言う寺を創立します。恐らく二十七歳までは飯田山に居たことでありましょう。約七年間小岱山に籠り建久十年、三十三歳の時宋（今の中国）に渡ります。留学十三年、四十六歳、建暦元年、多くの仏像・仏画、二一三巻の仏書をたずさえて帰国しました。帰朝後の俊芿は朝野の尊信を一身に集め、天皇・女官・公卿・武家の受戒する者多く、教化は広く通俗に及んだ、と言います。建保四年泉涌寺に入り、嘉禄二年に亡くなりました。六十二歳でした。応永十八年、後小松天皇は大興正法国師の号を、明治十六年明治天皇は月

輪大師の号を賜わりました。天皇家の菩提寺を開基した高僧が飯田山から出たと言う事は益城町民は是非知っておくべきと思います。特に十四歳から二十七歳までと言うと、今で言う、中学校・高等学校・四年制大学・大学院修士課程、博士課程の期間に当ります。俊芿は飯田山で人間形成の基礎を作ったと言うことが出来ます。

23. 飯田山常楽寺 中世の石造物

飯田山常楽寺に一対の九重塔があります。この九重塔が何時建立されたかと云うことは判りませんが、日本に層塔（九重塔のような塔）が建立された年代から考えますと、鎌倉時代か、下っても南北朝時代と思われます。特に花崗岩の層塔は珍しく、熊本では熊本市川尻大慈禅寺にあるだけです。この石材が朝鮮産の花崗岩であるとして生涯をかけてその研究をなさった方が居られましたが十数年前亡くなられました。私も朝鮮から来た九重塔と思います。しかし、証拠になるものはありません。

飯田山が創立された一一三〇年から一二〇〇年ごろまでは真俊・相俊・俊芿等の大学者がいて常楽寺が盛行した時代ですが、これもそう思うだけで今は何の物的証拠も残ってはいません。ただ日本歴史に俊芿や真俊が飯田山とセットで出てきますので、このことは信用出来ることであります。

真俊・俊芿時代の一二〇〇年代とこの九重塔が建立された一三〇〇年代とがどんな風にむすびついてゆくかは判りませんが、一二〇〇年代から一三〇〇年代へと飯田山常楽寺の法灯が消えることなく続いたからこそ九重塔の建立もなされたのでありましょうから、この百年間にも何らかの歴史があるはずです。しかし、その時代、飯田山にどんな歴史があったかは知ることは出来ません。

飯田山で九重塔の次に古い石造物は鐘楼跡から上段に登る石段を上って右にある宝篋印塔の残欠であります。これには、

「応永二年三月十七日　阿闍梨祐尊為建之」

と彫ってあります。

「応永」は室町時代の初まった年代で、従って「阿闍梨祐尊」は南北朝時代の人であることが推察されます。即ち、この宝篋印塔の残欠は南北朝時代に飯田山常楽寺が存在したと言う唯一の物証であります。

次に「永享七年八月五日　宗尋」と彫った五輪塔の地輪が歴代住職の墓の上段、本明院円心とその妻揚柳院妙寿の墓の中間にあります。次に「文明十一年、村上刑部大輔逆修」と彫った宝篋印塔の残欠が「応永塔」と並んであります。次に「天文十三年……」の板碑が飯田山から高山に下る道路脇にあります。

永享・文明・天文は室町時代です。ですから室町時代も飯田山常楽寺が存在したことは明らかであります。

次に本堂前九重塔脇の杉ノ木の根元に「天正七年」銘の五輪塔の地輪が昭和四十八年までは確かにありましたが其の後見当りません。また、同年頃でしょうか。薩摩軍が赤井城を落したのが天正十三年九月ですから、天正七年か、十年頃でありましょう。木山惟久が桜見物に飯田山に登っています。その時惟久が歌った歌。

「風よりもはげしき人の心にて
　手ごとに折りし花の枝かな」

こういう歌が残り伝えられています。これは桃山時代です。そしてようやく江戸時代がやってきます。

24. 飯田山と円斉豪澄

飯田山歴代住職の墓地の上段に右に阿弥陀仏、左に地蔵菩薩の仏像墓があります。右の阿弥陀仏像墓が円斉濠澄の墓で、法名を、「本明院円心」と彫っています。左側の墓は法名を「揚柳院妙寿」とあり、円斉豪澄の妻女の墓です。夫妻の中間に灯籠があります。

宝永四丁亥天　施主揚台院
奉寄進　為　円心禅定門
　妙寿禅定尼　大菩提也
　六月吉日　妙鑑敬白

とあります。揚台院妙鑑が建てたものですが、妙鑑は円心・妙寿の息女です。

本明院円心、即ち円斉豪澄の墓には、

「本造立霊廟本尊当寺中興豪鑑禅師之先住本明院円心禅定為仏果也、寛文元辛丑白六月二十四日逝化　宝永三丙戌極月下旬　施主揚台院妙鑑」

とあります。

妙寿の墓には、

「当寺住人揚柳院妙寿禅定尼霊

位　延宝二丙寅天七月三日　孝子揚台院妙鑑敬造」

とあります。延宝二年の丙丑は甲丑の誤刻です。この夫妻が飯田山を再興された方です。

私は飯田山が没落の運命を迎えたのは天正十三年九月と思います。薩摩の軍勢が甲佐・御船・木山・赤井・津森の各城を席巻した時です。それまで阿蘇家の庇護の下にあった飯田山常楽寺は大檀那を失ってしまったのであります。阿蘇家が薩摩軍の為に滅されたからであります。

その時の住職はどうしたでありましょうか。私は飯田山に残っただろうと思います。飯田山には、「ただ喰って生きてゆくだけであれば」自給自足出来る耕地があります。当面は此処に踏み止まって天下の状況を観ようと言うことになったのであろうと思います。しかし、島津軍が薩摩に引揚げても阿蘇家は復活しませんでした。帰農した住職は農業をする為には妻帯しなければなりません。

天正十三年から寛永四年までは四十二年間であります。即ち、飯田山に阿蘇家の援助が絶えてから円斉豪澄が再建を発起するまでが四十二年間でありました。私は円斉豪澄と言う人は敗戦で帰農した住職の孫に当る人ではないかと思われてなりません。豪澄からしますと最後の住職であった祖父の代も、父の生きた時代も、常楽寺の維持管理は無惨な有様であったのであります。営繕など考えも及ばなかったことでしょう。一家の生活が精一杯だったと想像されます。寛永四年の常楽寺再興幹縁文に円斉豪澄はその時の常楽寺の有様を次のように書いています。

「百殿堂門扉漸微　甍落　春雨洗二烏瑟頂一　牆崩　秋風吹二鵝王跌一　渓谷潦柱根腐敗　山峰颼颸　梁棟傾幹　細霧霏霏香灰既濕朝煙不レ燃　片雲濛濛燈火忽滅　夕月無影也」

これを書き下し文にすると次の様になります。

「多くの迦藍門扉等の傷みも次第に酷くなりました。瓦は落ち、春雨烏瑟頂ヲ洗フ、はるさめは瓦の落ちた天上より降り込み、垣根は崩れ、秋風吹二鵝王跌一は、郡誌の間違いで、秋風吹鵝王跌、秋風吹キテ鵝王跌（ツマズキ）、秋風が吹いたぐらいで水掻を付けて安定した足を躓き、渓谷潦潦は渓谷溢潦と、これも郡誌の間違い、山の谷間から流れて来る雨水は境内に溢れ、柱根は腐れ、山の峰を伝ってくる風は颼颸たり（颼颸は風の音）梁も棟木も主要な柱も傾いてしまい、霧は迦藍の中まで立込め、香炉の灰は濕り、朝の勤めをしようにも香は燃えず、煙も上りません。片雲濛濛として灯火も忽ち消えてしまいます。この様な有様ですから、夕月無影也、秋の夕べの月も殺風景であります」

円斉豪澄はこのように当時の迦藍頽廃の有様を書いています。

鵝王＝仏の三十三相の一つ指との間にある水掻き、縵網相。

烏瑟頂＝これも仏の三十三相の一つ如来の頭のコブの様なもの肉髻のこと。

25. 飯田山常楽寺と小西行長

飯田山常楽寺が天台宗の寺院で小西行長がクリスチャン領主だった為、小西行長は飯田山常楽寺を焼き払ったと言い伝えられています。

肥後国誌には

「飯田山寺ハ天台宗大聖院常楽寺ト号ス……小西行長焼却ノ後寛永四年小堂ヲ再建ス」

とあります。また上益城郡誌には

「当時は堂宇壮厳善美ヲ尽シ、勢甚盛ナルモ、然ルニ其後小西氏ノ為に焼ルル所トナリ云々」

となっています。

これは二書共に間違いです。

前号に書きました通り飯田山常楽寺は天正十三年、阿蘇家が滅亡状態になりましたので孤立無援となり、庇護する者がいなくなってしまいました。住職は帰農し、それ以来迦藍は荒れるに任せる外はなかったのであります。これも前号の通り、寛文四年の日付で円斉豪澄は常楽寺の荒廃の有様を、

「瓦は落ち、雨は天井から降り垣根は崩れ、また雨が降れば境内には水が溢れ、柱根は腐り、梁棟は傾き、香炉の灰は濕り、片雲モウモウとして灯火忽ち消える。そのような有様で、本来風雅である秋の夕べの月も全く殺風景であります」

と書いています。

小西行長が飯田山を焼いたとするならば、天正十八年か十九年ですが、円斉豪澄が右の文章を認め

たのはそれから三十二年あとであります。三十二年あとに飯田山常楽寺の迦藍がまさに倒壊寸前の姿にしろ残っていたと言うことは小西が焼いていなかったからであります。

小西行長は武将と言うよりもむしろ行政官でした。肥後では二十四万石の領主です。すぐ前には佐々成政の失政があっています。また、天正十六年には天草五人衆の反抗もあっています。一国の統治者、しかも政務に長けた小西が宗旨の異りを理由にお寺を焼払うでしょうか。彼は領主であり、異宗と言えども、敵陣ではありません。何で焼払う必要がありましょうか。改宗させようと思えば政治的にあるいは宗教的に解決出来る問題であります。

とにかく小西行長は焼いてはいません。このことは明確にしておかないと今後の飯田山の歴史に影響します。序に申上ますと、福田寺の項でも書きましたが、福田寺も小西が焼いたことになっています。しかし福田寺も小西は焼いていないと思います。角田政治先生も六十年前に「小西は焼いていない」と理由を挙げて説明しておられます。

ともあれ小西行長・加藤清正・加藤忠広、これらの支配者と飯田山常楽寺は何の関係もありませんでした。

26. 飯田山常楽寺に違い鷹の羽の墓

飯田山歴代住職の墓で

本明院円心禅定門　（阿弥陀如来像）

揚柳院妙寿禅定尼　（地蔵菩薩像）

権大僧都法印豪鑑　（千手観音像）

本光院円乗禅定門　（十一面観音像）

揚台院妙鑑禅定尼　（薬師如来像）

右の墓碑は全部仏像墓で、また全部の墓に「違い鷹羽」の紋章が彫ってありました。

これが何を意味するか私には判りませんが、「違い鷹羽」は阿蘇家の家紋です。ですから右の方々が阿蘇家一族か、あるいは阿蘇家と関りのある家系の人であることは容易に想像されます。

阿蘇西厳殿寺に「豪円」と云う偉いお坊さんが居て、このお坊さんの位牌が飯田山にあります。豪円は寛文十年に亡くなっていますが、右の方々が豪円と同時代の人々です。豪円が亡くなった寛文十年の九年前に円心が亡くなり、妙寿は四年後になくなっています。豪鑑・円乗・妙鑑は三十年から六十年後に没しますから厳密に考えると円心夫妻が豪円と同年輩で豪鑑以下は子供か孫の年代になります。妙鑑は死亡年が分りませんが、円心・妙寿・豪鑑の墓牌を建立し円乗・妙春の墓は建立していませんので、豪鑑以後円乗以前に亡くなられた方であります。この人は明らかに円心・妙寿の子供です。豪円とは親子ほど年令の差のあった方であります。

阿蘇西厳殿寺の御本尊は十一面観音であります。円乗の墓が十一面観音であります。西厳殿寺の御本尊と同じお姿の十一面観音であります。このことは「違い鷹羽」と共に阿蘇家並に西厳殿寺と飯田山が深い関係にあったことを示します。私は次のように考えています。

円心（円斉豪澄）と妙寿の子供に、妙鑑・豪鑑・円乗がいて、妙鑑は未婚のまま一生を終えます。円心は長子の豪鑑を西厳殿寺の豪円に預けて正式の僧侶にしました。円乗に農業を継がせます。妙春は円乗の妻であると思います。そこで円心と豪円との関係でありますが、豪円の円をもらって円心とし円乗としたのは間違いありませんから、円心は豪円を崇拝していたばかりでなく、違い鷹羽から考えましても、何か近い血筋の人ではなかったかと思われます。私は豪円は円心の叔父に当る人のように思えます。父の末弟と言う感じがします。あまり想像を逞しゅうすると飯田山の歴史が小説になってしまいますが、私はこの寛永の再興の頃の飯田山の歴史は「小説よりも奇なり」と言う感じがしてなりません。

飯田山に自然石で「無銘」と、「権少僧都快俊」と彫った板碑があります。この御二人は文献の中には出てきませんが、実体が判明すれば寛永の再興に重大な役割をなさった方ではないかと思われます。円心・妙寿の御両親かも知れません。

27. 道安寺考(一)

道安寺に就いて、肥後国誌は「木山氏の祖、新田義宗の庶子右京大夫兼備後守貞昌、正平十二年（一三五七）征西将軍懐良親王に随従して、九州に下向し、同十五年九月、小弐・大友と戦い、文中三年三月（一三七四）大宰府の合戦に深手を負い、菊池に帰って死す。山鹿日輪寺に葬る。法名雲林院道安と号す。その子、右馬允のち、備後守貞元、天授元年（一三七五）家を継ぎ、のち、氏を木山氏と改む。興国六年九月死す。法名香雲院月峯と号す。後裔木山左近大夫惟政阿蘇家に従い、益城郡腰尾村を領し、迫村の城に居る。長禄二年十一月卒す。法名弓月院照武と号す。惟政弟月丸、僧にして月耽（ガッタン）と称し、享徳三年（一四五四）香雲院道安寺を開基し、木山氏の菩提所とし、山鹿日輪寺より、祖先の霊廟を境内に移す。その後、天正年間、道安寺は佐々成政のため焼失して廃寺となる。惟政の子、惟貞・文亀・永正の頃、名ある弓取りなりしも、死亡の年月、墓所不明」

となっている。

「新田義宗の子貞昌が正平十二年、懐良親王（かねながしんのう）について九州に下向した。しかし文中三年、小弐・大友と戦い戦病死する。法名を雲林院道安と号し、山鹿の日輪寺（この寺は今もある）に葬った。この人が木山氏の始祖である。末孫の木山左近大夫惟政の弟月耽（ガッタン）上人が木山氏の菩提所を開基した。始祖の法号を以て道安寺と名付けた。こういうことである。ところがここに二、三不可解な問題が出てくる。

新田義宗は新田義貞の次男であるが、生年月日が判らない。兄の義興（義貞の長男）は元弘元年（一三三一）生まれである。それからすると弟の義宗は一三三二年か三年の生まれであらねばならない。そうすると正平十二年は義宗二十五、六才で、貞昌を仮に義宗十八才の子としても、貞昌は当時七才か八才の幼童でしかない。七才か八才の幼童が懐良親王について下向したと言うのは可笑しな話ではないか。更に言うならば、第一懐良親王が九州に下向したのは正史の伝えるところに依れば、興国三年、（一三四二）で、正平十二年（一三五七）ではない。懐良親王は興国三年五月、四国の伊予から薩摩に上陸している。薩摩から、肥後八代に上陸したのは正平二年である。菊池の隈府にはいり西征府をおいたのが正平三年四月であった。懐良親王が九州に下向したときは義宗九才か十才で、隈府に西征府をおいた時でも十五、六才であった。貞昌はまだ生まれてもいない。

また、貞昌の子貞元は天授元年に家を継ぎ興国六年九月死亡したとあるが、これはもっと可笑しい。天授元年は一三七五年で興国六年はそれから三十年遡る一三四五年であるからである。即ち、貞元は生まれる三十年前に死んだことになる。闇の夜に鳴かぬ烏の声聞けば、と同じだ。

次に、同じ肥後国誌の別項には、「「木山氏は清和源氏新田氏の一族にして、後裔木山左近大夫惟興阿蘇家の客となり、嘉吉元年、益城郡腰尾に居城す。後腰尾城を木山城と改む」として「惟興―惟正惟貞―惟久―信連―信正と系譜を綴っている」

私は思うのであるが、貞昌―貞元と言う仁は実在した人だったろうか、疑わしき限りである。仮りに実在したとしても、惟興―惟正惟貞―惟久―信連―信正とはつながらないだろう。木山氏を清和源氏新田氏として、大和朝廷と結びつけるのは、木山氏に箔をつけたでっち上げで、木山氏はそんなものではなく、阿蘇一族か、又は阿蘇家の重臣ではなかったろうか。序に言えば惟興と言う仁も実在したかどうか疑わしい。仮にこれらが架空の人々で、大和朝廷とつながらぬとしても、木山氏の尊厳が下るものではない。

何れにしても、道安寺は木山氏の菩提所として実在したのであるから、今に残っている五輪塔及宝篋印塔の残欠は木山氏関係のものと考えなければならない。木山氏関係のものであるとするならば果して誰のものか、信正・信連・惟久のものではないので、残るは惟貞・惟正・惟興となる。

28. 道安寺考(二)

道安寺を考えると不可解なことがいくつかある。角田政治本、郡誌、国誌に夫々次のようなことが書いてある。

「道安寺ハ癘ニ験アリ、賽スル

ニ赤井城ノ石ヲ以テス」と。癪はギャク、おこり病のことである。おこり病とはどんな病気か私は知らないが、「賽スルニ」はお礼詣りするにと訳す。おこりが快くなりますようにと道安寺に祈願して、快くなると、お礼詣りには赤井城の石を以てす。と言うのである。これはどういうことだろうか。道安寺がなぜおこり病に効くのか。お礼詣にはなぜ赤井城の石を持参しなければならないのか。不可解なことの第一である。

第二は、道安寺に「五輪塔二基アリ、考古学者ニ依レバ南北朝ノモノカ」と角田氏は書いておられるが、今その残欠を見るに南北朝のものではない。室町後期と判断される。

昔、「五輪塔二基アリ」とすれば、それは木山惟正と惟貞のものだったろうか。宝篋印塔は開山月耽（ガッタン）のものだったかも知れない。あとでは五輪塔と宝篋印塔の残欠で奇妙な塔を作り、之をオハイトウサンと言っているが、角田説の通りオハイトウサンは御拝塔さんであったのだろう。

第三、六月二十四日の祭祀の夜は幽霊の作りものが出たと言う。また同夜は椋の老樹の根本の空洞に「飲メ飲メ」と称し、水を手向ける習慣があったと書いてある。幽霊が出て水を飲め飲めと手向ける風習とは気味の悪い話である。

第四、古書は「道安寺ハ創建以来三、四十年ハ法灯縷々トシテ明ラカニ木山氏ノ菩提ヲ弔ツタノデアル。然ルニ天正年間佐々成政ノタメニ焼失シ」と書いているが、私は佐々成政は焼失していないと思う。成政は焼く理由も、焼く余裕もなかった。秀吉が佐々成政に肥後の国主を命じたのは天正十五年六月二日であった。しかるに翌七月には早くも国衆一揆が起っている。一揆が鎮圧されたのは同年十二月であった。成政が切腹を命ぜられたのが翌十六年の五月である。この間、成政には道安寺を焼失する余裕はなかった。道安寺に気を使う心の余裕すらなかっただろう。天正十三年九月十九日、赤井城と共に木山城は島津軍のために落ちた。阿蘇家も木山氏もこのとき滅亡する。飯田山常楽寺も福田寺もこのとき廃寺となった。道安寺もこのとき檀那（保護者）を失ってしまったのである。

道安寺は佐々成政ではなく、島津に依って廃寺にされたと考えることが至当である。すると享徳三年の開基以来、四十年ではなく、天正十三年まで百三十一年間法灯は縷々として明らかだったことになる。佐々成政であれば天正十五年であるから百三十三年となり二年長くなるが。

第五、角田政治氏の木山町史を見ると「道安寺跡ニ閼迦井アリ」と出ている。閼迦井はアカイと訓む。仏に供える水を汲むとき井戸がアカイである。今も石枠で組んだ井戸があるがその井戸が閼迦井であろう。

また、角田先生は、

「道安寺一帯ヲ壇引ト云フ、攷（考）フベキナリ」

と書いておられる。上益城郡誌にも、

「道安寺ニ壇引ト云フ地名アリ、考フベシ」

とある。私は随分「考えた」家にある辞典を総動員して調べたが「壇引」なる熟語はどの辞書にも出ていない。そこで私はダンビキではなくダンイキではないかと思った。壇域が壇引に訛ったのではないかと思ったのである。壇域とは祭祀を行う中心地帯のことである。道安寺一帯は木山氏の祭祀を行う中心地帯であった。だから仏に供う閼迦井も設けられ、壇域が地名になったと承知すると、両者が納得されるのである。

判らぬことが歴史には多い。そこに推理の楽しさがある。

29. 閻魔堂下の板碑

木山町閻魔堂石段下右側にある板碑は木山町唯一の有銘板碑である。高さ一二〇糎、下幅六七糎、厚さ二七糎。上部に円相を作り種子バクが異体で丸彫してある。種子の下は四行になっていて、

奉者読大乗妙典拾参部七分全得之功也

歳運□座□禅師（字小）

□□公知蔵禅師（字大）

干時永禄九天丙寅梅月吉日逆修善根寿位施主敬白

となっている。

□□公知蔵禅師と歳運□座□禅師の逆修碑であることが知られる。この両者がどう言う関係の人であるかは判らない。

島津軍が赤井・木山城を落したのは天正十三年九月で、当時の赤井城主は木山信連（ノブツラ）で

あった。

信連の父、木山惟久は、

「惟久（紹宅）諸国巡遊中にて、赤井・木山の落城を聞き、帰るも詮なしとて筑前にとどまり、命終りぬ」

となっている。

天正十三年は一五八五年、永禄九年は一五六六年であるから、その差十九年である。

今、木山氏を中心として考えると、文禄九年は信連の子信正はまだ生まれていない。信連も幼童であった。信連の父惟久（紹宅）の時代に当る。惟久の父惟貞は存命中であったろう。惟久が赤井城主で木山城には城代として竹崎筑後守が居た頃である。

願主は禅師になっている。木山町に禅寺が有ったことが考えられる。道安寺が禅寺であったかも知れない。もし、そうだとすると、道安寺開山月耽（ガッタン）は木山氏の出であるから、道安寺二代、三代も木山氏から出ていたことが考えられる。□□公知蔵禅師は時代からすると道安寺二代に当る。歳運□座□禅師は第三代であったかも知れない。例え、この二人が道安寺関係の者でなかったとしても、永禄と云う時代が木山氏全盛時代だったことを考えると、この二人は木山氏と無縁の人ではあるまい。

逆修とは生きているとき自分で自分の碑を建立し、自分で自分を供養することである。「七分全得」もそれに因んだもので、自分が他の誰かの為に碑を建立し供養すれば、功徳は供養される人は一分、六分の功徳は自分に帰ってくると言うことで、自分で自分の碑を建立し供養するのであるから、七分が全部自分に帰ってくると言うこと。即ち、文字通り七分全得である。

円相の中の種子「バク」は釈迦如来。永禄九天の天は年に同じ、梅月は陰暦四月の異様である。

30. 山の神と小田直翁

益城町でも「山の神」は各所にありますが、今も、細々乍ら祭祀が行われている山の神が二ケ所あります。

一つは飯野校区の下鶴の山の神。一つは津森校区の寺中の山の神。

下鶴の山の神は九月十九日が祭りで井寺の浮島神社から神主を呼び、新川・上中下砥川・下鶴の代表者が山の神の神殿の前に集り、神主が祝詞（のりと）を上げ、代表者一同参拝して式を終るそうです。同所に水神さんがあります。その日の直会（なおらい）は、水神さんと上砥川の雨宮さんと三社一緒に行われるそうです。

山の神は一米十糎に一米五十糎、高さ二米三十糎の神殿に祀られています。その前面に二米五十糎方の拝殿があります。今も十日おきぐらいに拝殿に御籠りする人がいて、山の神に家内安全、無病息災を祈っているとのことです。尚、山の神には常時誰かがお詣りしているのでしょう。生花が供えてあって、ローソク・線香が箱ながら備えてありました。

御神体は四体あって木彫の男女神でした。旧像の傷みが酷く、新像を造って四体になっていますが、旧像はボロボロで、ようやく男女の識別が可能な程度でした。新像は明治四十三年に「奉彩色」として「福永半九郎・清村庄五郎・荒木亥久真」の銘がありました。これは彩色したのが明治四十三年で、新彫したのはもっと古く江戸時代であろうと思って見ました。男像が全高二十七糎、女神が二十三糎でした。所在地を詳しく書きますと、下鶴部落の出外れで、船野山の麓、下山道路の道側です。木造の鳥居もあって小さい乍ら神社の形式は整っています。

今と違って昔は生活の半分を山仕事で占めていた時代がありました。そのころ、新川・砥川・下鶴の人たちは、山仕事に行くとき、山の登り口にあるこの山の神に、今日一日の安全を祈り、帰途は無事で帰れる一日の御加護に感謝したものであります。

男神は大山祇神（おおやまつみのかみ）女神は木花開耶媛（このはなさくやひめ）です。

寺中の山の神は寺中部落の西方台地字西原にあります。桜の古木があって、その根本に自然石が置かれ「山神」と彫り、御神体になっています。祠はありません。

三月十八日が祭りでした。ここには祭祀行事の古文書があります。江戸時代のあるとき寺中字廻田部落は二十三戸だったのでしょう。二十三戸で山の神祭がなされた記録があります。山の神祭の日は、「風神さま」にも詣っていたようで、クジ引きをしてクジにあたっ

た人が正副二人「風神」に参詣しています。そのコヨリで作ったクジも残っています。

ここの山の神は「お産」の神さまと言っています。正月、女が旗を奉納する習慣があります。

お産の神様とは、子孫繁栄・五穀豊穣の神様の謂です。その日風の神さまにお詣りすることを考え合せますと、この山の神は下鶴の山の神と異って「作神さま」であろうと思われます。西原の畑の作柄を見守っておられる神さまです。八代・芦北・球磨・人吉にはコバサク（焼畑作）の豊穣を祈る山の神が無数に居られます。その神さまの同類です。作物の豊凶を司る神様であります。この山の神にお詣りすれば、働かなくとも、西原の西瓜は必ず豊作、とは限りませんが、山の神の神前にぬかずき、雑念を払い、心を統一し、一心不乱に畑作に精出せば西瓜は必ず豊作でありましょう。神様の御利益とは雑念を去り、一心不乱になることです。

この山の神を毎年守ってきたのが迫田部落の小田直翁であります。八十才の小田翁は二、三人しか詣らぬ年が続いたときも必ず自分で祝詞をあげ、数十年、祭祀を続けてきました。今年も祝詞を自書自奏しています。戦時中も続けたと言います。今年は二、三人でなく久し振りに七人が参詣されたそうです。小田翁は命の続くかぎり、山の神の祭祀を続けると言っています。

31.（古里の文化財）を訪ねて

杉原平治氏が灰塚の地蔵堂を改築した。

杉原平治氏は地蔵堂改築の理由を新堂宇に次のように認めている。

「灰塚には昔から四体の地蔵菩薩が安置されていた。村人は小供の病災を守る地蔵尊として崇拝してきたが、四体共首から上が潰滅し、堂宇も老朽した。このたび妻フジノ（八十三歳）の病気平癒に当り、仏恩感謝のしるしとして、延命地蔵菩薩を新造し、在来の地蔵尊に併祀すると共に堂宇も新装改築するものである」

まことに立派な堂宇が完成した。今までの地蔵菩薩とは比較にならぬ大きな丸彫の地蔵尊が安置されることになった。

今までの地蔵尊は前文化財保護委員坂本播義氏の調査に依れば、四体のうち三体は無銘で、有銘のものは全高四六糎、両手に宝珠を持った立像で、首から上が落されている。銘は光背上部に地蔵菩薩を示す梵字の「カ」を彫り、仏体右に「熊本長安寺□□順」仏体左に「明和九辰天正月二十四日建之」と彫ってあった。

「熊本市長安寺」は元和四年開基の浄土宗の寺で熊本市手取町にあった。寺は安永七年七月二十八日の大火で類焼した。明和九年は安永元年で、従って灰塚の地蔵尊は長安寺が大火で類焼する七年前長安寺の□順と言う和尚に依って建立されたものであった。杉原地蔵尊の左隣の地蔵尊がそれである。

無銘の三尊は有銘の地蔵尊より更に小さく、一は三一糎、他の二体は二五糎と二二糎であった。

土山の六地蔵を坂本正徳氏（現益城中学校長）は近く補足完備する由である。石工は既に加工に着工しているとのこと。土山の六地蔵は坂本正徳氏の五代の祖が建立されたもので、それを知った正徳氏が補足される。のであるから、特別奇とするに足らぬと言えばそれまでだが、杉原平治氏と言い、坂本正徳氏と言い「仏心の動き」を形に表わされる崇高な行為はやはり人々の心に刺激を与えずにはおくまい。坂本正徳の名が父祖の名と共に益城の歴史に残るように、杉原平治の名も灰塚地蔵尊と共に永遠に町民の間に語り継がれてゆくことであろう。

32.坂本家之碑

田原の坂本播義氏家敷内に大永の板碑がある。尊像は明確には不明であるが、両手に宝珠を捧げた地蔵菩薩の立像と拝見された。銘文も石面が削げていたり、摩耗していてほとんど訓めない。

尊像の右に縦枠を作り二行に「奉彫刻尊形者捧恵妙□□千□□□□七分全□□□□□□」

左にも同じく縦枠を作り二行に「寔大永四天甲甲陽月廿五日　東室秀公記室稗師寿位欽白」

と彫る。

右の二行目、七分全……とあるのは、これは「七分全得」であり。逆修碑であることが判る。大永四年は昭和五十五年から四百五拾六年前で室町時代である。「天」は「年」であり「陽月」は「十月」

である。逆修碑とは生前自分の碑を立てて供養することである。七分全得とは、亡くなった人の為に碑を建立して供養すれば七分の一が亡くなった人、即ち、供養される人の功徳となり、碑を立てた人が七分の六の功徳を受けると言われていて、従って生前、自分で自分の碑を建てると七分の七、即ち「七分全得」まるまる自分に功徳が授かると言うのである。この碑は「東室秀公記室」と言う人が自分で自分を供養された碑である。東室秀公記室が坂本家とどんな関係の人であったかはこの碑からは判らないが坂本一族は毎年一回この碑前で全員が集まり祖先供養をしている。

33. 三竹の影向石（ようごうせき）

「津森大神宮ヨリ巽ノ方ニ一ツノ丘アリ、神霊ノ立給ヘシ石アリ、影向石ト称フ」と肥後国誌にある。巽（たつみ）の方だから、津森宮から南東の方向である。

欽明帝二年（六三〇、今から一三五〇年前）丑の刻（午前二時）神武天皇の御霊が丘の頂上の石の上に御出現になった。従って御神霊が降臨された石、すなわち影向石（ようごうせき）と言うのである。

影向石は写真のように上部が三角形になっていて二条の線があり額が出ている細長い石塔で板碑と称ぶべきものであるが、熊本県の場合は大部分が自然石の板碑が多く、この種の形式のものを碑伝（ヒデ）と称して特に区別している人もいる。尚、この形式は熊本県には少なく、三竹と鹿本郡鹿央町と熊本市と三基が発見されているに過ぎない。そのうち、最大にして最古のものがこの三竹のものである。高さ一九三・〇糎、幅五三糎材質は阿蘇溶岩である。時代は鎌倉時代と推定される。何も刻銘されていない。

この板碑の横に数基の五輪塔の残欠がある。

この碑の建つ丘の頂きからは津森地区の水田が一望に見渡せる。此処は、或いは、津森地区を治めた豪族の族長の墳墓の地ではなかったろうか。

（場所）北向部落から柿迫に至る右上の小丘、途中に標木あり

34. 道上（ドウジョウ）馬場の荒神その他

応永二年塔。この塔は不可解であった。

木山町大字宮園字道安寺、真言宗醍醐派法照寺と看板の懸ったお寺と云うより個人宅と云った感じの家の前庭に五輪塔に似せた数基の寄せものがあって、その中の一基の笠（五輪塔の火輪）に「応永二亥三□　日」とある。中央に種子「ラ」を彫り、右に「□□仏子□□」「応永二年」は「ラ」の右側「仏子」と相対してあった。

応永は南北朝の講話が成立し、朝廷が統一されて、いわゆる室町時代が始まった年である。

道安寺は木山氏の菩提寺と言われている。「木山氏二代惟政弟月耽（ガッタン）和尚享徳三年香雲院道安寺ヲ開基ス」と古書にある。享徳三年は一四五四年、応永二年は一三九四年、応永は享徳より六十年も昔になる。従って、応永二年の火輪の残欠は道安寺が創建されてからのものでないことは明らかである。すなわち、木山氏関係のものではない。

そこで、この残欠は元来木山町にあったものではなく、どこからかここに移されたのではないかとの疑いが生じてくる。〇〇仏子等の刻銘塔は福田寺跡に多い。あるいはこの塔も福田寺のものではないかと思うが、果たしてどうか、何れにしても応永二年の残欠は木山の歴史とは結びつかない。形状は下幅二十九糎、上幅十糎、高十八糎。凝灰岩。

道安寺跡地蔵菩薩

道安寺跡に「法界萬霊」と彫った地蔵菩薩が祀られてある。両手に宝珠を持った立像で台石を含めて高九十二糎、丸彫の穏やかな地蔵尊であった。「寛延三午天正月吉日」の年紀銘がある。「午天」は「うまどし」と訓む。寛延三年は昭和五十七年から二百二十三年前になるが、肥後近世災家史に依ると、この年「凶作、田方虫付キ、損耗少ナカラズ」となっている。前年、寛延二年も「凶作、損耗高二十二万八千百石」とある。その前年の寛延元年も「凶作、大風ニテ本藩損耗高二十三万石」とある。「法界万霊」とは、仏法の及ぶ限りの世界のすべての霊魂を回向する、と言うことである。寛延の頃木山町も凶作で餓死者が出て、よ

うやく生き残った者がここに餓死供養塔として地蔵尊を祀ったものと考うべきであろう。

道上馬場の地蔵菩薩

道上馬場には二体の地蔵尊が祀られてある。台石に「宮園村庄間若者中」とあるから、庄間の青年団が建立したもので、年代は「延享五戊辰天二月二十四日」となっている。延享は五年で終り、寛延となる。延享五年七月二十一日から寛延元年となる。この地蔵には建立趣志はないが、道安寺地蔵と同様に餓死者の供養塔であろう。二体並んでいて正面の地蔵は新しく、右側の地蔵が延享仏である。新仏が高五十二糎、延享仏が五十糎であった。右の延享仏が、恐らく明治初年の廃仏毀釈であろうか、首が落された。村の者が自分たちで首から上を作ってセメントで胴体に乗せてみたが、出来栄えがどうも良くない。そこで衆議一決、新彫したのが、今延享仏の台石に乗っている新品仏である。こう言う場合は見ばえはともかく、やはり古仏を正面に祀ったがよい。

道上馬場の三宝荒神

道上馬場には木彫の三宝荒神も祀られてあった。三宝荒神とは仏・法・僧を守る神様であるが、不浄を嫌うことから、のちカマドの神となり、火の神、穀の神に転化してゆく。形像は逆立つ焔髪で念怒相をなし、六臂である。ところが、この荒神はどう言う訳か左右四手が切り取られてなくなっている。

最初、この木彫を馬頭観音ではないかと思って見ていたのであるが、仏頭に馬印がなく、裏に墨書して

霊験山慈光禅院現住奉州叟
奉勧請大荒神
享保十八癸丑　十月十五日

とあったので、間違いなく三宝荒神であることが分った。

享保十八年の前年は福田村谷川に放牛石仏が建立された年である。この両年も肥後は大変な年であった。

十七年は「長雨・洪水・秋凶作大飢饉、損耗高合計四十七万八千百九十石」十八年は「暴風・飢饉疾病死者多ク、野ノ草ヲ食フニ至ル」とある。

なにしろ享保・延享・寛政時代は昭和の今からは考えられないような惨憺たる時代であった。

慈光院は昔熊本市にあった寺で肥後国誌に依れば、

「本坪井三丁目、禅洞家流長院末院元和年中同院二世囲岩鉄和尚コレヲ開基ス、本尊座像の荒神ナリ、里俗火伏の荒神又ハ水荒神ト言フ、免地二畝十五歩」

とある。今はない。享保の頃奉州」と云う老僧がいたのだろう。本仏も座像で、高三十六糎、彩色がしてある。

35. 赤井の天文碑

碑の建立されている場所は赤井字上田であるが、ここは福原三四番地上村又男氏の田圃で田圃に転倒していたものを、上村氏が田圃と道路の境界に建立している。

高さ一六五糎、最大幅一〇〇糎、厚さ一六糎の堂々たる碑で、上部中央に円相を作り、釈迦如来の種子「バク」を丸彫している。

円相の下に
奉読誦大乗妙典一千部
その右に
逆修　鎮山　本願智水
その左に
法界衆生平等利益　而巳
天文十四乙巳八月吉日
敬白

と彫っている。

天文十四年は赤井城に木山惟貞が城主だった頃である。木山町閻魔堂下の永禄碑も釈迦如来を祀ったものであるが、この碑は木山町の永禄碑よりも二十一年早い。

願主智水はどういう人か判らない。逆修とは碑を建て生前に自分で自分を供養することである。智水は何偏も何偏も経典を読んで、「鎮山」山が鎮（しずまり）ますように、山も野も里もまつりごとがゆきとどき平和でありますようにと祈るのである。

「法界衆生平等利益」

「法界」とは仏法の及ぶかぎりの世界。この場合の「衆生」は人間に限らず、生きとし生ける者の意。「平等利益」ビョドウリヤクは、等しく仏の光に浴しますように、である。

即ち、「鎮山、法界衆生平等利益」を換言すると、「天下泰平、萬民安穏（あんのん）」でありますように、となる。

「而巳」と言う単語を私はこの碑で始めて見た。「而巳」は「以上」の意である。円相の直経は四四糎であった。

上村又男氏は此処で軽トラック

から車諸共転落し、また、単車でも下の田圃に落ちたことがあったそうだが、二度とも不思議に怪我はなかったと言う。又男さんの奥さんは碑の前に「花立」を設置して常時お祀りしたいと言っていた。

〈永田〉

36. 大地蔵二基

益城町には六地蔵が四基ある。四基のうち二基は土山にあり、土山の六地蔵に就いては既に書いた。残り、二基は、一基は木山神社前にあり、一基は安永で、柏木病院長柏木氏別荘にある。柏木別荘の管理は安永六八二番地芳川チヨ(八十歳)さんがしている。柏木別荘の六地蔵は全高一八〇糎、凝灰岩で、六地蔵の像容は風化して判らない、刻銘もない。柏木氏は「昭和十二年、この屋敷に三賢人、釈迦・孔子・聖徳太子の石像を建立したとき六地蔵も建立したものであろう、と言われるが、それも、そう思います、確かには判りません、と言う程度だった。六地蔵が此処に移設されたのはあるいは昭和十二年であったかも知れないが、六地蔵自体は昭和や大正ではない。土山の六地蔵は一基は江戸中期一基は江戸末期であるが、柏木六地蔵はこれより古い作であろうと思って見た。彫刻の線が太く、像容が素朴で、笠に溝を付けている様式に古さを感じた。また、この六地蔵だけが益城町では元初のままの一具を保っている。土山も木山神社前の六地蔵も後補されてたか、または一部欠落がある。

木山神社前の六地蔵は全高三三四糎と太く高い。この六地蔵も台石と竿石は元初のままである。中台、笠、宝珠は後補、がん部も後補であるが、凝灰岩の中でかん部(仏像の彫ってある六面幢)だけが花崗岩である。六地蔵は今建立されているままの方向「合掌」を正面として右廻りすると、右手宝珠右手錫杖、蓮華、宝珠(?)、幢幡、柄香炉となっている。三番目の宝珠だけが不鮮明であった。

この六地蔵と道を隔てて米村商店がある。米村商店の主婦盛子さんに「益城町の六地蔵で何時来ても献花があっているのはここだけです、と言うと「ここの隣組七戸の者の誰かが生花を絶しません」と言われた。この六地蔵さんを何と言っていますかと尋ねると、「子供の神さん」と言っていますとのことだった。

この六地蔵の台石と竿石だけは確かに古い。そして、この六地蔵さんは柏木六地蔵と異り最初から木山在のものであった。以前は木山川のほとりにあった由であるが、木山川畔にあった以前はどこにあったのだろうか。道安寺との関係は考えられないだろうか。私は竿の太さを考えると木山氏一族又は重臣に依って建立されたものではないかと思われてならないのである。町人百姓ではまだそのころまではこれほど大きな六地蔵を建立する経済力はなかったであろう。木山氏関係とするならば木山惟貞か惟久の時代であろう。天文、弘治、永禄時代になる。何れにしても、土台石と竿石だけは室町時代と考えて間違いあるまい。竿石の材質は柳水のめがね橋と同質の凝灰岩で川福山村産である。〈永田〉

註、木山の六地蔵は以前は木山四ツ角にあった。

〈松野〉

37. 四賢婦人誕生地の碑

「つよからず、また、よわからず、あずさ弓、ただ、世のためとひくも　はなつも」

これは四賢婦人の母鶴子の歌である。鶴子の子女教育の根幹はこの歌に凝聚していると言うことが出来る。四賢婦人を語るには、それよりもっと多く、母鶴子を語らねばならないと私は思う。しかし、如何せん、私には鶴子に対して何ら知る処がない。

木山町宮園三九二番地岡村義幸氏宅庭に四賢婦人誕生地の碑がある。台石からの全高は四七〇糎、塔身高は二四〇糎。塔身の頂上に「太陽」が浮彫してある。四賢婦人は世を照らす「太陽であった」と言うことであろう。

選文　徳富蘇峰
題字　落合東郭
碑文書　桑原寿堂
発起人　吉田　定
同　角田政治
同　松野豊秋
同　安田市太郎
同　仏教婦人会
同　女子青年団
設計　松原祥雲

昭和十二年八月建設

四賢婦人とは矢嶋家四姉妹のことで、久子・つせ子・かつ子(のちの楫子)貞子のことである。姉妹は九人兄妹で久子のすぐ上には

順子がいた。

父矢嶋忠左衛門直明は文政六年郡代手附横目役から唐物抜荷改方横目に昇進して、木山町宮園に移ってきた。次で芦北郡湯浦手永の惣庄屋に転じたのは天保九年三月だった。従って、宮園に居住したのは文政六年から天保九年三月までの十一年間である。この十一年間に

文政十二年　久子
天保二年　つせ子
天保五年　かつ子（楫子）
天保九年　さだ子

が、ここで生まれた。

天保九年三月湯浦に引越すとき、さだ子はまだ一ケ月にも満たぬみどり子だったとあるから、さだ子には宮園の思い出はあるまい。

久子の上の順子は竹崎茶堂に、久子は徳富一敬に嫁した。蘇峰・芦花の母である。つせ子は横井小楠の妻に、かつ子（のちの楫子）は教育者、女性解放運動家として有名。貞子は河瀬典次の妻となった。河瀬典次は横井小楠門下の俊足で、明治初年敦賀県に任官したが、やがて帰郷すると製糸等殖産興業に尽力している。（後述）子孫は東京に健在。この四姉妹が称えられるのは、元はと言えば母鶴子の家庭教育と躾の賜だった。鶴子は櫛島の三村家の人で、子女の躾は「女大学・比売鑑」にのっとり、鶴子自身の垂範を以てなされた。言うなれば鶴子の「おれにならえ」と言う全人的な体当りの感化であった。矢嶋家より四賢婦人、否、順子も加えて五賢婦人が出たのは母鶴子のそうした体当り、率先垂範の賜で、四賢婦人もさることと乍ら、私は鶴子をこそ最大限に称賛さるべきであると思惟する。

四賢婦人誕生地碑は久子の男蘇峰の選文である。碑文には句読点がない、読み易いように永田が句読点を附した。全文をここに書き写して置く。

船の山の翠色濃かに、木山川の水流清き畔りに矢嶋氏の四女は生れたり。父は矢嶋忠左衛門直明、母は三村氏鶴子、直明は剛正にして廉直、能吏として彰はる。鶴子は聰慧貞淑難苦自ら嘗め、能く家齋へ、能く子女を教養す。真に女性の典型たり。子女九人一子夭し、一人の男子と七人の女性と成育す。而して、其中の四人の女子が此処に生れたるは父直明が細候の治下に於て、此処に在官しるが為なり。久子は徳富一敬に配し、つせ子は横井小楠の夫人となり、楫子は林氏に嫁したるも所以ありて大帰す。貞子は河瀬典次の妻となる。四女皆其の個性特色あり。久子は能く大體に通じ、女丈夫の風あり。自から奉する薄くして汎く人を愛す。つせ子は容貌秀麗にして謙和、偉人に配して、奨順尤もめたり。楫子は堅忍不抜、其の半世は女性の教育に、其の後半生は女子解放と世風廓清とに盡瘁せり。貞子は女工に巧に、筆翰に長じ、倹勤能く家を守れり。自餘の同胞は何れも非凡なりき。久子は文政十二年に生れ、大正八年に逝く、行年九十一。つせ子は天保二年に生れ、明治二十七年に逝く、行年六十四。楫子は天保五年に生れ、大正十四年に逝く。行年九十三。さだ子は天保九年に生れ、大正十一年に逝く、行年八十五。比ろ、有志碑を樹てて四女生誕の蹟を永久に留めんと欲し、文を予に徴す。仍りて、聊か見聞の一班を誌して之に応す。

以上である。

この中で、久子・つせ子・楫子のこと、横井小楠・徳富一敬・また、竹崎茶堂と順子もだが、これらの人々は人口に膾炙している。で書く必要はあるまい。貞子の河瀬典次に就いてのみ概略を紹介する。

河瀬典次

天保元年生、明治三十七年没。惣庄屋。二十三歳一年間水戸に遊学。安政元年には東北遊歴を試みている。元治元年三月長崎に勝海舟を訪ね、海軍訓練所に入った。明治初年敦賀県に任官したが、まもなく帰郷した。以後養蚕・織物製糸等殖産興業に尽力し、長野溶平らと協力して温泉岳風穴に蚕種の貯蔵を試みた。

また、横井小楠紹介の冊子には「典次は小楠に謁法がられ、つねに随従して、その面倒をみ、家事向きの世話もした」

とある。

註記、四賢婦人の祖母、即ち、四賢婦人の父直明の母は小谷の富永濤庵の妹であった。直明は母の兄濤庵に「読み書き」を習っている。濤庵は前益城町長富永愛夫、現津森小学校長富永橘郎氏の祖である。

お願い。

碑文の細字を書いた桑原寿堂と言う仁が判らぬ、御存知の方は役場松野国策まで御電話御教示願い

ます。

〈永田日出男〉

38. 忠魂遥か雲に声あり
―木山城の忠魂碑―

木山城跡は地形が旧城を偲ばせるだけで旧城の遺物と言ったものは何一つ見当らなかった。数本の桜木のある奥に「帝国在郷軍人木山分会」が建立した忠魂碑だけが一基淋しく建っていた。

種田山頭火と言う俳人に

〃街はおまつりお骨となって帰られたか〃と言う句がある。

忠魂碑には丁丑の乱（ていちゅうの乱、西南戦争）から日清・日露・支那事変・大東亜戦争に到る戦没者が合祀されていた。

あるいは木山町がお祭の日も山頭火の俳句の通り戦没者の遺骨は帰ったかも知れない。

山頭火にはこんな句もある。

〃馬も召されておぢいさんおばあさん〃

農業の機械化以前は牛馬が農耕の主役だった。今の壮・青少年にはこの山頭火の意味は分かるまい。おぢいさんおばあさんどうぞ説明してやって下さい。

謹んで戦死者名を認める。

戦死者は

一、丁丑乱（西南戦争）　二名
二、日清戦争　四名
三、日露戦争　四名
四、青島の役　一名
五、支那事変　十四名
六、大東亜戦争　九十七名

以上であった。

明治十年が丁丑（ひのとうし）であることから明治十年の西南の役のことを一名丁丑の乱と言っている。丁丑の乱の二名とは小川徳平・吉田宇之吉氏であった。この二名が官軍であったのか、西郷軍だったのか、あるいは軍夫だったのか、碑からは何も判らない。木山在住の小川、吉田姓の方は自分の祖先（当主の曾祖父ぐらいだろう）にそう言う人が居なかったか調べて欲しい。

日清戦争の四人は

井上喜平・萱野伊平・豊島亀太郎・池田末吉氏である。

日露戦争の四名は

中川右一郎・深迫喜一・谷上政太郎・森島三次郎氏の四名である。

青島の役の一名は森馨氏。碑には「其他」とあったが杉原平治氏に訊ねたら、それは青島の役のことであると言われたので青島の役とした。

支那事変の十四名は

小崎久人・水俣初之助・上村優丸内正吉・佐野慶八・本田一人・松野正信・東山末義・中川龍夫・米原斌・吉村治・安部大吉・米村輝雄・和田数江氏の十四名であった。支那事変と言うのは満州事変も含めてのことだろう。

大東亜戦争になると一挙に九十七名となる。

岩村信夫・今村寛成・泉潤一郎今吉保雄・井上安之・今吉誓・井上平・堀田浩・本田鉄雄・本郷末喜・塘田小一郎・徳永末時・八十時立身・緒方鎮・尾方英一・和後秀雄・和田亘・金沢定一・金子国男・笠井正弘・吉川武・吉住実・吉住睦男・吉川正・民本清・続元生・土田秀登・永野実雄・永野正人・永野広治・中川定・中島清一内田熊男・上村春男・上村数人・内田義雄・内田学・野田軍治・野田末雄・野田清一・野田豊喜・野田利秋・矢田幸雄・山本哲・山口義孝・山本正一・山内末広・丸内逸喜・丸内直・梶原幸雄・中島友喜・本田明敏・杉野龍吉・杉原龍吉・杉原伊四郎・森田武男・森山実・祝部末治・宮本文造・三村益喜・宮原周士・北井昌隆・木村静雄・清水邑志・木村義夫・北村義夫・北井昌次・木下昌人・木村吉郎・坂本甚蔵・栄田馨・坂本鉄太郎・佐野正武・坂本直・沢田馨・坂本輝一・坂田新太郎・酒井辰己作永忠勝・坂本定・坂田清市・坂本勇・有馬常喜・荒木健一・古閑正之・後藤蕾・腰尾尚・藤技貞雄福岡龍夫・松岡立身・松島雅彦・松本財喜・松本一夫・松野正成・松野輝雄・松野徹・増本貢・森山時雄氏の九十七名であった。

この碑は大正八年に改築されている。改築したときの委員の一人が前益城町老人会会長の杉原平治氏である。杉原平治氏になぜ大正八年改築されたかを聞いた。

「以前は前木山小学校（現幼稚園）にあった。大正八年当時の日本は軍備縮小の傾向にあり、忠魂碑が小学校の校庭にあるのは好ましくないと言うことで移された」

と杉原氏は言った。一頃の軍国主義華やかなりし日本からは考えられぬ現象である。

碑の建立委員長は吉村長蔵氏。副委員長は富田繁雄氏。委員は三十名。寄附者は百三十七名。寄附金の最高は二十円、最低は一円以下で、一円以下が三十四名もある。

寄附金は最初が二百四十九円五十銭、改築時が二百三十五円、合計四百八十四円五十銭であった。

末尾に次の讃歌が

金色一片　古城　木山の里
我ら挙りて　戦友を祀る
忠魂遙か雲に声あり
偉勲永久に伝う忠烈の士

我々は二度と戦争を考えてはならない。二度と忠魂碑を建てるような愚な繰返してはならない。戦没者の霊に合掌しながら私は夫を失った妻、息子を死なせた母親の心を思った。

種田山頭火にはこんな句もある。

〃手や足は支那に残してふたたび日本に〃

我々はまた多くの戦傷者が出たことも忘れてはならない。

この碑の調査はＳ五十七年六月益城町文化財保護委員山木茂と永田が行った。

ふるさとの地名漫歩

(はじめに)

何気ない日常会話の中で、よく地名が使われている。地名とはその地域社会の中で、是認され理解される「ある場所」の名前である。

このため地名は「万人共有の文化財」と言われる。地名には全く謎の様なものもあるが、矢張りそれぞれの理由があって、名付けられている。この地名を辿れば、今は全く面影を失っていても、その時代の地形や、政治経済の跡を知り得るし、場合によっては我家の姓の始まりまで探りあてることができる。それ故に地名は別名を、「生きている化石」とも呼ばれる。

一時期、猫も杓子も合理化・近代化の名のもとに、由緒ある地名が改廃され、全国各地に「銀座」が生まれ、夕陽ケ丘の類の青春小説の中にある様な画一的な個性のない地名が、続々と誕生した。反面、熊本市での黒髪か宇留毛かの住民間の、地名論争は耳に新しいし、又、地名の安易な改廃は「文化の破壊」ではないかとの反省から民俗や歴史・地理の専門家に、市町村の都市計画担当者まで加わった、会議が川崎で開かれている。

地名はその土地の自然的条件と文化的条件によって付けられ、時代を越えて多くの人々の納得のもとに使われて来た。例えば谷間を表すのに「迫」「谷」があり、古城の存在を示唆するものに「麓」がある。又条里制の名残りに「三十五」があり、「八の坪」がある。いずれにしても益城町の一万分の一の地図で数えると、字名だけで六百に及ぶ字名がある。

無論この行政機関で使う字名以外に、村々、隣近所で使う小字があり、これを数えあげれば大変な数になる。例えば市之後には「金屋」があるし、上陳には「馬場小路」がある。このような地名の中に、実は村々の発生と歴史を物語る、鍵がひそんでいると思われるが、しかしこの全部の地名を探るのは大変なので、小学生の道草よろしく、目に止まり手に触れた地名を、口碑伝説も加えながら、次回から探って見たい。名付けて、「ふるさとの地名漫歩」

松野　国策

2.マシキ(益城・萬志岐・真敷)

まず町名の益城から始める。この名は町村合併促進法により、上下益城郡で第一番に合併した時に付けられた。その時益城にするか又中世以来有名な木山にするかで論議されたが、結局益城に決った。

益城の地名は古くは「萬志岐」の名で「和名抄」(源の順により延長八年(九三〇年)頃書かれた)にしるされる(新選事蹟通考)が、その由来は崇神天皇の御代に益城郡朝来名の峯に、上蜘蛛と呼ばれた打猴・頸猴の兄弟があり、一族を率いて大和朝廷に従わず、肥の君の先祖の健緒組に命じて、これを打たせた。土蜘蛛達はその勢威を怖れ次々と降服を始めたが手狭な城では降兵を収容できず、次第に城を築き増して収容した。これが萬志岐の起りと言われる。古語辞典によれば「岐＝キ」は城であり、周りに垣をめぐらして内と外とを区切った所で、敵を防ぐ所である。これが後に「シロ」と呼ばれるようになった。又「キ」は百済の語で、三国史記の百済の條に「潔城」を「結己」「悦城」を「悦己」と書き、「己」はkiでありキ(城)と一致するとある。

当時の城は今の熊本城などとは違い、地形を利用して防禦の材木等をおいた、つまり砦であったろう。和銅六年五月(七一三年)全国の地を嘉字二字に改める令が出され、火の国は肥国に改められたその様なふん囲気の中で、萬志岐は益城と変ったのかも知れない。

この朝来名伝説は益城町の他に富合町の木原山説もあり、いずれとも判じ難い。益城町の伝説は、舫船四人集に収載してある。古代益城の所在地は城南町であり、ここに国府がおかれ、当時の政治経済の中心であった(城南町史)

この他古文書に尾張国の益城の連、同じく真敷の毛倉、下総真敷の駅などの地名人名が見え、皆馬敷の義で、馬の牧場の事だと言う説がある。この真敷の名が現在福岡にある。

3. ツモリ（津森・津守）

知名称（前号に出づ）萬志岐の項に、津森郷の地名が出て来る。元、飽田郡に属し後益城郡に属す（新選事蹟通考）とある。この津森郷は鎌倉時代津森保と称せられ（健軍文書、天福二年二月〔一二三四〕）上益城郡誌）後又津森郷に戻る。「保」とは郷荘の義で、戸主は皆家長をもって為す。そして五家相保ちてその一人を長と為す非違ある時はその責は五家之に任ず（新選事蹟通考）とある。即ち連帯責任、運命共同体的な感覚を持っている。その支配する地域は河原村・杉堂村・上陳村・下陳村・平田村・幸中村・田原村・小谷村・戸次村・馬場楠村・曲手村・唐川村・井口村の十三ケ村で、津森宮の奇祭である「お星祭り」の御輿の遷される地域と一致する。

さてその津森の語源であるが、ツモリの「ツ」は①附ク、集ウの意。②泉ナド水の湧ク処。③港・船着場・波止場。④湛ム・溜ル。（大言海、日本国語大辞典）又①大小の水流に沿うた卑湿の地。②川沿の平地（地名の研究）の意味があり、上陳附近の地形から考えて、木山川・金山川の流入あるいは背後地からの水を集めた湿地沿いの処と見るべきか。

「モリ」とは、①神社ノ回リノ繁キ木立②神の鎮ル神籬ナド木立アル処③神社ナドアル処からマモル（守）ノ意④神ノ降下シテクル処⑤木盛ノ上畧ノ意等々あり、結局津森とは、ツ・モリの合成語で水流を集めた湿地に沿う神を祀る樹木の繁茂した場所となる。

津森は中世の文書には津守と書かれるが、前述の③のマモルの意から、津守の表現も理解される。

津森宮社伝に見竹に神武天皇が影向され、津森宮の発祥となすとあるが、圭室諦成者、熊本の歴史には、津森宮は元々津森郷開拓と同時に発祥した神社で、祭神が阿蘇大明神となったのは鎌倉時代、神武天皇となったのは江戸時代であろうと断じている。事実今に残る影向石は鎌倉後期の「碑伝」であり、この碑伝の意味がすでに忘れられた後の時代に、津森宮社伝は完成されたものであろう。

4. キヤマ（木山）

地名には多くの名付け方がある。地形によるもの、時代によるもの（政治・経済の変遷等）、又軍事に因む城や戦の跡、あるいは宗教による寺跡などがあるし、その地方一帯を治めた支配者である、豪族の姓を地名としたものもある。

「木山」はさしずめその好例で肥後国誌によれば、「木山町梅屋某家記に言う。木山氏は旧清和源氏新田氏の一族にして、太田又は馬場を称す。征西将軍懐良親王に従い九州に下向す。其の後裔を、木山左近大夫惟興と号し、阿蘇家に客として仕う。嘉吉元年（一四四一）益城郡腰尾郷に居城す。後腰尾郷を木山郷と改む。其の子、備後守惟正其の子左近惟貞、天文十六年（一書に五年と作す）居城を赤井に移し築き、木山城には家老竹崎築後を城代とす……」とあるので「木山」の地名は十五世紀に付けられた事になる。天草本渡市の木山氏の家系図によれば肥後に下った遠祖は、新田正京大夫備後守貞昌であり、いつ木山氏を名乗ったかであるが、棚町知弥著「木山紹宅伝稿」によれば、「腰尾郷が木山郷と改まったのは、菊池郡川原郷木山邑より移駐した木山氏の築城によるとの「馬場系図」説は、他に所説を見ない」とあり、事実肥後国誌には、菊池郡深川手永の条に、木山村及び木山城の記録がある。又「熊本郡区便覧」にも菊池郡の項に木山の村名の記載がある。

この馬場系図を信じれば、新田氏は菊池の木山村に居住して姓を「木山氏」に改め、それが現在の益城町木山に残った事になる。

では、腰尾の地名は消えたかと言えばそうではなく、筆者が所有する。宝暦元年（一七五一）作成の「木山古地図」によると、標題は「上益城郡沼山津手永木山町村付腰尾村絵図」とあり、地図の東方に「此の構より外は今度腰尾村に成り申す分」と記入されている。し、肥後国誌にも腰尾村　少し町在りと記載されている。

この木山は宝暦年間「町を立て候の内、村と唱え候所附け」として、その地方の政治経済の中心として「在町」となり、月三回から六回の市日が設けられた（新熊本の歴史(4)）ので、人馬の往来が激しく「馬ン糞町」の異名を取った。木山の三月の初市の始まりは案外こんな所かも知れない。

5.オヤツ（小谷）

益城町には繩文時代（櫛島遺跡等）から、人が住みついているため、古い地名が残っていると思われるが、小谷と書いて「オヤツ」と読ませるこの地名も、古い方に属しよう。

（オ）＝小さい、細かいの意で古事記一中。歌謡「葦原のしけしき袁（ヲ）屋に菅畳（すがだたみ）いやさせ敷きて我が二人寝し」（日本国語大辞典）とある。

（ヤツ）＝〔元来はヤチ〕

①アイヌ語ニテハ、沼沢地ノ意ニテ、葦等ヲ生ズル低湿ノ地ヲ言ウ中略…鎌倉近傍ニテ、やつ、又ハやと、東京附近ニテ、やト言ウ…（大言海）

②山の絶間は谷であるところからヤマタエの反（日本国大辞典）

③たに、たにあいの他、特に下総鎌倉の地で用いる。ヤツ・ヤト・ヤ共にアイヌ語起源と言う（日本国語大辞典）

④東北にヤチ（谷地）関東には、ヤツ（谷）と言う語尾をもつ地名が少なくない…中略…ヤツ地名は九州にも多く残り…中略…九州では早くその意味が忘れられたため、たとえばヤツシロを八代と…中略…うつしたまでである（熊本の歴史）

⑤おそらくは二つの高地の中間にあって、居住と耕作に便であった処、人は一方の岡の麓に住み、また近く田にもなり要害にもなる。水湿の地をヤツ又はヤトと名づけた（地名の研究）

理解の一助としていくつか文献をあげたが、これらに徴して上下小谷を対岸の堂園から見ると、低い丘陵を刻むヤツデの葉状に入り込んでいる谷間（地名を考える）であり、これが低い丘に浅い谷であるため「オ」がついたのだろう。これは地形から来た地名である。

この小谷の特徴の一つに、「去ぬる」の古語が残っている事である。今は多用されないと思うが、筆者が若年の頃は訛って、「イのい」「イにゅい」とか使われていた。津森宮神領と目される村々を十二年に一度、同じように経廻る、奇祭「おほしさん」の中で、なぜ小谷にのみ古い言葉が残り、又使われるのか。「おほしさん」伝説の中の勅使の下向に何か関連があるのかと興味深い。

6.カワツダ（河内田）

日本地名索引によれば全国で、川内田と書いて「カワツダ」と読ませるのは、この益城だけである他に字の通り「カワウチダ」と読ませるのが御船町にある。他に、川内とかいて「カワウチ」が二十七カ所、河内（又は川内）と書いて「カワチ」が七十カ所、好地・幸地・河内・高地と書いて「コウチ」と呼ぶのが四十八カ所ある。いずれも全国の数であるが、川内の下に田をつけて「カワツダ」と読ませるのは本町だけである。

これらの文字は時には当字もあるが、その主流は川内・河内である。

このカワチ又はコウチの原義は

①〔かはうちノ約〕川ノ流レメグル内ノ地（大言海）

②（「かわうち」の変化した語）川の流れを中心として、両岸一帯の地域（日本国語大辞典）

③川路の転呼・カハウチの約（同）

④かわうち＝山の中を流れる川・または水源（同）である。

これらから考えると、川内は、山の中に入りこんだ河谷に沿った平地（地名あれこれ）であり、そこは、いわゆる盆地、つまり谷水がしばしば淀んでいくぶんの平地を作る場所、渓間の小平地（地名の研究）と言う事になる。

事実、内寺部落から登りきると真正面に、「御船層群の益城町川内田東方ルートの蛇紋岩の露頭があり、川向うに蛇紋岩の風化による大きな崖崩れを見る事ができる（上益城の地質と御船層群産化石＝昭和四十七年度科学教育研究生報告）」が、これを見ながら急に左に曲ると、俗称「不動渡し」の附近から不意に目が明いた様に、川をはさんで平地が開ける。今は拓き切り又道路も車もあるので、感激は薄いが、かつてこの村を開いた先駆者は、鬱蒼たる大森林と岩を噛む川内田川の激流を通り抜け、この平地を発見した時は大変な喜びであったろう。水と平地があれば当然田を拓き米を作る。それで川内に田をつけ「川内田」と名付け、肥後流に「カワツダ」と発音したのであろう。柳水の上旧袴野道の四辻に立つ、文字削落のため判然としないが、天正時代と思われる逆修碑からも、又福田寺の存在からも、この村の発生の歴史はかなり古いのではないかと思

われる。

7. マミズ（馬水）

天明時代に肥後細川藩士寺本直廉により書かれた「肥後見聞雑記」と言う本がある。原本は県立図書館にあると言われるが、筆者の座右にあるのは、青潮社より復刻の肥後地誌集に収載されたものであるが、この益城の項に次の一節がある。現代風に意訳すると、

「上益城の内沼山津馬水村で阿蘇大神が昔、自分の乗馬に水を飼われた。その泉は大変水量が豊富であった。それでこの古事により村の名前はつけられたと村人は伝える。又昔の事はよく知らないが、明和の頃よりこの水が難病奇病を治し、誠に奇妙であると言い触らされたので、多くの人々が御賽銭を権現堂に納めて、水を取る者が数知れなかった。その後安永年間に至っても、処々方々から水を取りに来るものがあったと言う。その権現堂は泉の上にある」この泉は数年前まで堂の横にあったが、子供の広場かゲートボール場を作るためか埋められてしまった。

この伝説は十年前九十歳の老婦人の聞書では、景行天皇巡行の折この地に至って、乗馬が渇いて前足で足掻き、その蹄の下より泉が湧いたとなり、六十歳の老人は細川侯巡察の折馬に水を飼う事から地名が起ったと変化する。

このいずれにも共通するものは馬と水であるが、けだし馬水とは「真水」の謂であろう。「真」は①純粋にそれだけで、まじりもののない、全くその状態である。真白・ま水など（日本国語大辞典）②真水。塩水などのまじらない水淡水・さみず（同）③塩水ニ対シテ、マジリモノナキ普通ノ水ノ称（大言海）とあり、豊かで清澄な泉のある地形を表す地名であろう。かつては苗代の籾種の催芽に、水中に莚にくるんだ籾を浸すと、温暖な泉で順調に発芽したと言う程、地下水の高い土地であった。事実昭和二十八年前の鉄砂川は、上流の水は清らかで心を洗うに十分の水であった。又「日本には古来馬とは神霊又は貴人の乗物として用い、他の者はそう自由には馬に乗らないと言う習慣は、非常に永く続いた…」（民俗学辞典）から、この神馬信仰が後世、馬と真を混同させて、前述の貴人の馬に水を飼うと言う伝説が生まれたのかも知れない。馬水の地名は全国でここだけである。

8. アカヰ（赤井）

本町には色の名を冠した地名は数少ないが、赤井はその一つである。肥後国誌には「木山郷赤井村高四百二十八石余」「清泉・近郷無双ノ冷水懸巌ヨリ涌出ス依此水赤井ノ名アリ」とあり、赤井の名はこれより起ったかとも思われるが、現地一帯は土色岩色共に赤色を帯びており、これは溶結凝灰岩が酸化したもので主成分は酸化鉄だが、船野山系統かどうか不明である。アカとは古代地名語源辞典では、①アガ「上る」の意で、「高地・徴高地」を意味する地名用語か、②アクタ（芥）の転で「湿地」の意とも考えられる。③ハガの転で「崩壊地」を呼んだ地名。さて、西方の水田から赤井城跡を見ると、船野山から稜線が水田中に下って①の意味を形成するし、素麺滝に象徴される豊富な水量を考えると、②の意味も含まれよう。アクタとは「腐ったりなどして打ち捨てられているゴミ・クズ・チリ・廃物（日本国語大辞典）」であるが、元来「アクツ・アクトは共にアクタ（芥）の一方言である（地名の研究）」から、アクツとは「多くは川沿いで低い平地をいう。新編常陸国誌「あくつ・圷なり、一面に平なる低き地を言えり所謂塙と言う所の地の下を言えり大かた川沿いにて、水入の地に限りて言えるが如し（日本国語大辞典）」となる。こう見てくると、（赤井城跡などの小高い丘＝塙）の下に広がる（素麺滝の）水量豊かな平らな低湿地帯が「アカ」の地名の基本的な語源であろう。これに加えるに土の赤色が「赤」の地名を固定させたと思われる。又冬場の素麺滝の崖地も③ハガを考えさせるが、この要素も強くないが、少しは加わるかも知れない。

次に「ヰ」であるが、①集るの語源＝水の集る所の義、（大言海）②泉や流水から水を汲み取る所（日本国語大辞典）③「井戸」ではなく「水のあるところ」が原義で、地名の用語としてはほとんど「川」と同じに使われている。その名残りは「堰」と言う言葉でヰ（水・川）をセキ止めるからヰゼキである（古代地名語源辞典）、結局「徴高地の崖下から川

となって流れ出る豊かな水が集まり止まっている。平らな低湿地帯」が「赤井」で、地形から出た地名である。

9. ハカマノ（袴野）

ハカモンと訛って通称される。益城町役場を起点に東方約七キロの山中にある村。川内田部落を通り抜け、川内田川の上流に沿ってV字型に迫る狭谷の山道を登る。途中「ザメキ＝座女木」の坂を越えると、忽然と視界が開け人家と棚田が遠望される。谷を挟んで前方に御船町間所、手前が袴野である。今は車で登れるので苦にもならぬが、往時人馬に頼る時代には苦労の多い場所であった。袴野の人家は山肌の急斜面を切り拓き建てられている、川向うの間所は緩傾斜で対比の妙がある。戸数十九戸（五七・二・十五現在）農林業を主とする穏やかな村里である。学校は御船町間所、浅の藪と共同で袴野校区を形成し、中学生二〇名、小学生四〇名が在校する。

さて袴野をハカ・マノと分けると、ハガ・ハケ・ホキ・ホケ・ハギと言う語が考えられる。

①ハガ＝「剝ぎ」に通じる語で、「崖地」を示す地名。全国的に見られる……（古代地名語源辞典）

②剝ぎ＝山中で岩や土の露出している処。なだれの跡。山崩れ（日本国語大辞典）③ハケ＝北海道・東北・関東から西の方にかけて、丘陵山地の片岸を言う地形名（同）

④…また谷川の両岸の山のせばまっている所をホキ・ホケ・ハケと言う（地名の研究）、事実この一帯は深いV字型の峡谷であり又地滑り常襲地帯である。①②③④共に適合するので、ハケ（又はハガ）がハカに転訛したと思われる。次にマノであるが、

①マノ＝「真野」文字通り「本当の原野」「人手の加わっていない野」と言う意味か。又湾入部をマというとあり……又マが「湿地」をさす場合もあり「湿原」の意もあるかも知れない（古代地名語源辞典）、総合すれば袴野とは「山襞深く入った水流激しい谷川の、せばまった山肌で全く人手の加わらない、谷の片側の急斜面」と言う事になる。又前述の「ザメキ」は、ドウメキ・ザワメキ・ガラメキと共に、谷川の急流の水音を表す言葉である。これから想像すると、昔は一種の秘境めいた処で、肥後国誌にも、天正十三年島津勢に攻め落された赤井城主木山紹宅の妻は、幼児を乳母に背負わせ辛うじてこの袴野に隠れ住み、子孫今に袴野にあり、との記事が残る。

10. ハイヅカ（灰塚）

角田政治著「木山町誌」に「木山町の東端灰塚及び下寺中から約一里に亘り、丘陵の崖端に連続して数多の穴がある。即ち横穴と称する古墳で、何れも凝灰岩と称する太古の時の火山の噴出したる火山灰の凝結した所謂灰石と称する地質の所にある。大なるものは三四畳敷高さ四尺余奥壁は一段高く、尚壁に接して両側も一段高い凝灰岩は軟弱で、大小の横穴は既に崩壊す」の一節がある。現在はなお一層その痕跡もないと思う。

灰塚をハイとツカに分けると、ハイは、①ハガの転で「崖地」のことか、②ハリの転で「開懇地」の意とも考えられる。③又ハは、「端」を表すか。次にツカは、①「塚」「高処」などから、小高い所の意で台地を表す。②土が盛り上って小高くなった所。③転じて土墳・墓となり前述の町誌の古墳と重なる。以上から後方の畑台地が軟かい崖地（灰塚の手前の寺迫では、昭和二十八年の豪雨で崖崩れをし、大災害を出した）を露頭させて、水田地帯に接している小高い場所の意か。けだし、ここの地名が前述の灰石と古墳又は、祈禱による護摩の灰が堆積した塚に因むとは考え難い。

この灰塚で想起されるのは「灰塚会議」である。明治十年西南の役で、薩軍は田原坂で敗れ木山を拠点とした。西郷隆盛は四月十三日夜川尻より木山に移り矢部に去る。政府軍はこれを追い二十一日木山を占領翌二十二日及び二十四日の両日、参軍山縣有朋は各旅団長をこの灰塚に招集し、薩軍攻撃の部署を定めた。これは重要な会議で、各種の戦史に記録してある。

この会議の場所が灰塚の杉野主一氏宅である。筆者の間に氏から丁重な聞書を寄せられたので、都合上要約して紹介すると、母屋の二階を将校用一階を負傷兵、納屋の二階を無傷の兵の宿舎としたらしく、昭和二十九年納屋修理の際山部少尉以下三十名宿営との墨書の丸太を発見したが今は失われたとの事、又杉原三郎氏宅の巨大な納屋を官軍は、食糧補給所として

使用したとの事である。この杉野氏宅は部分的には改修しても、全体は元のままである。又「丁丑感舊録」では、薩軍本営は木山町油屋福永某宅におき、熊本隊本営を灰塚佐藤某宅に設くとある。これは現在の宮原需氏宅と推定される。

11. マエダ（前田）

筆者は終戦後俄百姓の体験がある。いわゆる「フゴ（畚）百姓」で、一町五段の耕作経験がある。当時の人力又は畜力のみに頼る農業にとって、字前田の水田は距離は近く、水の駈引きは便利で地味豊かな、耕作条件の良い上田であり、遠方の中下田を耕作する筆者には一種の羨望があった。この前田を所有耕作する人は、農地解放後は別として、一般に村々の富農層・権力者が多かった様である。

この前田は極ありふれた地名で、益城だけで八ケ所あるので、全国では大変な数であろう。又これに対すると思われるのに、向田・迎田・内田等がある。前田の所在を地図で見ると、一、二の例外はあるが、奇妙に伝承又は文献上その小地域を支配した武士の屋敷、又は寺院神社の前にあるのが多い。例えば津森では田原の浄信寺前、肥後国誌に伝える上陳の大仙寺跡の前、木山では古城の前、木山神宮の前等である。ではなぜ一軒の家毎に、その前にある田を自由に前田と名付けてよさそうなのに、その様な下名（一家族又は近隣数軒で慣用通称される、字よりもう一つ小さな地名）が認められず、特定の場所のみが認定伝世されたかと言うと、これは日本人の穀霊信仰が根底にあるからである。日本では稲を始め穀物の豊作を祈る農耕儀礼は数多く、中でも稲は穀霊信仰の中で、米は悪霊を払う呪力があると信ぜられた。国学者平田篤胤の著書にも、豆ツ魔を払うのに散米を行うの項がある。このため神に捧げる米を作る水田が特定された。この聖なる神田が前田なのである。これには前述の様に地味・水利・距離等当時の最高の水田が選定されたであろうし、その管理者は当然、祭祀の最高権威者を任命したであろう。そして時代の推移に伴ない、その神田を中心として周辺一帯が前田の地名で定着したと思われる。この様な背景の中では、神田でもない我家の田に、前田と名付ける事も出来ないし、又許されもしなかったろう。本町ではどうか判らぬが地域次第では、一族の宗家が前田を管理し、その米は氏神祭りとか先祖祭りに使い（地名の話）。又その水田の売買を禁じる習慣もある（民俗の事典）。前述の祭儀の名残りであろうか。前田の地名に先人の信仰の跡が偲ばれる。

12. ホリのウチ（堀の内）

木山より赤井に向う途中、赤井城趾を指呼の間に仰ぐ赤井川に、赤井橋がある。この川の手前で県道を挟んで、「堀の内」がある。又このすぐ東隣に「堀の口」がある。

この堀の内は「……今川家時代家臣の居あり。故に堀之内と称するなるべしとあり…堀というと今の人はただちに城砦を想像するが、堀之内は必ずしも常に戦術上のものではなかった。中古の武家は通例砦の中には住まず、戦時の防禦地は険阻の山の上にあって、平時は平地に今の大地主のようにして住んでいた。堀之内の堀はその屋敷を取り囲んだ工作物で、往々その内には田も畑もあったようである…」（地名の研究）

又「…中世以前からヤカタとか堀の内とか呼ばれているものが、その跡を残している例に出合います。その聚落ではその中心か一番奥かに一つの屋敷があって、その中に土豪が住んでいたのです…」（地名の話）。「…堀の内がある堀の内は中世の武家屋敷として知られている。いざの時の用意にその周辺に堀をめぐらしたから堀の内である」（地名研究のすすめ）と各書に説明がある。

本町の堀の内周辺は一面の水田である。もしここが前述の土豪の屋敷跡と仮定すれば、矢張り木山氏の跡と見るべきだろうか。

戦国時代各地に群雄割拠し、肥後でも国衆と呼ばれる土豪族が城砦を構えて蟠踞した。当時肥後には通算五百の城があり（肥後古城物語）その一つに赤井城がある。

城主は木山氏、始め寺迫に木山城を構え、後赤井城に移る。これらの古城については「熊本県の中世城跡」に詳しい。この木山氏は遠い伝説の人ながら又、地元の人々には身近な武将達である。

木山氏は赤井を本城として平地で日常を送ったのであろう。

半面「…ホリはハリで開懇地」

の事で「川近くの開墾地」という地名か。いずれにしても開発に関係する地名であろう」（古代地名語源辞典）との説もある。

堀の内の場所は赤井城の真下、そして同時に赤井川に沿っており双方それぞれに説得力がある。

しかし赤井城から「ヒラワタリゼ＝平渡瀬」の浅瀬を越え、堀の口を経て城主の住む堀の内に通じると言う考えをとりたい。その方が戦国時代の夢が広がる。

13. トガワ（砥川）

トガワ（砥川）

飯野校区に砥川がある。全国で砥川は四ケ所、他に戸川九ケ所、十川二ケ所、外川二ケ所、登川・土川・渡川各一ケ所がある。

肥後国誌に「砥川、小川也、当村ノ小谷ヨリ流出ツ。砥アリ剛クシテ用ヲ為シ難シト云」とあり。今の岩戸川の事を言っている。

この砥川の原義は、

①ト＝「門」の意で、「両側に山の迫った地」のことか、また「川口」（川の合流点を含む）とも考えられる。…あるいは「川の門」つまり江川の「河口」の意であろう。（古代地名語源辞典）

○海ニ出入り戸口。又、水流の出入スル処、セト、水門（大言海）○河口や海などの両岸が狭くなっている所。水流が出入りする所…（日本国語大辞典）

②トカワ＝「砥石の採れる川」と言う説もあながち否定できないが「門川」の意で、「両側に山の迫った川」ともとれる。またトカはトガ又はツガと同じく「崖」の意ハは「端」か（古代地名語源辞典）つまり背後の山谷から集まる水が、平地に流れ込む開口部附近を「トガワ」と呼んだのであろう。岩戸川も又「両岸に岩石が迫った川口」の意であろう。

この砥川村に一つの歴史がある。これは天養ー久安の頃（一一四〇年代）砥川で起きた官物強奪事件である。（新熊本の歴史3）

意訳すると、当時菊池一族と目された経盛は、地名をとって砥川経盛と称し、嫡子盛延と共に砥川にあった。経盛の歿後、当時甲佐町田口にいた伯父の田口経延、その嫡子で従兄弟の行季が砥川に押しかけ、官物徴収使である権介近依に暴行を加え、砥川より官に納めるべき、米四十三石余、稲千八百余束を運び取ったと言う事件である。この背景には当時の荘園制度等に関連する、複雑な政治経済軍事などの勢力争いがあるが、端的に言えば政府軍対反政府軍の対立が、同族である砥川・田口両氏の抗争に発展したのであろうか。

いずれにしても飯野地区は、かの常楽寺に見るように、古くから拓けた地域である。日常何気なく使う古い地名から、前述の様な思いも掛けぬ、先人の哀歓と生の葛藤の歴史を知る事ができる。地名は生きた文化財である。恣意による改変は心すべき事である。

14. インのババ（犬の馬場）

インのババ（犬の馬場）

前回に引続き砥川附近の地名を漫歩したい。砥川に「犬の馬場」がある。

このインはイ・ヌの訛転で、

①イは接頭語で「野」という意味の地名か、②又は沼池・湿池の称であろう。（古代地名語源辞典）

③犬の原意は低い意である（地名あれこれ）

④馬場とは「うまばノ約転、馬ニ乗リ習ウニ設ケタル、一帯ノ平ナル地（大言海）」とあり、この通り解釈すれば、砥川附近の丘陵地の裾で、湿地帯に作られた馬場となる。事実木山神宮附近に「ドジョウ馬場」の地名があり、一直線の道路が残るが、昔日附近の水田は膝を没する湿地帯であった。

しかしこの古語の解釈とは別に「犬の馬場＝犬追物を行なう馬場弓杖七〇杖四方を定式として垣を作り、その中央に大縄、大縄の中央に小縄という縄囲いを設ける。別名犬馬場」（大日本国語辞典）とも考えられる。肥後国誌に「砥川城跡、砥川村城ノ尾ノ中ニアリ往日砥川丹波守カ居城ト云、一説木山紹宅弘治永禄ノ比此所ニ砦ヲ築ク云、又一説ニハ紹宅木山在城ノ時粮倉ノ迹也トモ云…丹波守ト云者阿蘇家臣ノ列ニ見エス…馬入城ノ城代砥用丹波守アリ、若干地名ノ似タルヲ以テ砥川城主ト謬伝フニハアラスヤ」とあるので、誰が在城したかは別として、武士達の練磨の跡である事は間違いない。そして「犬追物…中世武士の間で盛んに行なわれたが、応仁の乱以後衰える」（広辞苑）ので、犬の馬場の地名は前回述べた砥川経盛時代より戦国初期にかけての名残りと考えられる。そして木山氏の粮倉の跡も、この経盛時代の

官物収納の粮倉の訛伝かも知れない。

この砥川城迹の事は県教委発行の「熊本県の中世城跡」に記録がある。又、郷土誌「石人」掲載の研究報告では「…真実砥川の地内には上記の「城ノ尾」の外に「犬馬場」「小屋敷」「堀端」などの字名が残っており、まずもって城跡の存在は確実視されます……城跡の所在地と考えられる「城ノ尾」…にもそれらしい遺構を残す所はありませんが」として、保育所を含む高地を城跡に推定している。

他に馬場の地名は上陳の馬場小路がある。

15. テラサコ（寺迫）

サコの地名は多い。テラサコが全国で五つ、サコが三十もある。

他にサコの名を冠した、例えば益城町では鍬迫・久保迫など多くの地名があるので、全国では無慮数千に及ぶであろう。

木山校区に寺迫がある。サコは①九州各地で「谷」（「迫」の字を使う）語源は「裂く」か「狭処」か。（古代地名語源辞典）②谷、迫（狭処ノ義カト云フ、さくト云フハ、音転ナラム（何処、いづく）、伊勢ノ山田ニテ小路ヲ、せこト言フモ狭処カト云フ。谷ノ異名。東国ニテハ、さくト云フ…（大言海）、次にタニとは、①谷、渓（水ノ垂ノ意ト云フ。朝鮮ノ古語、たん）（両山の間ノ窪キ地・ヤ・ヤツ・ハサマ（同）テラは九州方言辞典によると、傾斜地をいい、平原台地をデラと言う（地名あれこれ）とあり、字義通りに解釈すれば、傾斜地の端に位置する、両側に崖の迫った水の湧き出る窪地となる。

事実、北方木山台地から南に下る傾斜地が、木山古城の丘陵と木山神宮附近の台地に分れて、低湿地に接する。この両端の崖地に大きく囲まれた水の湧き出る窪地が寺迫と言う事になる。今はほとんど湧水もなく、又宅地造成で完全に姿を消した、かつては「弥五郎のホゲ」と呼ばえた、巨大な浸蝕谷があり、この谷は今の市之後団地のすぐ下まで迫っていた。ここでは大正時代までは二十～三十センチの鮒がとれたと言うので、昔は水量も多く典型的な迫の状態であったと思われる。寺迫の地名は前述の地型の外に、すでに滅びた東福寺（国郡一統志）と今の地蔵寺に囲まれた迫の意かとも思われるが、寺迫の地名は比較的新しく例えば肥後国誌は木山城を「当城ハ迫村ノ上ニアリ…」と誌し、幕末木山神宮奉納の絵馬には迫邑となっている。そして明治十二年になって、寺迫村に迫村、下寺中村の二区あり（熊本県郡区使覧）と始めて公式に出て来る。これらから前述のテラは村名には関係なく唯サコのみが残っており、明治期になって迫村と下寺中村が合併して、双方の名を冠して寺迫村となったのであろう。去る七月二十三日の豪雨により木山古城跡の崖が一部崩れ、五世紀の石棺が露われ中国古代の青銅鏡が一面出土した。

16. ふるさとの地名漫歩（平田）

大字平田は旧福田村を二分する大村で、現在は数区に分かれている、歴史の古い村である。

①ヒラ＝「黄泉比良坂」の用例があるように、また南島方言でヒラは「坂」であるように、古語では「傾斜地」のこと、②タ＝「処」の転（古代地名語源辞典）

つまり平田とは傾斜地のある処となろう。この地名の語源は平田上附近の地形である。平田から北向に至る町道で、人家の切れた処に立って見ると、この傾斜地の原型が見られる。背後からの丘陵が豊かな水田を拓きながら、なだらかに木山川畔に向って扇状に広がっている。

肥後国誌に「津森郷平田村、高千六十八石餘境村木樽村曲手村堤村畔林村所司宮村等小村アリ、里俗説木樽村ハ中古土中ヨリ金ノ樽ヲ掘出セシ故金樽村ト云シヲ金訛テ、キクツワ村ト称スト云ウ」とある。そのうち大部分の村が平田上の方に集り、また津森宮社伝に関連する白馬神社が木樽村にあるのも、平田村の発祥がこの附近にある事を教えている。この白馬神社の伝承の中の神馬の金の樽が日に光り、それが金樽村の由来であるとの一節は、古墳伝説と関連があろう。また境村には肥後藩の儒者嵯峨朝来の宗家の建立にかかるものか、「嘉永二己酉八月吉日嵯峨氏建立」の地蔵がある。

平田の水田は水源を金山川に依っているが、常に水不足で上流の下陳と水争いが絶えず、昭和五年七月十七日、下陳と平田の金山堰の水争いで双方に重軽傷者を出した。八月一日には分水協定が成立

した（熊本昭和史年表）当時御船にはバスは一日一往復なので、裁判のため双方が同じバスに乗り、両側の席に分れて睨み合って通ったと言う、嘘の様な話がある。

又、江戸時代の事か水争いのため平田側の赤べコ（兵児）又ジャア（又左衛門）が下陳側から殺され、その怨が残り火の玉が出た話がある。今は無いが北向の河野酒店の前から平田橋に流れるヨナ井手が両部落の境で、上井手下井手と言ったが、ここで殺されたと言う。

その墓を見たが室町時代と思われる五輪塔の残欠で、附近の地形からここで滅びた中世の寺院、二尊寺の遺物の五輪塔の空輪風輪を墓に仕立てたらしい。この墓も今は失なわれて無い。〈松野国策〉

17. ふるさとの地名漫歩（沢津原・柳水）

サフズバル（沢津原ソウズバル）
ヤナガミズ（柳水）

柳水を起点に南北の山の背を袴野に行く山道が二本ある。北は柿迫より雪野に至る。南は川内田を下に見て沢津原を抜け雪野で一本に合し、袴野・浅の藪に通じる。

この山の背に囲まれた浅いU字型で、中央が広い細長い谷が沢津原である。この谷は雪野の山麓を起点とする東沢津原、中広の中沢津原、そして西沢津原に至って双方の山が迫り、漏斗のような狭隘部が東柳水になり、柳水に臨む。

この沢津原と柳水の地名は関連するので、同時に考えて見たい。

①サワ＝浅く水がたまり草の生えている湿地。山間の広く浅い谷（日本国語大辞典）。地ノ低クシテ水ト草ノ交レル所、谷地（大言海）

②ツ＝泉など水の湧き出る処（日本国語大辞典）。附く、集ふナドノ意（大言海）③ハラ＝平で広い処、特に耕作していない平地または林（日本国語大辞典）広、平ニ通ズ或は開ノ意カ、九州ニテハ原ヲはるト云ウ。平ニシテ広キ所、耕作セヌ平地（大言海）又サフズのサフはサワ（沢）の音通か（古代地名語源辞典）

今現地は一面に乾いた畑に拓（ひら）かれ往時は想像もできないが、命名当時は周囲の森林より滲み出す水が平で未開拓の谷を一面に潤し、集って渓流となり湧水となって、柿迫や柳水に噴き出したと思われる。この状況が命名の原点であろう。又豪雨時の野水は狭隘部より奔流として下の小川に流れ込んだであろう。それを推測させるものに、益城町では現在唯一の小さな眼鏡橋が柳水にある。工人、着工時等詳細は不明であるが、目鏡橋は水流が激しい処の、主要道路に架けるのが多い様で、例えば小谷の荒瀬に今は流れてすでにないが矢嶋弥平次が架けた眼鏡橋があった（竹崎順子伝）。柳水のわずか二・三間の川幅には材木を渡すだけで十分なのを、わざわざ高い工費を掛けて石造の眼鏡橋を架けたのは、それなりの理由あっての事であり、それは矢張り水流の激しさが原因であろうかと推測される。

柳水はこの豊かな水に育くまれる柳茂る村の意か、ヤナ（簗）を仕掛ける所との両説あるが（古代地名語源辞典）、山間の小川では川下の魚獲には及ばず、矢張り柳の育つ村の方が夢がある。〈松野〉

18. ふるさとの地名漫歩（古閑）

コガ（古閑）

広安校区にある村。今は町外の移住者による新興住宅で、近代的な百四十戸の大村になったが、その昔は本道より離れた、丁度「武蔵野」の描写に似た純農村で、筆者は若い頃、妙見川に沿う轍の凍てついた真冬の夜の凸凹道を、灯もなく高下駄の緒を切るまいと、寒さに震えて歩いた体験がある。

コガ＝①空閑地の訛転、つまり空閑地（クウカンチ）が「こが（んち）」と呼ばれるようになった（熊本の地名）②空閑地を開墾した処（日本国語大辞典）

空閑地＝①未開墾の荒地田②荘園制下の免租地（日本国語大辞典）③北海道などで言う未開地…富人有力者のむさぼり取っても差支えない土地…（地名の研究）

班田収授の法を根幹とする律令時代、空閑地は本来個人占有が許されぬ未墾地であった。当時班田収授法の維持発展のためには、多くの耕地が必要で、空閑地の開墾に迫られたが、これは個人の資力に余り、様々の経緯の末、「墾田永代私有の法」や「賜田」「勅旨田」の制が施行された。しかしいずれも空閑地占有の恩恵を受けたのは皇室や貴族、大寺社であった（日本荘園史概説（抄））

古閑附近には荘園に関係すると思われる、福富・惣領・府内古閑があり、この面からも古閑の歴史を解くべきだが、古閑に「門口（もんぐち）」

の地名が残り、中村俊行氏宅裏庭に卍を彫った天正四年（？）在銘の逆修碑や、古閑を貫通する旧木山街道に沿う北原の、阿弥陀如来立像と聖観音菩薩（広崎村誌）を線刻した、弘治三年在銘の逆修碑から見て、ここには中世期の寺院の存在が窺われる。古閑はこの幻の寺院の寺領ではなかったかとも思われる。

又高速道建設に伴なう発掘調査で、弥生時代と思われる土器が出土している（熊本史学四十五号）

これらの状況から（古閑国府」説が唱えられた。国府は城南国府説、水前寺国府説などあり、この問題は専門家で結論が出ようが、律令制下の諸国の政庁として、政治軍事上の中心（日本歴史大辞典）で、中央に直結する官庁が古閑におかれたと見られるのは、その是非は別として、ここは早くから開発され、その豊かな経済力を背景にした権力と地位を持つ、ある勢力があったのであろう。〈松野〉

19. ふるさとの地名漫歩

イチのシロ（市の後）

〔付　ツジのシロ（辻の城）〕

辻の城と聞くと衝要の地を扼した古城跡を思わせるが、事実は全く違う。益城町益城第一土地区画整理組合の手で、市の後・上辻・下辻及び迫久保の一部に亘る約二三、六haの宅地造成が行なわれ、この四つの小字を合併、昭和五十七年五月一日の告示で、辻の城の地名が合成された本町で最新の地名である。①ツジ＝つむじ（旋毛）の略、路ノ縦横ニ通ジタル処。数条ノ路筋ノ打違イタル処、十字路（大言海）とあり、かつては大津や阿蘇への道や農道が交差したのであろう。②シロ＝市の後は一の城で木山氏の北の防塞跡と伝えられ、元々は今の木山農家であり市の後団地ではない。「…降ツテ永享嘉吉ノ頃ニハ早ヤ木山氏来リテ迫村ニ在城セルヲ以テ其ノ北方一帯家中ノ住屋建テラレタル事今ノ上町裏手ナル市ノ後ト言ウ処ニハ百年前既ニ長柄ノ銚子或ハ小壺ヲ発掘シタル事明ラカナリ…」（木山町誌）とあり、後を城と読み「辻の城」としたのである。この裏付けとして村の竹林中に当時のものと伝える、土を掻き上げた空堀様の土手が残る。市の後側を源五郎堀、寺迫側を弥五郎堀と呼び、西南の役までは常時水を湛えていた。当時筆者の母方の祖母は十一歳ですぐ近所に住んだが、木山での官薩両軍の戦闘の折はこの堀に首まで潰かって避難したと言うから、可成りに深かったのであろう。

市の後の村は宝永元年の木山町村古地図には無く、今の木下の小字に四戸ある。又村に残る天保九年の質地証文には、木山町村地主孫七、同村庄屋□□衛門とあり、明治十二年の地名にも木山は木山町と乙女のみであるから、当時市の後は上町下町を含め木山町そのものであった。事実市の後の旧家の先祖はほとんど上町筋から農家として移住し、残った者は上町で商家として分離して行った。

宝暦年間木山町村は在町となり市が開かれたが、それは上町筋で開かれた。後木山が附近の経済圏の中心として発展する頃、市の後も一集落を形成し、行政上市の後にある村と名付け、一の城の伝承と重ねてイチノシロと読ませたのであろう。今は木山農家の木山の二字に、市の後の発生の原点を象徴的に残している。〈松野〉

20. ふるさとの地名漫歩

ツル（鶴　津留　水流　釣）

地名の中で各地に多くあるものにツルがある。そしてこれに充てる漢字にもいくつかあって、益城では「鶴」「津留」だけであるが鹿児島・宮崎では「水流」を充てる。又「阿蘇釣」「十釣」などと「釣」を充てる地域もある。

益城では小字に平田に上鶴・下鶴があり、杉堂に津留、小谷には上津留・下津留、小池には鶴山谷赤井には西鶴といずれも、ツルの音を含んだ地名がある。飯野には下鶴部落があるなど、山間部にはツル系統の地名が多い。

日本地名索引によれば、鶴・津留・水流など五万分の一の地図に表示された地名が二十九あり、この外に鶴川などのように、ツルの音を含む地名は二百余を数える。

平田に境津留があるが、これは地図に表示のない下名（附近の人だけの呼称）であるから、これらを集めるならば、全国ではツル系統の地名は数千数万に達しよう。

ツル＝①…滝に落ちんとしてしばらくたたえた静かなる水…（古言つらノ転、連ノ意、朝鮮言つる蔓草ノ茎ノ総称。甚ダ細長ク生イ

テ、地ニ這イ又ハ物ニ絡(まつ)ワル。
(ロ)従イ行ク、トモナウ（大言海）
③「川に沿って細長く連なった平地」の称…「川の流れの緩かなところ」「築場」の説明は言語的裏付けがなく疑問。ツルは植物の蔓も動物の鶴も同語源で「連れ」と関連し、「長く連なった」ことを意味する用語…（古代地名古語辞典）結局ツルとは川が合流する所、つまり水が合流する所とか、川が大きく蛇行して作られた、細長く突き出した地形を表す言葉であり、その形に似た例えば長い首を持つ鶴とか土瓶(どびん)の弦(つる)なども、同じようにツルと呼ばれている。

飯野の下鶴は船野山と飯田山の間を、谷川が大きく蛇行する場所だし、杉堂の津留も布田川の流れに沿っている。以上はいずれも川沿いだが、小谷の上津留・下津留は木山台地が小谷の村に次第に落ち込む、細長い窪地の連なりで、いつもは水流もほとんどないが、一旦豪雨に遭うと背後の台地の雨水を集めて河川に流れ込む、いわゆる水の合流する所で、その水が細長い窪地を流れる、ツルの原義が表れた地形であろう。

〈松野国策〉

21. ふるさとの地名漫歩

シメの木（標の木）

「沼山津と広崎の境にある村の出入口である。外来者を迎えるにも出征兵士を送るにも、この村境で送り迎えた。杙(くい)の木が数本あって注連縄が張ってあった。一説には沼山津と広崎の境は底なしの沼であった。」（広崎村誌）今そこは九電変電所前のガソリンスタンドの一部になり、行政上何の必要もない地名で、その場所と地名を知る人は少ない。

シメは元々標の字を充てる。我々はある事物の存在や、境界の印に標木を立てるが、この起源は遠く中国の金石文に記録が見られる。「文字が成立する以前の伝達の方法は標識や記号で、神聖・禁止・所有・所属・身分を公示する。…その木が何等かの神聖標識として樹てられたものであり、一般に承認されれば（そこは）聖域である。標木は神聖・所有の表示として草などを結んで立てた。我国では…木に藁を結んだサイメが境界の神として各地に行なわれている。」（漢字の世界＝中国文化の原点）

シメ＝①しめなはノ略(一)山道ナドニ、先ヅ行ク人の柴ナド折リテ牓示(ぼうじ)トスルモノ、又ハ牓示トシテ立ツルモノ。モト縄ヲ結ビ付ケテ標(しめ)トセシ故ニ（即チしめなは）結(ゆ)ふト云フ。(二)占ムル事。物事ニ限リヲ立テテ入ルヲ禁ズル事。領有ノ標ニ附ケオクコト（大言海）
②「湿る」と関係する語で「湿地」の事か（古代地名語源辞典）

ヒョウ＝①シルシ、メジルシ（大言海）「ヒョウは本来は境木の立てた結果、ヒョウは境を意味し…語源は何であれ、標木の日本語はシメであり、またツクシであった（地名の研究）つまり広崎の注連縄に飾られた、杙の木に象徴されるように、標の木とは中国では神聖不可侵の標識である。後に占有や境界を示す印となり、又悪疫邪神を防ぐ塞の神と転じた。かつて農家は馬糧と緑肥を兼ねて、裏作にレンゲを作った。そして栽培レンゲの標識として藁を結んだ棒をその水田に立てた。この標を立てる習俗も標の木の地名も、遠く数千年前に発した中国の古い思想が、伝わり伝わって民間の信仰として残り、何気ない日常の生活の底流になっている事に一種の驚きと畏敬をさえ覚える。「標の木」は信仰による地名である。〈松野〉

附録一

飯田山常楽寺

前夜までの雨が、まるでウソの様な好天気に恵まれた晩秋の一日「益城町文化財を訪ねる会」の一員として、飯田山常楽寺へのハイキングを兼ねた見学に参加しました。この催しは、訪ねる会の年間計画によるもので、今回は特に益城町文化財保護委員会・益城町教育委員会との共同のものであり又、益城町の出身で、飯田山に関する研究では右に出る者はないと言われる郷土史家の永田日出男先生がおみえになると言う事で、心待ちして居た行事でありました。

定刻に顔なみじの会員諸氏、一般参加者約三十名中腹の池の所まで車に分乗し、残る約一五〇〇米を思い思いに登り始めました。紅葉には少し早い時期でしたが、深い緑の中に、ハッとする様なハゼの深紅の色どりが登り坂のつらさを忘れさせてくれます。

やがて展望所をすぎ、みだれ積み(?)の石段をのぼると、そこはもう益城町でも屈指の史跡飯田山常楽寺の境内です。

堂々たる山門、左右にひかえる仁王様の立派なこと、鎌倉時代とも又それを写して江戸時代の作とも言われるそうですが、その風格の堂々たること、時の流れの重さをひしひしと感じさせられます。

境内は飯田老人会の有志の方々が定期的に清掃されていると言うことで、無住の寺とは思えない程美しくきよめられて居りました。本堂の前で永田先生の飯田山に関するお話を拝聴しました。

それによりますと、この飯田山常楽寺は今から八三〇年ばかり前平安時代の末期に真俊という僧によって開かれたという事です。

そのころの学僧の中から、京都の皇室の御陵月の輪の陵で有名な泉桶寺の開基俊芿也、相俊等碩学の僧が多数出られたそうです。

しかし残念ながらそのころの遺跡は何も残っていないという事です。

現在私達が見る常楽寺は今から三五〇年ばかり前に再興されたものだそうです。そしてその時代の歴代住職の墓標が何と本堂四方の竹林の中にひっそりと群立しているのでした。それはもう墓標と言うより、石造文化財そのものと言ってもさしつかえない様な立派なものでした。豪鑑という方のそれは本堂御本尊の千手観音菩薩像を石に刻み写したものであり、そのほか地蔵尊のお姿のもの等々時折もれる日ざしの中にそれはもう神々しいまでの感動的な姿でした。

私も今までいくたびとなく訪れたこの飯田山にこの様な墓標群がある事は全く知りませんでした。又その竹林の中には小さな凝灰岩で作られた厨子の中に一対の男女の神様がおごそかに鎮座ましまして、その昔の人々の信仰がしのばれてほほえましく感じられました。本堂の御本尊十一面千手観音菩薩像は時の流れを失ったかの様に、まばゆいばかりの金色にかがやき時代はさだかではないが小さな歓喜仏と共に、手入れされているとはいえ朽ちかけた本堂とは何となくふつり合いの感さえあります。

そのほか細川家との関係、阿蘇家との関係、大乗仏教・山岳信仰と永田先生のお話はつきません。その博学はもとより、生まれ育ったふるさとの、この飯田山をこよなく愛しんでいらっしゃる心情に胸せまる思いでした。

飯田山の歴史については永田先生の随筆集「アマチュアの春秋」にくわしく述べられて居ります。ぜひ御一読をおすすめします。地元老人会の飯村さんの心づくしのカッポ酒に体の中から暖まり、境内の不動明王像の拓本をとって帰路につきました。

私達の周りには先人の残してくれた歴史、文化財というものがたくさんあると思います。これらを今以上に失う事なく次の世代に伝え残すことが失う事の多かった私達の世代に課せられた任務だと思います。今後もこの様な誰でも参加出来る催しを多く実施していただきたいものです。

(文化財を訪ねる会)